

ティーオーとトレーナー

皇帝紅茶

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

トウカイテイオーを無敗のウマ娘として育て上げたトレーナーとその愛馬テイオーとその仲間達の話

# 目次

テイオーとトレーナーとチーム	1
テイオーとトレーナーとチーム名	6
テイオーとトレーナーと後輩	11
チームメンバーとトレーナーと菊花賞	15
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞	24
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞へ(合宿前)	32
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞へ(合宿前半)	38
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞へ(合宿中編)	46
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞へ(合宿後編)	52
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊 花賞へ(ハプニング)	58
テイオーとトレーナーと菊花賞	66
菊花賞の後	85
テイオーとトレーナーと嫌われ葉	95
クズトレーナーとウマ娘と嫌われたト レーナー	105
テイオーとチームと彼女らに嫌われな	

	かつたトレーナー	112	テイオーとトレーナー、カサマツトレセ
	テイオーとトレーナーと新メンバー		ン学園へ
132			テイオーとトレーナーとカサマツトレセ
	トレーナーがルナから逃亡開始	144	ン前編
	トレーナーはルナから逃走中	154	テイオーとトレーナーとカサマツトレセ
	トレーナーはルナから逃げられないのか？	164	ン中編
			テイオーとトレーナーとカサマツトレセ
	テイオーとトレーナーとルナ	174	ン後編
	テイオーとトレーナー、一難去って		トレーナー達のお疲れ様会（他トレ
185			ナー前編）
	テイオーとトレーナーと出会い	197	トレーナー達のお疲れ様会（他トレ
	テイオーとトレーナーと出張	216	ナー後編）
	テイオーとトレーナーと笠松へ	223	トレーナー達のお疲れ様会（マックイ
			291
			275
			258
			248
			238

ントレーナー前編

300

トレーナー達のお疲れ様会（マツクイ

ントレーナー後編）

315



# テイオーとトレーナーとチーム

トレーナーになってはや4年目、

最初の担当馬のテイオーをクラシック、

春のシニア、秋のシニア三冠を獲得し、

URAFファイナルも優勝させることができた。

テ「はちみーはちみーはちみー！」

今ではその功績が認められ、

私にもチームを持つことになりました。

テ「はちみーをなめーると!!!」

今は新しい担当を複数持ち、

チームメンバーとして切磋琢磨に育成して…

テ「あしがー!!あしがー!!!あしがー」

ト「うるせええええええええええええええええ!!!」

「はちみー中毒者がよお!!少しは静かにしろやあああああああああ」

テ「は?トレーナーのがうるさいんだけど?！」

「それにはちみー中毒者って何？全然中毒者じゃないんだけど？」

ト「あ？お前毎日何本それ飲んでるんだよ？」

テ「毎日3本だよ」

ト「多いはボケエ糖尿病になるわ!!大体固め・多め・濃いめって何だよワケガワカンナイヨ」

テ「え？トレーナーって固め・濃いめ・多めが何かわからないのお？」

そんなこともわからないとかwwwぶうーwww」

ト「黙れ貧乳!!」

テ「スズカよりあるんだけど?!」

ト「断崖絶壁と比べてる時点で貧乳だわwww」

テ・ト・? 「「「」」」

ト「テイオーさんや…この話はやめないか…」

何か寒気つていっつか見てはいけけない景色が見えた気がするからさ」

テ「う…うん…そうだね…」

「と…ところでさ、トレーナーは今何してるの？」

ト「マイルで走れる新しいチームメンバーを探し中」

テ「…ふーん…ボクダケイレバイイノニ」



ト「あ？何しつとりしてんの？しつとりテイオーさん」

テ「トウカイテイオーだよ!!」

ト「そもそもお前中距離担当だろ？マイル走れないじゃん」

テ「そうだけどさあ…」

ト「だからチームのためマイル走れる担当増やそうかなって」

「それに俺のエースで一番はテイオーだからさ!!」

テ「まあ…それなら仕方がないかな／＼」テレ

ト「チヨロｗｗ」

テ「何か言った？」ニコニコ

ト「いや何でもないぞw」

数日後

ト「というわけでマイル担当をスカウトしてきました!!」

テ「はやっ!?!」

ト「早くチームレース参加してフレンドポイントほしいからね!!」

テ「フレンドポイントって何?!」

ト「気にするな!!というわけで、

マイル担当としてマルゼンスキーをスカウトしました!!」

マ「はぁーい、マルゼンスキーよ」

テ「トレーナーアーちよつとお話ししようか…」ガシ

ト「なんだ?あと肩痛いから離して」

テ「今まで連れてきたウマ娘を言ってみて?」

ト「はあ?な「いいから言え」…っあ…はい」

「短距離はバクシンオーだろ、マイルはマルゼンスキー、

遠距離はスーパークリーク、ダートはタイキシャトルだけど?」

テ「○ね!!」ブン

ト「うお!?あぶね!?何しやがるテメエ」

テ「トレーナーのスカウト基準って何?」

ト「おっ○いだけど?」

テ「悪びれもなく素直に言いったよこの変態トレーナー…」

ト「黙れ貧乳!!」

テ「マックイーンよりあるよ!!」

ト「ライバルをデイスるなよパクパクにされますわよwww」

?「は?メジロにきましたわ」

テ・ト「あ…」

その後、トレーナーはマックイーンに1時間ほど、プロレス技をかけられました。

またテイオーは主治医さんにお注射された…

テ「なんでもお注射されなきゃいけないのお!？」

主「それはお嬢様の主治医だからです」

テ「ワケガワカラナイヨオ!!」

## テイオーとトレーナーとチーム名

それぞれの距離にメンバーが揃い、

チームとして出発ができるようになってから

テイオーはふとある事を思い出しました。

テ「トレーナー」

ト「なんだ？」

テ「そういえばチーム名って決めてるの？」

ト「決めてるぞ!! チームおっp:ツグツハ!」ドンガラツシャン

テ「イワセネエヨ!」

ト「ウマ娘が本気で生身の人間吹き飛ばすとか犯罪だぞテメエ!!」

俺じゃなかったら死んでたわ!!」

テ「てかなんで生きてるのさ!?!」

ト「それはテイオー様のトレーナーだからです」ワケガワカラナイヨオ

テ「だいたいそんな名前にして何がいいのさ!!」

もつとかっこいい名前とかあるじゃん!!」

スピカとかシリウスとかさあ!!」

ト「そこらへんも考えたんだよねえ」

「だってチームおつ〇いにしたら、

リーダーがテイオーってwww

いたいたいたいたいたけるけるな!

脛は反則だって:ちよマジでいたい」

テ「ふんだ」

「てかカッコいい名前考えてたならそれでいいじゃん!!」

ト「ただカッコいい名前だと、

なんか中二病こじらせたみたいでさ恥ずかしいじゃん」

テ「おつ〇いのが恥ずかしいと思うんだけど?!」

ト「それにさ考えてみる例えば、

お前の憧れのシンボルドルフがさ」

テ「カイチョーが?」

ト「俺らのチームを呼ぶとした時

チームおつ〇いって呼ぶじゃん?なんか面白くね?」

テ「色々と最低な発想でドン引きだよ」

ト「普段くそ寒くてつまらんだジャレを言つて、  
エアグルーヴのライフを0にしてるくらいだし、  
たまには面白いこと言わしても罰h「ほお…」

シ「トレーナー君、誰のダジャレがつまらないだつて？」

ト「」

テ「トレーナー…」

ト「テイオー!!練習へ行くぞ!!今すぐに!!」ガシ

シ「どこへ行くのかねトレーナー君」ニコニコ

ト「や…やあ…会長様…本日もとても美しくたたた…

なんか電気がでてません?!びりびりするうううう肩強くつかまなくてもげ  
るからあ」

その後、トレーナーは、

カイチヨウに生徒会室へ引きずられていった…

シ「さて…少しお話をしようじゃないか…」

ト「」

数時間後

ト「私の秘蔵ダジャレ100連発言ったら許してもらいました!!」

テ「ええ…」

ト「ちなみに一緒にいたエアグルーヴは、

絶不調になって緊急搬送されました。」

テ「ええ…」

ト「ついでに通りすがりのナイスネイチャは、

笑いが止まらなくなりました、一緒に緊急搬送されました」

テ「ええ…」

ト「これから、2人のトレーナーへ謝罪に行ってきます。

そのため、本日のトレーニングは、リーダーあとは任せたぞ☆

テ「」

ト「あとトレーニング表作るの忘れてたから、

それもついにつく「ふん!」つぶべら!?!」ドガッシャー

その後、テイオーが作ったトレーニング表で、

練習を行った結果、

チームメンバーの育成評価がワンランク上がる快挙を見せた。

なおトレーナーは、  
エアグルーヴとナイスネイチャのトレーナーさんに、  
謝罪した後、チーム名のこと、たずなさんに絞られた。  
結局チーム名はシリウスになりました。



## テイオーとトレナーと後輩

ある日の事

トレナーがチームメンバーの練習を考えていた時

ト「クリークは当面スタミナ育成したいからプールに行かせて…マルゼンスキーとバクシンオーは根性育成として階段ダツシユ…テイオーは…」

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

? 「失礼しまーす」

ト「えつと…君は…確かテイオーにあこがれていた…サトノブラック!!」

キ「違います!!混ざってます!!」

ト「あー本当にごめんキタサンブラックか…」

「URAでテイオーの応援で来てた以来だね久しぶりだね」

キ「はい!トレナーさんお久しぶりです。」

ト「それにしても(テイオーより)成長したね」

キ「はい(身長が)大きくなりました」

ト「大きくなったねえ…」

「(テイオーよ…お前の憧れカイチョーもお前に憧れていたキタサンも大きいのに…どうしてお前だけおっp)」「オラア!!」「ウボアア!!」「ガツシャーン」

キ「トレーナーさん?!それとテイオーさん?どうして?」

テ「やあやあキタちゃん、ちよおつと変なこと考えてたトレーナーを蹴飛ばしたただけだよ」

ト「どうしてわかった?!」

テ「ふん…トレーナーの考えてることなんてお見通しだよ」

「ところでキタちゃんトレーナーに何か用?」

キ「はい、テイオーさんのチームに参加したいかなって」

テ「へえーチームに参加ってええええええ?!」

ト「マジで!?(やったぜ!!)」

テ「キタちゃん!!こんなおっぱい星人なトレーナーのチームに入るなんて、やめておいたほうがいいよ!!」

ト「は?誰がおっぱい星人だゴラア!?!」

テ「今までの行いを顧みなよ!!」

ト「ぐうのねも出ない」

キ「それでも…私はテイオーさんと一緒のチームに入りたんです」

「憧れのテイオーさんと同じスタート地点に立ちたい！そして、いつかわその憧れを超えたい！その為にはテイオーさんのトレーナーさんに色々学ぶのが一番だと思います！」

ト「だそうだ？俺は別に入ってもいい、むしろ大歓迎だぞ。どうするテイオー？」

テ「ぐぬぬ…キタちゃんがそこまで言うなら…」

キ「テイオーさん！ありがとうございます。」

テ「でも！ボクはキタちゃんに負けるつもりはないからね！」

キ「はい!!」

トレーナーさんもこれからよろしくお願いします！」

ト「ああ…よろしくな!!ところで、友達のサトノダイヤモンドはどうしんだ？もしまだチームに入っていないなら…是非ともうt「トレーナー？」いえなんでもありません。」

キ「えつとダイアちゃんは、マックインさんのチームへ入るそうです。」

ト「そうなのか…残念だな（大きかったのになあ）」

テ「」ジー

ト「な…なんだよ…」アセアセ

テ「ふんだ!!トレーナーなんて知らない!!」

ト「こいつマジで心読んでやがる…それにしてもサトノダイヤモンド…マックイーン  
のチームに入れるかなあ…」

キ「どういう意味ですか？」

ト「だってあそこのトレーナー貧乳好きでロリコン疑惑あるし…」

キ・テ「「え？」」

こうしてチームにキタサンブラックが入りました。

なお数日前マックイーントレーナーはマックイーンに「これ以上貴方好みの娘を入れ  
てしまったら、私を見てくれる時間が減るから、もう小さい子を入れてはいけませんわ  
!!それとも私しか見れなく監禁致しますわよ？」と目にハイライトがない状態で言われ  
好みの子が入れられなくなったため、サトノダイヤモンドは普通にチームに入れた

重馬怖アアア

## チームメンバーとトレーナーと菊花賞

テイオー（以下テ）、キタサン（以下キ）、タイキシャトル（以下タ）、マルゼンスキー（以下マ）、スーパークリーク（以下ク）

バクシンオー（バクシンの為、本日行方不明）

どうも、キタサンブラックです。

テイオーさんのチームに入ってから2週間ほど経ちました。

その間に、色々ありました。

まずトレーナーさんが、

「キタサンをチームレースに入れる枠なくね？」って言いだしたり、さらによくよく考えたら、チーム出走枠を増やす方法や更にチームレース出走登録の方法が分から無かったことも判明しました。

それに怒ったテイオーさんがトレーナーさんをダートに埋めてました。

その後、たづなさんに教えて貰い、無事チームレースに出走しまして、先週、枠が1つ増えたようです。良かったあ…

現在、トレーナーさんは「キタサンは長距離か中距離枠だから、他の枠を探さねば」との事で、スカウト活動してます。

何故かスカウト活動に、テイオーさんは不満ありそうでしたが・・・  
なので今は、リーダーであるテイオーさんが中心となりトレーニングに励んでいます。

トレーナーさんもよくトレーニングを見に来ますが、どちらかというトレーナー室にいる方が多いです。

そんな日々が少し続いた中、ある日ふと気になった事がありましたので、トレーナーさんに聞いてみました。それは、トレーニングが終わり、トレーナー室に集まった時でした。

ドアへバァン！

テ「トレーニング終わり〜」

ト「普通に開けてくれ・・・」

キ「テイオーさんお疲れ様です・・・」ウトウト

トレーナー室には、テイオーさん以外は私含め、既にトレーニングを終え、それぞれが自由な事をしていた。

トレーナーさんは、チーム未所属のウマ娘リストを見ながら何か考え事をしていた。

マルゼンスキーさんとタイキシャトルさんは、近所にあるナウい店がとか、よく分からない言葉を連発するせいでタイキシャトルさんが困惑していました。

なぜか私はスーパークリークさんに膝枕されました・・・

眠気とともに変な感覚を覚えつつその圧倒的な居心地の良さに・・・あつ・・・ダメだ甘えたくなる・・・語彙力がていか・・・

そんな私達を羨ましそうにチラ見するトレーナー

色々と危険だったので膝枕からひとまず離れることにしました。スーパークリークさんは残念そうな顔をしてましたが：いろいろと危なかったので：

サクラバクシンオーさんは、トレーニング終わつたと同時にどこかへ走っていったまいった・・・

テイオーさんはトトトテとトレーナーの元へ駆け寄って行きました。

テ「トレーナー！トレーナー！」

「今日のご褒美ちょうだい！」

そうテイオーさんはトレーニングが終われば、トレーナーに毎回ご褒美を要求してくるのです。

可愛いなあと思いました。毎日このくらいトレーナーさんとやり取りしてたら平和なのについて思いました。

あとご褒美か…うらやましいなって少し思ったり…

そんなテイオーさんにトレーナーさんは毎日応え、頭を撫でながら、

ト「今日もよく頑張ったなえらいぞ！さすがテイオー様だな!!」などで

テ「ニシシ…」ピコピコピコ

あんなに目を細め気持ちよさそうにして、耳をピコピコして可愛い…そして私もしてもらいたいなあ…

ト「ほら今日もご褒美のはちみーだ、毎日こんな甘い物飲んでよく飽きないよなあお前も」

そして毎日いつものはちみーをテイオーさんに手渡すトレーナー

テ「大好きだからね！毎日たくさん飲んでも飽きないよ！」

ト「大好きだからって飲みすぎんなよ…また…いやなんでもない…」

テ「…また？」

またという言葉聞いた時、少しテイオーさんの雰囲気が変わった気がします。

ト「い…いや…なんでもないよ…それよりテイオー今日は早く帰るんじゃないか

？」アセアセ

テ「あ…そうだった!!ボク用事があるんだった、またねトレーナー、みんなもお疲れ様」



ト「ああ明日な」

私含めほかの方々もそれぞれテイオーさんへ労いの言葉をかけ終わるころには、テイオーさんはトレーナー室をでて走って帰っていききました。

そしてふと思ったのですが、どうしてトレーナーさんは、テイオーさんに毎日ばかりを買って手渡ししてるのでしょうか？

手渡さずとも帰りの途中で買えるのに、お金を渡したり一緒に買いに行けばいいのに、どうして手渡しなんだろうってふと疑問に思いました。

キ「トレーナーさん」

ト「…うん？どうしたキタ」

キ「どうしてテイオーさんに毎日ばかりを手渡ししてるのかなって…帰りに買いに行けると思うのですが…」

ト「ああ…あれは、約束したんだよね」

キ「約束？」

ト「日本ダービー後にさ、お前の夢クラシック三冠取れたら毎日ばかり一本をご褒美として、手渡してやるってね」

キ「なるほど…日本ダービー後ってことは…菊花賞で1着が取れたらってことですね？」

菊花賞という言葉を使った瞬間、チームのみんながこつちを向いた。

え？なんかまずいこと言ったのかなあ…

ト「菊花賞…あ…うん…菊花賞だなあ…色々あったなあ…」

そういうと急に頭を抱えだしたトレーナーさん。

えつと菊花賞何かあったかな…確か…菊花賞は…ちようど用事があつて、観に行けなかったから、あとでニュースになったのを見たんだ…確か…

ト「そういえばキタは観に行かなかつたの菊花賞？」

キ「そうなんですよね、せっかくテイオーさんがクラシック三冠が取つたところを観に行けなくて本当に残念でした」

ト「いや…まあ…なんだろう…観に行けなくて正解だつたかもね…」

キ「え？何かありました？ニュースで知りましたけど、すごかつたじゃないですか!!」

ト「いや…まあ…ハハハ…」

「なんか頭痛がしてきた…クリーク…甘えていい？」

ク「はい…トレーナーさんこつちへいらつしやい」

ト「うん」

そういつてトレーナーさんはスーパークリークさんに膝枕されてた。

ク「あの時は大変でしたけど、よく頑張りましたねーいいいいこ」ナデナデ

ト「…うん…」

キ「ええ…：…：…：…：…：…：何があつたんですか？」

そう言うとはマルゼンスキーさんが

マ「ちなみにだけどキタちゃんは菊花賞の結果は知ってるわよね？」

知っている…：…：…：…：…：…：あれはクラシック三冠とつたことよりもニユースや新聞にも取り上げられてた…：

キ「はい…：…：…：…：…：…：確か2着とは大差を最初からゴールまでずっと維持し続けて、さらにありえないレコード叩き出したって…：」

マ「ええ…：…：…：…：…：…：あの時のテイオーちゃんはちよつと正気じゃなくてね、色々があつたのよ…：」

「あの時は異変に気付いたルドルフも、何とかしなきゃと色々頑張つてたけど最終的に菊花賞で「何あれルナ怖い…：たすけてとれーな…：」って言いながら心壊れちゃつてね…：幼児退行しちゃうし…：」

キ「ええ…：」

マ「そのあと、1週間ほどトレーナー君がつきつきりで介護して回復はしたけど…：」

キ「ええ」

私はいろいろと驚愕した…：菊花賞…：一体何があつたんだ…：ルドルフって確か…：生徒

会長のシンボリルドルフさんですよ？あの人が幼児退行？それにトレーナーさんが介護？

色々と聞きたい情報が多すぎて混乱してきた…

そんな混乱している状態にも関わらずタイキシャトルさんも

タ「アノレース、スズカと一緒に観てまシタ、あのレース観戦後にスズカ「私が今まで見ていた景色は所詮この程度だったのね…フフフ」って言って…

人が変わったように急にアメリカへ行ってしまったネ…今ではアメリカで誰も追いつけないくらい強くなってますネ…」

スズカって確か異次元の逃亡者サイレンススズカさんでしたっけ…渡米は確かにニュースになりましたけどそんなことが…

ひとまず、その菊花賞にテイオーさんに何があったのか…それが知りたい、再びトレーナーさんに聞いてみることにした。

なんかトレーナーさんおしゃぶり加えてスーパークリークさんに甘えてて聞きづらい雰囲気ですが行くしかありません。

キ「トレーナーさん…菊花賞のときテイオーさんに何があったのか教えてくれませんか？」

「憧れであるテイオーさんを知りたいのはもちろん…今後テイオーさんを超えるために

あの異常に早かった菊花賞を知っておく必要があるんです。だからお願いします」

ト「…」

「バブバブバブバブ b (仕方がないそこまでいうならいいぞ…た d)」

ク「ほらあトレナーちゃんうまく話せませんねーおしゃぶり外しましょうねえ」ツ  
ス

ト「…キタ…後悔はしないな？最悪テイオーにドン引きするかもしれん…それでもいいな…？」

キ「…はい…それでも知りたいです。」

ト「わかった…あれは…日本ダービーでテイオーが一着を取ったところ…」

一方その頃マックイーンของทีมルームでは、

サトノダイヤモンド「トレナーさんマックイーンさんがクラシックの時に走ったあの凄かった有馬記念について聞いても大丈夫でしょうか?？」

マック(ト)「つう…頭がガガガガ」

## トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞

テイオー（以下テ）、メジロマックイーン（以下メ）、医者（以下医）、トレーナー（以下ト）、メジロマックイーンのとトレーナー（以下マックイーン（ト））

テイオーとクラシックで頑張ってた頃の話

皐月賞1着、日本ダービーも見事1着をとり、ついにテイオーの夢だったクラシック三冠まで、あと菊花賞だけとなった。

テイオーの夢の為に私はより一層頑張るぞーと意気込んでいた。

そんな時、突如悲劇は起きた。

ダービー後のウイニングライブ、我が愛馬テイオーの晴れ姿を見ていた時、ふとテイオーの異変に気付いた。

もしかしたら、そんな不安がよぎり、ライブ後急いで、テイオーを病院に連れていき診察を行った。

テ「もぉ…トレーナー大げさだよ、別にボクは何ともないんだってば」

ト「万一つてこともある、一応見てもらったほうがいい」

テ「早く終わらせてよ、ボク菊花賞に向けたトレーニングを始めたんだから」

医「トウカイテイオーさん」

テ「何？」

医「太ってます」

テ・ト「「え？」」

医「太り気味です」

「甘い物はやせるまで禁止にしましょう」

テ「…えええええ!!」

医「はちみーは禁止にしてください」

テ「はちみー禁止い？いやだやだやだやだやだやだやだ」

ト「太り気味って本当ですか？」

医「本当です」

ト「やはり…道理で…ウイニングライブで服がパツツンパツツンだったのか…胸が揺れないのは仕方がないが、二の腕や太ももの肉めっちゃゆれてないか？つてなつたし…」

「それに…いつ最近はちみーばかり飲んでたし…」

「練習しながらはちみー飲んでたし…」

「臯月賞ゲートインする前にはちみー飲んてたし…」

「終いには自分ではちみー作ってたし…」

「成長期かな? って思ってたけど…太ももや腹回りばかり大きくなって、胸が全然大き  
くならなかつたから…成長期ってわけじゃn「○ねえ!!」ツグハア!!」ドガツシャーン

医「ひとまず関係ないけど注射だけ打っておきましょう」

テ「え?」

プス

テ「ナンデエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ」

翌日

テ「トレーナーオツハヨー!! いい天気だね」

ト「おい」

テ「何? トレーナー?」

ト「今右手に何を持ってる?」

テ「何って? はちみーだけ?」

ト「馬鹿かてめえ! 昨日医者にはちみー禁止って言われただろおおおおおおおおお



お

テ「いやいや控えめにしたら大丈夫だって!!」

ト「ちなみに今何本目だ？」

テ「え…えつと…1本目だよ？」メソラシ

ト「目を見て言えや…何本目だ？」

テ「3本目…」

ト「朝から3本目って…そんなんだから太るんだろ…」

テ「むう…女の子に向かって失礼だぞお!!」

ト「とにかくだ!!とりあえず!ほら体重計だ、それに乗ってみろ」

テ「え…さすがにトレーナーに見られるのは恥ずかs「いいから乗れ」はい」

ト「…嘘だろお…「わー!わー!」Kgも増えてる…」

テ「ええ…ワケガワカラナイヨオ」

ト「いやいやいやどうすんのこれ…菊花賞までにもとに戻せるかな…てかそれまでの練習にも影響するしやばいだろ…」

テ「だ…大丈夫…だし…ワガハイは無敵のテイオー様であるぞよ？」

「菊花賞なんて余裕余裕…」

ト「いやいやいやいやいやこんな重量上がったら色々と支障がくるだろ…」

「とりあえず…菊花賞までどうすればいいか放課後まで考えるから、お前は授業へ行つていって」

「あととはちみー禁止な!!右手に持つてるはちみーも没収な!!」

テ「やだやだやだやだやだやだやだ」ジタバタ

ト「うるせえ」ハチミーボツシユウ

テ「あああ!!返して返して返して!!」ポカポカポカ

ト「ダメだ!!あと殴るな!痛いわあボケエ!!はよ授業へ行けや貧乳!!」

テ「Cはあるんですけどお!」

ト「いやいやいやグラスと同バストだと貧乳なんですうw」

?「あら?これはこれは」

テ・ト「」

テ「ボ…ボク…授業へ行ってくるね…サヨウナラトレーナー…」

ト「い…いや…待って…テイオー様待って…ちよ…おn」ガシ

?「トレーナーさんゆっくりお話ししましょうかねえ」ニコニコ

イヤコレハチガウンデス

ヒンニユモタイヘンスバラシイトオモイマス

グラスサンソノナギナタハチョットマツテ



テ「え? どういうこと?」

ト「菊花賞まで、ダイエットかつ練習のため臨時講師を呼ぶことにしたよ」

テ「臨時講師?!」

ト「そうだ!! お前がはちみーを飲まないように、監視と練習を一緒に行ってくれる仲間を一時的に引き入れることにした!」

テ「え?一緒に練習?仲間?引き入れるって?もしかしてウマ娘を?」

ト「そうだ!! お前もよく知ってるやつだ」

テ「えつと誰だろう…」

ト「というわけで紹介するぞ!! お前のライバル!!」

メ「わたくしメジロマッククインですわ!!」

テ「げええ!! マッククイン!?なんでえ!?!」

メ「もちろんライバルの窮地を救うため、当然のことですわ!」

テ「マッククイン…」ジワ

ト「まあ: 確か動機は、今までさんざんダイエット中、目の前でスイーツを食べたからそのうらm「フン!」ゴキツ」バタン

テ「トレーナー!!」

マ「それではテイオーさん、よろしくお願いいたしますわ」ニコニコ

テ「えつと…なんでさん呼び？マックイーン？」

こうして、テイオーはマックイーンの協力のもと菊花賞までダイエツト+トレーニングを開始するのであった。

マ「今まで目の前でスイーツを食べた恨みをここでお返ししますわ!!テイオーの目の前ではちみーごくごくですわ!!」

マックイーン（ト）「なんか嫌な予感がするのですが…」

## トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿前）

テイオー（以下テ） マックイーン（以下マ） トレーナー（以下ト）

その他ウマ娘もですよがわかりやすい略称にします。

メジロマックイーンの協力を得て、今日から菊花賞へ向けて練習が始まった。

テ「はちみーはちみーはちみー」

「あ？はちみーだ!!」

登校中公園にいつものように、お店が来ていたので、

テイオーははちみー禁止のことを忘れ店へ向かう

店？「いつらしやいませ」

テ「硬め・濃いめ・多めで!!」

店？「はい、針の硬め・太め・長めですね」

テ「ん？」

テイオーは、店員の顔をみると…そこには

主「主治医です」

テ「なんで、お店の店員やってるお?!」

主「それは、お嬢様の主治医だからで」ワケワカンナイヨ

? 「まったく：昨日あれほどトレーナーさんに、はちみー禁止と言われていたのに：あなたはまったく：」

主治医の後ろから呆れ顔をしたマックイーンが出てきた、はちみーを飲みながら

テ「マックイーン!? ええ!! なんでえ?!」

マ「あら? 先日あなたの監視役になるといっていましたよ?」

テ「そんなあ：」

マ「さて、トレーナーさんの約束を破ったテイオーさんには罰を与えなくてはすわ」

テ「ま：まさか：」

主治医の左手を恐る恐る見た：そこには：

テ「ヒャー!! なんてお注射もってるの!?!」

主「それは、お嬢様の主治医だからで」

テ「ソレシカイエナイノー?!」

プス

テ「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その後、はちみーが飲めなかったとぶーぶー言いながら、

トレーニングに励むテイオーがいた、

少しだけ腕周りが引き締まった気がする

その数日後、

あれからもテイオーは、はちみーを飲もうと頑張ったが、どこのどの店に行ってもマックイーンと主治医がいて、お注射（栄養剤）を打たれ続けた。

嫌いなお注射を打たれながら目の前でマックイーンにはちみーを飲まれるそういった日々を過ごしていた。

もうお店では買えない。そう察したので、テイオーは次なる手を用意していた。

テ「はちみーはちみーはちみー」

「ふふふ…お店を抑えてるからってマックイーンも詰めが甘いんだから…」

テイオーは食堂調理室へ急いで向かう、はちみつと書かれた大瓶をもって

そうテイオーは定期的にお願いをして食堂調理室を借りてはちみーを作ったりした。

だがそう人生うまくいくわけもなく…

テ「え…？」

目の前に見える光景、黄色の立ち入り禁止テープで道を塞ぎ、

その先には無残になった食堂調理室があった…

テ「ど…どうして…」



そうつぶやくテイオーのその近くにいたテイオーもよく知るウマ娘が教えてくれた。同じく絶望的な顔をしているスペシャルウィークが

スペ「昨日の夜…タキオンさんが実験をしてたらしく、その…タキオンさんのトレナーさんに調理室で薬の配合をお願いしてたらしいのですが、

その分量を間違えたみたいで…調理室が爆発したみたいです…ごはん朝から食べてないのにどうすればいいんでしょうか…」

そう言うときスペは膝から崩れ落ちた

テ「そ…そんな…」ガシャーン

素晴らしい、持ってた大瓶を落とした…

テ「ああ!?! ストックのはちみつがああああ?!」

はちみつの大瓶が割れたみたいだ

スペ「はちみつ?!」

テ「スペちゃん!?!」

スペシャルウィークのはちみつと知るやいなや、

その落ちたはちみつを手で掬い舐めだした

テ「ちよつと…スペちゃん!! お腹が限界だからって汚いからやめようよーそれにそれはボクのはちみつだよお?!」

そう言いテイオーはスペを止めようとするだが

スペ「…げ…せん…」

「あげません!!」

テ「ええ!？」

呆気にとられてる間に搦り舐められそうなのはちみつは全部スペシャルウィークに舐められてしまった

放課後

テ「トレーナーアア」

ト「テイオーどうした？」

テ「はちみーが飲みたいよお」

ト「ええ…でもなあ…まだ始めたばかりだろ？」

テ「飲みたいんだよお!!」

ト「菊花賞勝てたら好きなかだけ飲んでいいからさ…我慢しようよ…な？」

テ「うう…でもお…」

ト「太ってたらバストサイズがあがるってのは迷信だしさ!!別にテイオーは小さくて

「ふん」ドコオ みぞおち…」バタン

テ「トレーナーの馬鹿ああ!!」

ト「お…おいテイオーどこ行くんだ？」

テ「トレーナーの馬鹿もう知らない!!」ツダ

そう言いテイオーはどこかへ行ってしまった

ト「…どうしたものか…俺って本当にダメだなあ…」ポリポリ

一方そのころ

マ「飲んでみましたけど、意外とおいしいですわね、ケーキやクッキーにあいますわ!!」

マツクイーン（ト）「えっと…大丈夫ですかマツクイーンさん？」

マ「大丈夫ですわ!!ちゃんと運動してますし、節制してますわ!!」

マツクイーン（ト）「な…ならいいんですけど…」

## トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿前半）

テイオー（以下テ）、ルドルフ（以下ル）、トレーナー（以下ト）  
他わかりやすいように略称してます。

前回の件から数日後のある日

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

? 「失礼するよ」ガチャ

入ってきたのは、テイオーの憧れ、現生徒会長にて、絶対的な強さと言われた皇帝シンボリルドルフであった。

私が学生の頃に知り合い、この学園に来た時彼女のお願いで、テイオーの担当になったという経緯もあつたりする。

ト「ルドルフかどうした？」

そう聞くと、ルドルフは少し不満げな顔で

ル「トレーナ君2人きりの時は、どう呼んでほしいか前から言ってるのだが……」

ト「生徒会長のシンボルドルフさんどうなされました？」

ル「すまなかつた……他人行儀はやめてくれ……ドルドルフでいいです……」プルプル  
耳をぺたんとシヨンポリドルフになつたドルドルフ

ト「はあ……で……どうした？ルナ？」

ルナと彼女の幼名を呼ぶと耳がピクリと反応し、機嫌が治つたのか少しうれしそうな表情をみせる。

がすぐに我に返り、コホンと咳ばらいをした。

ル「実はテイオーの事でな……単刀直入に聞こう、テイオーと何かあつたのかい？」

ト「少し喧嘩したかな……謝りたいんだけど、話しかけてもすぐ逃げられて捕まらなくてな……」

ル「そうか……最近、テイオーが夜な夜なトレーニングをしているみたいでね……」

ト「それは本当なのか?!」

ル「ああ……何があつたのかは知らないが、同室のマヤノトップガンが毎晩テイオーが  
出かけているのをフジキセキに教えてくれてな、そこから知って調べてみたら、トレー  
ニングをしていることが分かつた」

ト「そうか……伝えてくれてありがとう」

ル「追い込むとなんでも抱え込んで無茶をするから…テイオーの事頼んだ…」

ト「ああ…ルナもあまり心配しすぎて無茶はするなよ…お前も大概、一人で抱え込むタイプだからな」

ル「今の君を反面教師に気を付けるさ」

ト「なかなか耳が痛いところをつくな…昔のルナはやんちゃであんなに可愛かったのに」

ル「昔の話はよしてくれ…恥ずかしい…」

ト「ええ…あんなに可愛かったのに…昔はよく…ルナはトレーナーのお嫁さんに  
「／／／」ドン！ グツフミソオチ…」バタン

ル「次それを言ったらただでは済まさんぞ／／／」

ト「い…いや…もうみぞおちに「わかったな！」あつはい…」

ル「とにかく、テイオーの事頼んだぞ」

ト「ああ…」

ル「それとメジロマツクイーンが、最近食べ過ぎてて困っていると彼女のトレーナーが  
ト「それは知らん」

ルドルフに教えてもらってから、テイオーに謝りたいのとその件で、話そうとするが、逃げられるし、捕まえたとしても、「ほつといてよ！」「そんなことしてない！」など

割と強めに答えられるからなかなかうまくいかない。

### 数日後

そうこうしているうちに俺とテイオーは夏合宿へと向かうことになる。

テイオーは海だー!とテンションが上がっていた、ただ遊びに来たわけではないので、すぐに練習を始める。水着に着替えたテイオーに練習の指示をだした。

トレーニングが始まった。今回はメジロマックイーンもテイオーが練習しているときはこちらが預かるので一緒に練習をさせている。

ただマックイーンはなぜかジャージを着ていた…不思議だなあ…

日本ダービー後からテイオーもだいぶ太り気味が解消されたのか、おなか回りも引き締まってきているのがわかる、これならはちみー解禁もちかいなーって思ってきた。そうこう考えながらトレーニングを進めた。

数時間後、初めての砂浜での練習つてのもあり、疲労もなかなかたまってそうだった。なので今日は、日が落ちる前にトレーニングをやめることにし。

テイオーは、まだできると抗議していたが、初日からぶつ飛ばしても、後々響くからダメと説得し、しぶしぶ聞き分けてもらった。

トレーニング後、私はホテルの自室に戻り合宿で行うトレーニングの予定などを考えていたのだが、少し練習内容をどうするか悩んでいたのも、他のウマ娘のトレーニング

でも参考にしようかなと海辺へ向かっていた。

決して大きい娘の水着姿が見たいわけじゃなく、これはあくまでもトレーニングのヒントを得るための物だからな!!

だが現実是非常であつた：

あの娘は：ライスシャワーだけ：うん：可愛いね：ハルウララ：元気に練習してるなあ：あ？マックイーンとロリコントレーナーじゃん：やつぱり水着忘れたのかな？まだジャージだよ：あとなんかスズカがこちらをすごい形相でにらんでるけど：

一生懸命トレーニンングしている娘たちを眺めているとふと：遠くのほうで泳いでいるテイオーに気付いた。

ト「テイオー？あいつ：」

テイオーがトレーニンングをしていると気づいたトレーナーはテイオーの方へ足を進めるのであつた。

〈テイオー視点〉

トレーナーに怒鳴ってから数日が立つた。

トレーナーが謝ろうとボクのもとへ来るが、どうしても目を見て話せなくて突き放してしまっている。

あれからはちみーを絶つてはいるが、やはりどうしても我慢ができない：早く飲みた



くて、どんどん喉の渴きが広がっていくような感覚がくる。

でも、今飲んだら歯止めが利かなくなつてまた元に戻つてしまうかもしれない。

それだけは嫌だ：早く痩せれさえすれば：どうすればと考えていた時、マックイーン  
のトレーナ室である声が聞こえた。

マックイーン（ト）「マックイーンさん最近、はちみーにハマつたからつて飲みすぎで  
すよ」

マ「大丈夫ですわ!!その分たくさん運動すればよろしくてよ!!」ゴクゴクデスワ

そうか：たくさん運動すればいいのか：消費されるもんね：

たくさん運動：そうか：今よりたくさん運動すれば痩せるスピードも速くなるはず  
だよ。

それに、もっと強くなれるしいいこと尽くめじゃないか：

そう考えるようになってから、トレーニングが終わつたら毎晩公園や河川敷へ行きト  
レーニングを行うことになった。

トレーナやカイチョーに心配されたけど、強く言い返したら何も言つてこなかった。

そうこうしているうちに合宿が始まった。

合宿場についた、きれいな海にテンションがあがったが遊びに来たわけじゃない、す  
ぐに水着に着替えてトレーナのもとへ向かった。

痩せてきているとはいえ、少し水着がきつかった。

トレーナーに指示されながらマックイーンとトレーニングを始める、なぜかマックイーンはジャージを着ていた。理由を聞いたら。

「水着？わ…：忘れただけでしてよ?!」

つと強く言われた。

忘れたなんてマックイーンもおちよこちよいだなあ

砂浜での練習は足にすぐ負荷がかかっている気がしたし、すぐ疲れた。

それを察したのか、トレーナーがトレーニングを切り上げると言い出した。

まだまだ練習したいので、ボクは抗議したけど、聞き入れてくれなかった。

練習が終わり、自室に戻ったが、やはり、まだ練習がしたかったので、再び水着に着替えて、海辺へ向かった。

さつきまで練習してたし、柔軟はほどほどでいいかなと思いたいしてせず練習を開始した。

さつきまで足に負荷かけすぎたし、そんなにかからない水泳を行うことにした。

水泳をしてから数時間、泳いでいた時、足に衝撃が走った。足をつってしまったみたい。

ボクは慌てて溺れないようにもがくが、ボクがもがけばもがくほどどんどん沈んで

いった。

無理して練習した報いなのかな…ごめんね…トレーナー…そうふとトレーナーに心の中で謝りながら意識が遠のいていく…

「テイオー!!」

近くで叫んでいる声が聞こえた気がした。

## トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿中編）

ボクは昔の思い出を見ていた。

それはボクがカイチョーに憧れたきっかけ、そしてボクの夢ができた日だ、カイチョーがクラシック三冠を取った菊花賞の日、カイチョーは圧倒的な力を見せつけ見事に勝利を収めた。

ボクは居てもたつてもいられなくなり、カイチョーが記者会見している場所へと向かっていった。

だけど…

テ「ここ…どこ…?」

ボクは迷子になっていた。

急がなきゃ…カイチョーが記者会見を終えて帰ってしまう。

そうなつたらボクの思いを告げられない、いろいろな感情が沸き上がり泣きそうになつていると…

? 「どうしたの君？」

後ろから声をかけられた。

ボクは振り向くと、そこには一人の青年が心配そうに話しかけてきた。

……………

身体が重たい…あれ…ボクどうしたんだっけ…

確か…海でおぼれて…で…今…どうなったんだっけ…

？「い…お」

？「て…お…」

テ「ん…」

重い臉を開けるとぼんやりとだが涙目のトレーナーがそこにいた

テ「ト…トレ…ナー…」

テイオーはぼんやりとしながらそう返事をした…

ト「テイオー…よかった…本当によかった…」

トレーナーはテイオーを力強く抱きしめた

テ「トレーナー痛いよ…」

ト「ああ…ごめんな…本当にごめんな…」

抱きしめる力は弱まっていく…それとともにトレーナーは震えていた。

きつとボクのために泣いているんだろうと分かった。

ボクは…トレーナー…を泣かせてしまった…

トレーナーに言われてたことを守らず勝手にやったこのボクを…

そんなことを考えていたらボクも涙が出てきた…色々な感情が抑えられなくなってきた。

テ「うん…ぼ…ボクもごめんな…さい…トレエ…ナア…ゴメン…」ヒッグヒッグ  
2人ともいつしか、外にいるのに、大声でわんわん泣いていた。

数分間泣き続けた…トレーナーは、ボクより先に落ち着いたのか、ボクを温かく抱きしめながら頭を撫でてくれた、その撫でてくれる手はとても温かく、ボクは自然と落ち着いていった。

テ「トレーナー…勝手に無理な練習をして、ごめんなさい…」

ボクは改めてトレーナーに謝った。

ト「テイオーが謝る必要はないよ…そもそも俺がテイオーの気持ちが変わってやれなかったから…色々と焦ってたんだよな本当にごめんな」

ずるいよ…そんなこと言われたらこれ以上謝れなくなるじゃないか…

テ「うん…ボク…はちみーも早く飲みたかったし、それにトレーナーに元に戻った事で、安心してほしくて…痩せるためには、運動しまくって汗を流せばいいと思ったんだ、たくさん強くなれるしいいことづくめだと思って…」

ト「そうか…：テイオー」

テ「なに？」

返事をしたとき、トレーナーはテイオーの頭に手を乗せ

ト「一生懸命テイオーなりに頑張ったな偉かったぞ」

素晴らしいテイオーをゆっくり撫でた

テ「ちよ…：トレーナーくすぐりたいよ／／」

先ほど撫でてくれた時は温かいと感じていたが、

褒められながら撫でられるのってなんだかむずかゆいけどそれ以上に、うれしかった。

数秒間撫でてもらった後、トレーナーは撫でている手を戻した。

テ「っあ…」

少し名残惜しそうにするテイオー

ト「さて…：ホテルに戻るか、もう日が落ちてるしな、明日は大事を取って午前は休み  
な」

テ「うん…：わかった」

そう答えると、トレーナーは

ト「ほらおぶるから背中に乗れ」

テ「ええ…さすがに、帰る途中誰かに見られたらはずか s 「いいか乗れ」…はい…」  
ト「こういう時はトレーナーに甘えるつてもんだろ」

テ「…なにそれ…」

ト「そういうもんなの」

テ「…うん」

トレーナーの背中におぶってもらいながらゆっくりホテルまで帰った。

トレーナーの背中つてこんなに広いんだね…

とても居心地がよくて気持ちよかった…なんだか…眠たくなってきた…

ト「テイオー？」

寝息を立てている…どうやらテイオーは寝てしまったようだ

ト「寝ちやったか…明日からもよろしくな相棒」

そう口ずさみ、起きないようにゆっくりと目の前にあるホテルの入り口に向かった。

その光景を自室の窓から見ていたルドルフは、うまく関係が戻ったことを察し安堵した。

一方そのころ

マックイーン「トレーナーさんもつと声を出しなさいませ!」

マックイーン（ト）「えつとマックイーンさんこれ以上声を出すと、隣の部屋の方にこ



迷惑が「いいから」…はい」

マツクイーン「さあ行きますわよ!! かつ飛ばせーユーターカー!! さあトレーナーさんも!!」

マツクイーンは自分のトレーナーがいる部屋で撮りためていた野球を観戦していた。

翌日、テイオーが朝ご飯を食べに食堂へ向かっていると、廊下でマツクイーンとマツクイーンのトレーナーが「私は昨晚騒ぎすぎて、隣の部屋で寝ていたブライアンを怒らせました」と書かれた札を首にかけて正座させられていたそうなの

# トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿後編）

合宿も最終日、最後の練習とのこともあり、

各ウマ娘普段も一生懸命だがそれ以上に頑張つて練習していた。

勿論、テイオーもその中に含まれる。

そのテイオーの練習を見ていたトレーナーは最近少し悩んでいた。

テ「あの一件からテイオーのスキンシップが増えた気がする…」

やけに最近引っ付いてくるし、

事あるごとに抱き着いてくる…暇なときは私の部屋によく遊びに来るし…

元々信頼し合う仲ではあるとは思っていたが

前回の一件で、LikeというよりLove寄りになってね？ボクだけみてよとか言

い出してしつとりしだすぞ…

重馬がくるか…まずいぞ…

いや好かれるのはうれしいよ？可愛い娘にスキンシップされるのもうれしいよ？

でも重いのはキツイですわ…

あーいつぞやのルナとかも苦労したなあ…あとあいつも…

ただ重馬場の経験がある私だからこそちゃんと対処すれば…うん大丈夫だな!!

そう自分に言い聞かせたトレーナー、

シニアの春あたりで地獄を見ることを知らず

そういうえば、もう太り気味は解消されたし、

はちみー禁止も解消だとテイオーに伝えないとなあ

そう考えていたら、後ろから誰かに抱き着かれた。まあ一人しかいないんですけど、

テ「トレーナー走り込み終わったよー」

うーんやっぱスキンシップ多いよなあ…

ト「テイオーちよつといいか」

テ「なにトレーナー？」

そういうとテイオーは抱き着いていた手を放してくれたので、テイオーの前に振り向いた。

ト「明日からはちみー飲んでいいぞ、十分スリムになったし目標は達成したと思うし  
」

トレーナーがそういうとテイオーは少し顔を下に向け考え出した。

あれ？喜ぶとおもったんだけど…

テ「えっと…トレーナーはちみーはまだ禁止でいいかな？」

予想外な回答が来た

ト「え？どうして？飲みたかったんだろ？もう痩せるといふ目標は達成できたと思う  
しいいんだぞ？」

テ「えっと…以前トレーナーは菊花賞勝てたら好きただけ飲んでいいって言ったよね  
？」

そういえばそんなこと言った気がする…

テ「だから菊花賞まで我慢する」

テイオーの顔を見る、本気の顔であった。そしてその目は決意が宿った目であった。

ト「そうか…なら菊花賞勝つぞ、テイオーを絶対に勝たせる！頑張ろうな！」

テ「うん!!それでねトレーナーお願いがあるんだ」

ト「お願い？」

テイオーは顔を赤くしながら上目遣いでってナニコレ可愛くね？

写真撮っていい？その写真大量に焼き増しして売っていい？その金で焼肉食べに  
行つていいか？

テ「えつとね／＼／ボク毎日練習やレースを頑張るからそのご褒美が欲しんだ」

ト「ご褒美かあ…ご褒美の内容は？」

ここでいいぞと即答してもいいかもしれないが、無理難題な要求をされたらたまつたもんじやないので、まずは内容を聞くことにした。

テ「えつと／＼／」

もじもじしてるなあ…自室のカギをくれとか…ボク以外の女を見るの禁止とか言わるんじやねこれ？

テ「毎日褒めながらナデナデしてほしいかな…／＼／」

良馬だったあ！よかったあ！

ト「ああいいぞ」

テ「じゃあ早速お願いしてもいいかな？／＼／」

そう言うと、テイオーは頭を前に差し出した。

その頭を優しく撫でた。

ト「合宿最後まで頑張ったな！さすが俺の相棒だぜ！」

テイオーは嬉しいみたいだ、しつぽや耳の動きがそう物語っている

その後、数秒間は褒めつつ撫でた。終わった後にふとひらめいた。

ト「あ…そうだとテイオー、菊花賞勝てたその日から毎日ちみー本俺からプレゼントするよ」

テ「本当に？」

ト「ああ約束だ!!」

そういうとすぐくうれいのかテイオーは勢いよく抱き着いてきた。

テ「約束だよ!!絶対だよ!!」ギュー

ト「おう:」ギチギチギチギチ

抱き着く力強すぎ折れる:

こうして合宿最終日は終わった。

菊花賞まであと1か月と数日

次の日、合宿へ帰るため、バスに乗るテイオーとトレーナー

テ「あれ?マックイーンがないんだけど?」

ト「え?」

一方そのころ

マ「ゴールドシップさんに教えてもらった場所に行きましたのに、これは一体どういうことですか?お店なんてどこにもないじゃない?!」

数時間前、ゴールドシップにあの海岸から5キロ先にある離島に、伝説級に美味しいカキ氷屋があると聞いたマックイーンは、居てもたつてもいられず、水着は持つてきて

いないので、ジャージを着たまま、泳いで離島まで来ていた。

だがその離島は無人島であったため、そんな店はなかった。

数時間後、ビシヨビシヨで意気消沈した彼女を彼女のトレーナーが海岸で見つけ、無事帰った。

マックイーンとそのトレーナーは罰則として1週間、朝の清掃活動を言い渡された。





テ「どうしたの？変なの」

いや変なのはお前だよ！

その禁断症状で色々と苦情が来てるんだよ。

マヤノトップガンが怖くて夜寝れないせいで、

夜更かし気味になってると苦情はくるわ

ルナがどうにかしようとして頑張ったが全然改善されどころか、

たまにすごく怖いことが起こるらしく、どうにかしてくれと懇願してくるし

練習中もこうなるから周りの目が痛いし、

ただ練習のキレはすごくいいんだよな、友情トレーニング×5くらいキレがいいんだ

よなあ

あとなんかトレーナーがやばいやつなではっていろんな人に疑われるし

理事長に呼ばれて、どうにかしろって言われるし、

たずなさんには怒られるし、ラーメン奢らされるし、

飲みにも誘われるし、悪酔いに付き合わされるし、

そもそもどうしてこうなったんだよ…

もう我慢とかせずにはちみー飲ませるしか…

いやいやそうしたらテイオーの決意が無駄に…

テ「あ…今週分の薬を飲まなきや」

飲まなきや？薬を？トレーナーはテイオーを見た。

テイオーは見慣れない容器に入った液体を飲んでた。

ト「テイオー、薬って何？」

テ「ん？どうしたのトレーナー」

ト「質問に答えて」

テ「えつとね、欲を抑える薬だつて、タキオンがくれた…あれ？トレーナー？」

テイオーがすべてを言う前にトレーナーは部屋を飛び出していた

理科室

？「ふう…朝の紅茶は美味しいねえ…それにしてもモルモット君は早く退院しないか

ねえ…彼の弁当が恋しいよ」

ドアへドツカーン

ト「おらあ!!マッドサイエンティストはいるかあ!!」

？「おやおや…騒がしいな…テイオーのトレーナー君」

ト「タキオンテメエ…テイオーに何盛った!？」

タ「盛ってなんてしてないさ、私はテイオーに頼まれたから作っただけなんだがね」

ト「作った？」

タ「3、4週間前だったかな、テイオーに菊花賞まではちみーの雑念なく調整したいから欲を抑える薬が欲しいといわれたから作ったままでだよ」

最近すごくキレのいい練習をしていたのはそれが原因だったのか。

ト「ちなみどんな薬を渡したんだ」

タ「なに飲んだら1週間、一番食べたい物か飲みたい物の欲を抑える薬さ」

そう言う液体の入ったフラスコを取り出す。

タ「これを飲めば、一番食べたい物か飲みたい物が無関心になるというものさ、まあ今見せたものはテイオーに渡した薬の失敗作だけだね」

ト「え？無関心？事あることにはちみーはちみーつぶやいてて怖いんだけどお？」

タ「おや？おかしいな…」

ト「まさか…お前…」

タ「私としたことが、少し抑えるの効力を低く見積って作ったみたいだね、多分溜めてる欲が多すぎて少し漏れているみたいだ」

ト「どうしてくれるんだよ!!こっちは苦情ガンガンに来て困ってるんだよ!!」

タ「すまなかつたね、ここ数か月モルモット君の弁当を食べれてないから調子が出なくてね、そこまで頭が回らなかつようだ」

そういうえばこいつのトレーナー4か月前、食堂調理室爆破させて全治半年の入院して

るんだっけか、てか爆発したのに全治半年って身体強すぎるだろ

タ「あああと薬の効力が完全に切れたら欲が爆発するから気を付けてくれたまえよ」  
え？は？なんて言ったこいつ？

ト「爆発？どういうことだ？」

タ「薬の効力で欲を抑えてるんだ、その効力が切れたら今まで抑えて溜めていた物は吐き出されるだけださ」

ト「はああああ?!それってめちゃくちゃまずいじゃないかよ!!」

テ「飲んでからちようど1週間だからね、うまく時間調整して菊花賞終わった夜に効力が切れれば大変だろうが何とかなるだろう」

ト「…飲んだのさっきなんだが…」

そうテイオーが飲んだのは、さっきちようど朝の8時!!

薬の効力がなくなるのは菊花賞がある日の朝8時!!

タ「…」

ト「ちなみに…テイオーはまだ薬のストックを持っているんだよな？」

タ「菊花賞の日分までしか作ってないね、更にもう1本薬を作ろうにもちようど材料がなくてね…補充するには早くて10日かかる…」

ト「」

タ「ま……まあ頑張ってくれたま「オラア」ん何を!?ゴクツ　ああ飲んでしまったじゃないか!!」

とつきに、トレーナーは先ほど見せてくれた薬をタキオンに飲ませたのだった

ト「テメエもテイオーと一緒に1週間欲を抑えて爆発するんだな……」

タ「なんてことをしてくれただ……ち……違うんだ……この薬は失敗作で一番欲する食べ物か飲み物を摂取しない限り、ずっと欲が爆発し続けるんだ!!」

ト「解毒薬は?あとテイオーの分」

タ「作ってない……」

ト「うん……まあ……あいつが退院するまで頑張れ……」

そういつて部屋を出ようとしたが、腕をつかまれる

タ「待ちたまえよ!どうしてくれるんだ!責任を取ってくれよ!」

ト「いや、お前のトレーナーじゃないし無理やん」

タ「確か君は料理が上手だっただろ?この際誰が作ったかはい!君が弁当を作りたいまえ」

ト「いやいやアイツじゃなきや無理だろ、まあ頑張れ」

素晴らしい手を払い除け部屋を出る

後ろでタキオンが待ってくれよ!弁当作ってくれよ!と色々叫んでたが放っておい

た。

まあ明日試しに作って食べさせてみるか

さて

ト「マジで菊花賞どうしよう」

テイオーの溜めてた欲が爆発する、漏れかかるくらい溜めている欲が爆発するとマジでやばいだろ

とりあえず、生徒会や知り合い、最悪頼みたくはないがあいつにテイオーを抑えるのを頼むか

「はあ」

これから大変になるんだろうと分かるとため息しか出なかった

その日の夕方、欲の爆発に耐えられなかったタキオンは、彼女のトレーナーが入院している病院へ向かう。

だが数ヶ月前に入院中だった彼女のトレーナーを実験しようとしたことがあり出禁を食らっていた。その為会うことは出来なかった。なおその際色々ありまして、生徒会の仕事が増えた。涙目のルナに手伝ってとお願いされたので、私のせいでもあるし代わりにやる事にした。5日くらい徹夜で作業した。

一方その頃

マ「さあ天皇賞・秋に向けて練習ですわ！」ゴクゴクデスワ

マ(ト)「マックイーンさん練習前にはちみー飲むの辞めてくれませんか？」

マ「はちみーを飲むと練習効率が20%上がるから必要な事ですわ」

マ(ト)「はちみーはピコーペガサスのサポカだったのか… あっ！そうだマックイーンさん新しい勝負服できましたよ」

マ「本当ですの？」

マ(ト)「はい、ここにありますよ。着てみますか？」

マ「そ…そうですわね、今日はやめておきますわ」

マ(ト)「そうですか、着たい時は言ってくださいね」

マ「ええ…」

## テイオーとトレーナーと菊花賞

トレーナー（以下：ト） トウカイテイオー（以下：テ） シンボリドルフ（以下：ル）  
サイレンススズカ（以下：ス） スーパークリーク（以下：ク） メジロマックイーン（以  
下：マ） マックイーン of トレーナー（以下：マ（ト））

【注意：ちよつとした下ネタがあるためダメな人はバックお願いします】

### 菊花賞当日

あれから色々ありました。

テイオーの欲漏れは日に日に大きくなっていき、周りを恐怖させていくわ。

終いには無意識に、目の前がはちみーに見えて無意識に舐めだすし…

この前唾液でべとべとになってションボリしてるルナがこつちに来て泣き言を吐いてたし…

マックイーンってスイーツいつもパクパクしてて甘そうだよねって言いだして（物理的に）食べようとしたと苦情が来たし

タキオンに弁当作って食べさせたがやはり彼女のトレーナーが作った物じゃないと



意味がないらしく、

理科室で荒れてるし…この前2度目の病院突撃があつて、ニュースになつてたなあ…はちみーを飲ませようにもテイオーが涙目で飲まないと否定するので、無理強いできないし

気づけば菊花賞当日になつてるし…

6時30分…あと1時間30分かあ…

もうじきテイオーが来る…ひとまずホテルから京都競馬場までの移動は大丈夫か…

ドアへコンコン

来たか…テイオーかそれとも…

ト「どうぞー」

ドアへガチャ

ル「トレーナー君、失礼するよ」

そこに入ってきたのは、生徒会の3人と応援として頼んでおいた人たちであつた

ルナ、エアグルーヴ、ナリタブライアン、マルゼンスキー、スーパークリークそして

…

？「お久しぶりです、トレーナーさん」

来たか…重の…

ト「や…やあ…スズカ…お久しぶりだね…」

そこにいたのは異次元の逃亡者ことサイレンススズカであつた…相変わらずその目はどす黒い…

ス「ええ…最後に話したのは25日ぶりですね…」

ええ…相変わらず目にハイライトないし怖いんですけど…

ト「お…そんなに経つのね…元気そうでよかつたよ…で…お願いがあつてね」

ス「テイオーさんが暴走するから抑え込めばいいですよね？」

ト「あれ？話は既に聞いた感じ？」

ス「いえ…トレーナーさんの事はなんでも知ってるので…」

ええ…この娘どうしてこんなにしつとりしてるの…

ス「トレーナーさんとこれからも同じ景色を見るためには、なんでも知っておく必要がありますので…」

ト「そ…そうか…まあ…助かるよ…ありがとう…」

ス「はい…これで一つ貸しですね…」

ト「…」

何要求されるんだろう…以前は昨日の洗濯物要求されたし怖えよ…

ル「スズカは相変わらずだな…ソレデモサイシユウテキニハトレーナークンハルナノ

モノニスルガ……」

ルナがなんかボソボソ言ってる……聞かなかったことにするか……

てか、サブトレ時代に矯正出来たと思っただけ……おかしいな……

ト「もうそろそろしたらテイオーが来るからみんな……時間が来たら怪我させない程度に抑えるの手伝ってくれ……」

ドアへガチャ

ト「お？テイオーきて……え？」

トレイナーは驚いた

確かにテイオーは来た、目がうつろになっっており……何も刺さってないストローを口にくわえて何もいはずなんだが、何か吸いながら……

テ「トレイナーおはよーなんかね不思議なんだ……身体が勝手に動いてストロー咥えちやつてるんだ……」ハチミーハチミーハチミー

ええ……

ル「テ……テイオーだ……大丈夫なのか……」

テ「あ？カイチヨーにみんなも！応援に来てくれたんだね！ありがとう！」ハチミーハチミーハチミー

ト「ひとまず揃ったしレース場へ向かおうか……」

そうしてみなでバスで移動することになるのだが…

ス「では、私がトレーナーさんの隣に座りますので、他はご勝手に…」

ル「いやスズカそういうわけにはいかないぞ!! 君がトレーナー君のとなりだったら何があるかわからない!! ここは私が!!」

テ「いやいやカイチョー何言ってるの? ここは担当のボクが隣でしょ?」ハチミーハチミーハチミー

ええ…早く行きたいんだけど…

ト「ブライアン隣いいか…」

ブライアン「ああ…トレーナーも大変だな…」

こうして京都競馬場へバスを走らせた…

なおテイオーの隣はルナだったみたいで…

テ「ハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミーハチミー」  
チューチュー

ル「テイオーやめてくれ!! ト…トレーナー君助けてくれ!! テイオーにストローで吸われる!!」

なぜかルナの頬つぺたを吸ってた…もう色々手遅れじゃん…

ヤメルンダテイオー

ハチミーハチミーハチミーハチミー  
アツソコハミミ

ハチミーハチミーハチミーハチミー

なんかすごいことになってそうだから本人の名誉のため見ないでおこう…

京都競馬場

7時30分

選手控え室へ向かっているルナをおんぶしながら…

到着した時すでにルナは色々と見せてはいけないう状態になっていた…

しばらく立てないということなので、おんぶしている…

隣でスズカが羨ましいのか…妬んでるのか…すごく複雑そうな顔をして私の腕を握ってくる…

しばらく移動していると、

ルナが何とか立てるようになってたがまだおんぶされたいと耳打ちしてたが、それが聞こえたスズカが無理やり引きずりおろしてた。

さて選手控え室についた…

ト「さて…テイオー着替えてきな…」

テ「ハチミーハチミーハチ…うん!!行ってくるね」ハチミーハチミーハチミー

そして…

腕時計くピピピピ

8時になつて

控室へガシャーン!!

一同「!?!」

一同で控室に入るそこでは…

テ「ハチミーが飲みたいいいいい!!ハチミーはどこお?ハチミーハチミーハチミー」

テイオーがハチミーを求めているんなものを手にとつては違うといつて投げたり壊していった…

うわあ…暴れてるよ…つて違う違う…抑えなきや…

そう思った時、すでにエアグリーブとナリタブライアンがテイオーを止めに動いていた。

なおルナは、今までテイオーにやられた仕打ちを思い出したのか…がくがく震えながら…私の後ろに隠れた…おい生徒会長…

ブライアンがテイオーの後ろに回り込み動けないようにホールドし、エアグリーブが縄をもって雁字搦めにしようと近づいた。

これはいける!!と思つた次の瞬間

エアグルーヴ・ブライアン「え？」

ブライアンがそのまま投げ飛ばされ、エアグルーヴは突き飛ばされた

ドン!!…ガシャーン!!

壁に激突してそのまま意識がなくなるブライアンとロッカーに激突してその衝撃で  
気絶するエアグルーヴ

テイオーはそのまま何もなかったかのように俯いたまま扉の方へ走ると言うより  
突進してきた。

が扉の目の前にトレーナーがいたため目の前で止まった。

テ「ハチミー…ハチミーは…どこ…トレーナー…はちミーがないんだ…だからさ…は  
ちミーを今まで我慢した分飲みに行くんだ…だからねそこをどいて？」

ト「いや…菊花賞はどうしたんだよ…菊花賞に着とるまで我慢するんだろ…」

テ「もう…どうでもいいんだ…はちミーが飲みたくて飲みたくて仕方ないんだ…だ  
からね…どいて!!」ドン

そう言う私の頭より左にある壁を殴った、壁がえぐれてた…怖いんだけど…食らっ  
たら死ぬじゃん…

ト「…つく…」

どくしかないのか…そう思ってたらいよいよテイオーを抱きしめる一人のウマ娘が…

ク「さあ…：テイオーさん危ないことをしてはダメですよ」

キター我らがママ!!クリークママの甘えさせる攻撃だああああああ!!

テイオーにも効いてるのか、目は虚ろなままだが、徐々に弱ってる気がする

テ「ハチミー…：あ…：ハチミー…：マ…：マ…：」

効いてるぞ!!このまま本番前まで赤ちやん返りさせるしかない!!

ク「フフフ…：テイオーさんいいこでちゅねえ」

素晴らしいながら抱いているテイオーをゆっくり撫でるクリーク

テ「あ…：ああ…：」

行ける!!このままいけええええええ!!

テ「あ!!はちみーだ!!」

ト・ク「え?」

テイオーはそのまま

テ「いただきまーす」ムニユパク

ムニユ?ま…：まさか…：

ク「つあ…：ちが…：テイオーさん／／やめ…：／／」

なんとテイオーのやつクリークのおっ〇いを服の上から吸いだした…：つておい!!羨ましいぞ!!そこを変われ!!



てかやばい…こんなの見てたら俺の愛馬がズキュウドキョンしてウマダツチしてしまおう!!

なんてくだらないことを考えてたらいきなりゴキって音とともに視界が変わった目の前には笑顔のスズカが

ト「スズカさん…首が痛いんですけど…顔をいきなり左に回すのやめて…」

ス「トレーナーさん見てはいけませんよ…フッフ…」

ト「いや…あの絶景をみないと後悔s「いけませんよ?」…ハイ」

ス「あんな脂肪の塊を見るくらいなら私だけを見てればいいんですよ?」ニコニコ

ト「はい…」

数分後

ク「」ビクビク

クリークはもう…いやこの状況説明したらR18になるだろ…って状態になって気絶してた

テイオーはそのまま私の方へと向かってきた…

万事休すかと思つたその時

?「待たせたね!!トレーナー君!!」

ト「ル…ルドルフ!!」

なんとさつきまで怯えてたルナが復活を遂げた、先ほどまでの情けない姿を忘れさせるような威風堂々とした姿に変貌して、この皇帝状態のルナなら今の暴君状態の帝王に勝てるかもしれない!!

しかし…なぜここまで復活したんだ?

そう考えてるとルナの後ろでマルゼンスキーがピースサインをしている…今まで慰めてたのか…マルゼンスキーさん最高だぜ!!マジでイケイケでチョベリグでお前がナンバーワンだ!!

「汝、皇帝の神威を見よ」v. 6」

ル「さて…テイオー今までさんざんこの私をもて遊んでくれたな…あまり皇帝を無礼るなよ!!」バチバチバチ

すごい…これが皇帝の威圧つてやつか…腰が抜けるやつもいると聞いていたがこれなら領ける…

テイオーもこの威圧には流石に堪えているようだ…

ルナはそのまま追い打ちを掛けるため次の一手に踏み切った  
ル「知っているかテイオー?」バチバチバチ

「はちみつの製法は緻密なんだとき」ツプ

あ…ダメだこいつ…やっぱ駄皇帝だわ…

テイオーはあまりのくだらないダジャレに数秒間固まった…

そして

「汝、帝王の神威を見よLv. 11」

テ「カイチヨ…咄嗟に、はちみつのダジャレを言つて何がしたいわけ?…あまりはちみーを無礼るなよ!!」バリバリバリ

え? 何あの固有スキル? てかLv. 11ってなんだよ?! 単純計算で☆10になつてるやん!! 何あれ怖つてか威圧感やばすぎる…

その圧を受けさつきまでの皇帝の威勢は消え去り、ルナは膝から崩れ落ち…

ル「ゴメンナサイ…ウウ…ゴメンナサイ…ヘンナコトイッテゴメンナサイ…」エグエグ

あーダメそうだ…ガチ泣きしてるよ…てか最近メンタル弱すぎ…

さて…今度こそ万事休すか…スズカにたの…あれ？スズカは？

隣にいたはずのスズカがないことに気づいたトレーナー

次の瞬間

とすつ！

テ「つう!!」バタン

テイオーが突如倒れ、スズカがその場に立っていた…

ええ…何したし…

ス「トレーナーさんこれでいいですか」ニコニコ

ト「あ…ああ…」

数時間後

ナレーター「クラシッククロードの終着点、菊花賞を制し最強の称号を手にするのは誰

だ！」

「さて今回クラシック三冠が目の前となってる5番トウカイテイオーが一番人気となりました」

「そのトウカイテイオーが見えないが、何をしてるのでしょうか？」

「おっと…あそこにい…あれ？なぜサイレンススズカがいるのでしょうか？」

ナレーターが見る観客が見る先ではレースに出るはずではないスズカがテイオーを抱えてやってきた…

「えつとどういうことでしょうか…サイレンススズカが5番ゲートに入ったぞ何が起きているのでしょうか…」

5番ゲートない

ス「さてと…」つす

そう呟き手方でテイオーの首後ろを叩く

テ「はちみー!!あれ？はちみーは？」ハチミーハチミーハチミー

起きるテイオー

ス「テイオーさん今から菊花賞のレースですよ？」

テ「え？はちみー飲みにいきたいから菊花賞でなくてもいいかな」ハチミーハチミーハチミー

無論気絶させたからと言って薬による爆発がなくなつたわけではなかった

スズカは考えたこのままゲートに入れてもテイオーはゴールへ行かずそのまま逃亡してはちみーを飲みに行ってしまうだろう…

そんなことになってしまったらあの人が悲しんでしまう…正直テイオーを助けるのは気が引けますが…仕方がありません…

そう思った、スズカは、テイオーに耳元で周りに聞こえない声で伝えた

ス「……………」ボソ

テ「?!」

その瞬間テイオーの目の色が変わった…

ス「さて…テイオーさん私は客席に戻りますね…あとはあなた次第です…私としては…なんでもありません、頑張ってくださいね」クスクス

そう言うときスズカは観客席の方へ走って行った

テ「…」

ナレーター「えー思わぬハプニングがありました、レースを続行したいと思います。各ウマ娘ゲートイン完了、出走準備が整いました…」

テ「トレーナー…ボク…だ…」

バン!!ゲートが開かれる!!

テ「トレーナーとトレーナーのはちみーはボクのものだあああああああああああ

!!」ツゴ!!

そう叫んだ瞬間

テイオーは作戦など何も考えずに最初から全力で走っていた  
そして：

ナレーター「」

観客「ええ…」

トレーター「マジでか…」

ルドルフ「…ナニアレコワイ」ガクガク

スズカ「…」

ナレーター「トウカイテイオー今ゴール!! 2着は…ってまだ他のウマ娘たちはまだ2  
周目にはいった所って…ええ…」

テイオーはそんな異常な状況など気にせず全速力で

テ「トレーター!!」

ト「ちよ…グツハ!!」

トレーターにタツクルをかましてた

テ「勝ったよ!! ボク三冠とったよ!!」

ト「あ…ああ…よく頑張った…テイオー…」ガクツ

テ「トレーター? トレーター!?!」

こうして菊花賞はトウカイテイオーが1着になり、クラシック三冠を取ったのだった

？「彼と同じ景色は…今のままでは見れなさそうね…タイキちよつとお願いがあるんだけど…私アメリカへ行こうと思うんだけど…」

その劇的な菊花賞が終わってから1週間後

東京競馬場控室

今日は天皇賞・秋があつた。

あつた…そうレースは終わっていた。

マックイーンはトレーナーの前で正座をしていた。

彼女のトレーナーはそんな彼女を上から見ていた…普段とは違いすごく怒っている様子であつた。

マ(ト)「マックイーンさん、まずは天皇賞一着おめでとうございます」

マ「あ…ありがとうございま「しかし！」」

マ(ト)「最終直線残り100を切った時突如失速しましたね？なぜでしょうか？」

マ「そ…それは…」

マ(ト)「そして危なげながら一着が取れました。ですが…ゴールしたあとどうなりましたか？」

マ「え…えつと「いいなさい」…はい…その…スカートがズレてしまいました…下着



を晒してしまいました…」プルプル

マ(ト)「そうですね…なぜスカートがずれたのですか？」

マ「スカートのホックが壊れてしまったからですわ…」

マ(ト)「100を切ったときに壊れたんですよね？しかしなぜスカートのホックが壊れたのですか？」

マ「そ…それは…」

マ(ト)「ひとまずこの体重計に乗ってください…」

マ「えつと…「いいから乗れ」はい…」

マ(ト)「すごく増えてますね…」

マ「はい…」

マ(ト)「いつから太つてると自覚がありましたか？」

マ「合宿へ行く前からです…わ…」

合宿中水着を忘れてたりしたのは…ばれないようにワザと忘れてたのか…などと色々と思いついた節があつたなあと反省するマックイーントレーナー

マ(ト)「……」ボソ

マ「えつと…トレーナーさん？」

マ(ト)「次の有馬記念まで、スイーツ禁止です」

マ「そ…そんな!?それは流石にあん「わかりましたね?」…はい…ち…ちなみに…チー  
トデイは?」

マ(ト)「そんなのあるわけないですよ」

マ「そ…そんなあああああ」

# 菊花賞の後

現在

トレーナー室

ト「とまあ…菊花賞はこんな感じで終わりましたとさめでたしめでたし…」

キタ「ええ…」アセ

つまり…大好きなはちみー我慢してたのが爆発してあんな事になったと…

ト「いやあ…その後大変だったなあ…」

「テイオーにはちみーあげた後、ウイニングライブにはちみー飲みながら踊りやがったからさ、宣伝活動になるから違法だの大人の都合で大変な目にあっただし…」

「違法な薬物摂取したのでは？って疑われて、身の潔白を証明するの大変だったし…」

「その対応に追われてる中、ルドルフは幼児退行して1週間面倒みる羽目になるし…」

……

菊花賞の次の日

トレーナー室

ト「はちみーの件で理事長やたずなさんにすごく怒られました…つらたん…たずなさ

んに今晚飲みを拉致られるの確定しました…卑しか女杯…」

「さて…テイオーが来るまでトレーニングやら昨日の後処理をしますかね…終わりそうにないから今日の飲み終わったら仕事に戻ろう…」

「素晴らしい仕事に取り掛かろうとした時、

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

? 「失礼するぞ」

ト「お? エアグルーヴか? 昨日は助かったよ、ブライアンともに怪我はなかったみたいだけど、今のところ大丈夫かい?」

エア「ああ特に何も無い、ただ…会長がな…すまないちょっと生徒会室まで来てくれ」

ト「ルドルフに何かあったのか?!」

エア「ああ…ちよつと私達には手に負えなくて…すまないが助けてくれ」

「そう言われ、エアグルーヴと一緒に生徒会室へ来た、そこには、ルナが大声で俺の名前を叫びながら泣いていた…ええ…」

ト「ええ…ナニコレ?」

エア「私もさっぱりわからない、今日来たら、すでにあんな感じになっていた…」

ト「ナニソレコワイ」

どうなっているんだ…とりあえず本人に聞いてみるか…

ト「やあ…ルドルフ…大丈夫か…？」

俺の声が届いたのか耳としつぽがピーンとなったあと、泣き顔から満面の笑みになりこちらへいそいそとやってきた

ル「やつときてくれたトレーナー」ダキ

そういうと抱き着いてきた…ナニコレ？

エアグルーヴはすぐ気まずかったのか、いつの間にかいなくなっていた…おいていかないでくれよ…

ト「えつとさルドルフ？」「ルナ!!」え？」

ル「ルドルフじゃないもん!!ルナだもん!!」

ト「はあ…でルナはどうしてさっきまで泣いていたんだい？」

ル「えつとね…トレーナーさんがどこかへいくこわいゆめをみちやつて…それでおきたらトレーナーがいなかったからこわくなつてないちやつた…」

ト「そうか…大丈夫だよ、トレーナーは何処にもいかないから」

ル「ほんと？」

ト「本当だよ」

ル「じゃあこれからずっとルナといっしょにいてね」パア

ト「」

やっちまった…

それから一週間

ル「トレーナーあそびにいこ？」 キャツキャ

「トレーナーきのうのよるどこいつてたの？」 ハイライトオフ

「トレーナーのおうちでおとまり♪いいでしょ」 ウワメツカイ

「おふろいっしょにはいろうよ」 ネーネー

「いっしょにねよ？」 ギュー

「といれ…ついてきて…」 ウルウル

テ「か…カイチョー?!」

ル「はちみーおぼけ…こわい」 ガクブル

テ「えええええ!」

…

現在

キタ「会長さん…」

ト「まああいつも色々と苦労してたみたいだしな…メンタルギリギリだったんだろうなあ…元に戻った時幼児退行してた記憶があったらしく、1か月引きづって俺と目が

合うと赤面しまくってたっけなあ」

「でまあその後、ルドルフの面倒をみてた事もあり仕事が溜まりまくったので、消化しようとした矢先にさ…」

キタ「その後も何かあつたんですか?!」

ト「ああ…」

…

ルナからルドルフに戻った次の日

ト「やつと仕事に戻れる…始末書やら後処理の書類が俺の身長くらい積みあがってるやん…」

期限間近なものなど必要最低限の事は消化していたが、増える一方の書類、テイオーには申し訳ないが当面自主練をお願いするか…

ト「さて…やりますか…」

そーいい仕事に取り掛かろうとした時、

ドアへコンコン

あれえ?先週もこんなことあつたぞお?

マジで面倒ごと勘弁してくれよ!!

誰かは知らんがここはいるsガチャ

？「トレーナーさん居留守はダメですよ？」

げえ…

ト「…スズカ…」

スズ「はい、あなたのスズカですよ」フッフ

相変わらず目のハイライト忘れてるし…嫌な予感しかない…

仕事早くしたいし、さっさと用事を聞いて済ませることにするか…

ト「えつと…スズカ何のようかな？」

スズ「えつと菊花賞での貸しを返してもらおうかなと思います」

菊花賞…確かに彼女がいなかったら、テイオーは勝てなかっただろう…多少衣服が

減ったりしてもいいか…

ト「ああ…そうだな…無理な願いは聞けないが借りは返さないとな」

スズ「ありがとうございます」

そういつた瞬間スズカが一瞬にして消え…つう！視界が少しずつ暗く…

スズ「ふふふ…では行きましょうか…」

…

現在

ト「そして…気づいたらスズカと一緒にアメリカにいたんだ…」



キタ「ポカーン

ト「数週間ほどアメリカでスズカのレースを見ながら臨時トレーナーさせられた」

「貞操の危機もたくさんあったけど何とか逃げ切り、テイオーやルドルフに助けてもらい何とか日本へ帰ってこれた」

キタ「た…大変でしたね…」

ト「んで、日本に帰ってきたら更に溜まっていた期限切れやぎりぎりの書類を必死に終らせた後ぶっ倒れ、1か月入院しました」

「1週間の入院だったんだけどさ、運が悪いことにタキオンのトレーナーと同室で、弁当に飢えてるタキオンの襲撃で怪我してしまい、期間が延びた」

キタ「…本当にお疲れさまでした…でもこれで終わりですよね？」

ト「いや…最後にあいつがやらかして俺の年末の休みがなくなった…」

キタ「あいつ？」

…

有馬記念

マ「スイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツスイーツ」ブツブツ



実況「メジロマックイーンゴール!! 30馬身以上離して圧倒的なゴール…ええ…」

マ「スイーツ!!」ガツツポーズ

マ(ト)「ええ…」ドンビキ

マ「さあ!! トレーナーさんいきますわよ!!」ガシ

トレーナーの腕をつかむマックイーン

マ(ト)「え? どこへ?」

マ「勿論!! スイーツバイキングにですわ!!」

マ(ト)「いやこの後、記者会見とかウイニングライブ「いきますわよ!!」…はい…」

マ「今まで我慢してた分、パクパクですわ!!」

…

現在

ト「その後、籠が外れたマックイーンは、中山競馬場付近のスイーツ店を閉店に追い込むほど食べつくしたとか」

「この件に関して、間接的原因に臨時講師とかの件で俺も関わっていたので、仕事が増え年末休日がなくなっただけ」

キタ「えつと…なんて言えばいいのか…本当にお疲れ様です…」

ト「さて…長話になったな…いつの間にかキタ以外帰ったみたいだしキタもかえって

…ルドルフ…いつからいた…」

私とトレーナーさんが入り口を見た時、そこには笑顔の会長さんがいた

ル「トレーナー君がテイオーの日本ダービー後の話をしだした時からかな？」

ト「すべてじゃん…」

ル「さて…トレーナー君、その話は他人に話してはダメだと伝えてたはずだったが…」  
バチバチ

ト「」

ル「キタサンブラック…すまないが私はトレーナー君と話がある、今日はもう遅いし  
帰りましたまえ」

キタ「は…はい…トレーナーさんお先に失礼します…」

ト「ちよ…キタちゃん…まって…俺も帰…」ガシ

ル「トレーナー君どこへ行くんだい？」ニコニコバチバチ

ト「」

その後、トレーナー室から、トレーナーの悲鳴が響いた

## テイオーとトレーナーと嫌われ薬

菊花賞の話をしてからルナに、すんごく怒られた。

それから数週間後、

ある日

タキオン「ふむ…好感度を爆上がりする薬を作ってはみたが、逆に爆下がり薬を作ってしまったようだ…これは処分しなくては…でも何かの実験に使えるかもしれないから保管しておくか」

クズトレーナー「ふうん…嫌われ薬つてやつか…いい事聞いたぞ…これをあいつに飲ませれば…俺様の時代が…」

…

現在

ト「なあテイオーさん」

テ「なんだいトレーナー」ジヨリジヨリジヨリ

ト「タキオンがさあ嫌われ薬なるものを作ったそうなんだよ」

テ「へえ…最近流行ってるからついに、ここにも来たんだね」ジヨリジヨリジヨリ

ト「前から流行ってたけどなあ、何番目かは知らんが、そして、その嫌われ薬が先日盗まれたそうな」

テ「それは大変だねえ、誰かが飲んだら大変だ」ジヨリジヨリジヨリ

ト「それがさあ：俺が飲んだみたいなんだよねえ」

テ「あらら：トレーナーもおつちよこちよいだねー」ジヨリジヨリジヨリ

ト「どうやら盛られてたらしいんだよね」

テ「トレーナー恨みでも持たれてたの？変なことしすぎて恨み買ったんじゃないかな？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「変なことした記憶しかないから、ぐうの音も出ない：まあそいつは俺の先輩でテイオーやチームが活躍するのを妬んでたらしいんだあ」

テ「へえ、嫌われてあわよくば自分のチームに引き入れる算段だったのかなあ？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「そんなところなんだろうなあ」

テ「トレーナー嫌われ薬飲んでから大丈夫だった？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「まあ色々痛い目にあつたよ、今日は朝からモブ娘ちゃんに殴られたり、ナリタタイシンにキモイ言われたり、マックイーンに回し蹴りされたり：」

テ「いつもの事じゃん：」ジヨリジヨリジヨリ

ト「いや…あいつらいつもより目がマジだから流石にメンタルに堪えたわあ」

テ「可哀そうにねえくあと数日で効果切れるから頑張ろう」ジヨリジヨリジヨリ

ト「ところでさ、テイオー」

テ「何？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「もう、クズトレイナー先輩の髪の毛ないぞ？」

テ「あ…本当だ」ジヨリ

そういいテイオーは手動バリカンを近くにテーブルへ置いた。

そこには嫌われ薬を盗み、トレイナーに仕込み飲ませた、犯人が見るも無残な姿で拘束されていた。

…

3日前

トレイナーは何か違和感を感じていた。

ト「今日の昼休憩後からなんか周りの視線が怖いんだけど…」

なんか昼ご飯を食べた後から周りの視線から殺意的なものを感じるようになっていた…

うーんまあ気のせいだろ…さてもうじきキタちゃんが来るかな…

ドアへガチャ

ト「キタちゃんこんにちは、さっそくトレーニングはじめよう…ん？キタちゃん？」  
キタちゃんはその場で怒った顔をし…

キタ「そのキタちゃんって呼ぶのやめてもらっていいですか？」ツキ

ト「え？じゃあクロちゃんって呼ぶか!!」

キタ「そういうことじゃないです！馴れ馴れしく私を呼ばないでください!!正直気持ち悪いです!!」

ト「なん…だ…と…」

ナニコレ？反抗期？反抗期なのか?!パパの下着と一緒に洗わないでって言われる全  
国のパパになった気分だ…

ト「ど…どうしたんだ…キタ…キタサン？」

キタ「とにかく!!もうあなたと顔を合わせたくないの!!チームも抜けます!!さよう  
なら!!」

ト「ちよ…ちよつと…ま…「近づくな」ドカツ グツハ」ガシャーン

キタ「さようなら!!」

素晴らしいキタサンは俺を蹴飛ばしトレーナー室から出て行った

…

トレーナー室内に設置しているカメラから映される映像を見るクズトレーナー



クズトレーナー「いい気味だwwざまあみろwwwこのままチームメンバー全員に拒絶されてしまえw」

クズトレーナーはトレーナーが嫌われていく様を見て喜んでいた。

そしてトレーナー室の廊下に設置していたカメラに1人のウマ娘が映される

クズトレーナー「お？あれはトウカイテイオーか…あいつに拒絶されたらあいつもw

w…さあどうなるかww楽しみだw」

：

ドアへガチャ

ト「いつつ…強くけりやがって…お？テイオーか…すまないが近くの棚にある救急箱取ってくれね？」

そういうとテイオーは救急箱を取りトレーナーに、



本気で投げつけたと同時に顔面に向かってとび膝蹴りがさく裂した

テ「○ねえ!!」

ト「うお!?あぶねええええ」ヒョイ

間「髪トレーナーはよけた!よける前にあつた机は粉碎し救急箱も壊れ中の物が散乱した

：

カメラに映っている映像をみて喜ぶクズトレーナー

クズトレーナー「よし!!いいぞそのままボコボコにしたれwww」

：

ト「テイオー何しやがるんだ!!」

テ「トレーナー昨日どこで何してたの？」

ト「は？何いっ「言えよ!!」はい!!マックイーンのとトレーナーと飲みに行つて、酔つた勢いでそれぞれ分かれて、性癖全開のお店へ行きました!!ちなみに俺はおっぱへ!!」

テ「ねえどうしてそんなお店へいくのかなあ？」ギロリ

ト「やっぱチームメンバー、テイオー（笑）含めみんな大きいとムラムラするから仕方がない事なのです!!」

テ「○ねえ!!」ブン!!ドゴオ!!

テイオーの右ストレートがさく裂!!ただトレーナーはよける!!殴った先にあつた壁はえぐれる!!

∴

クズトレーナー「あれえ？なんか反応が違う∴」

∴

テ「ボクはまだ成長期なんだい!!これからキタちゃんみたいに大きくなるんだ!!」

そういう涙目なテイオーの肩をポンポンたたき∴

ト「あきらめろ∴現実をみろ∴3年前と比べても全然そd「オラア!!」ドゴオ みぞおちい!!」ボタン

テ「トレーナーのばーか!!」

そう叫びテイオーは部屋を出て行った：今日はやけに暴力を振るわれるなあ：

：

クズトレーナー「なんか：反応が思ったより違ったが：きつと個々によつて薬の効果が違うんだな!!うんそうに違いはない!!トレーナーのやつざまあないな!!この調子で破滅すればwwお？」フハハ

：

そんな中また1人のウマ娘がトレーナー室へはいつていくのが映った

一方そのころ

どうもマックイーンのとレーナです

今マックイーンさんとチームの遠距離担当ライスシャワーさんの目の前で正座させられています

マ「さて、トレーナーさんなぜ正座させられているのかお分かりですか？」

マ(ト)「い：いえ：なんのことy「お嬢様な妹【自主規制】え：どうしてそれを?!」  
ビク

マ「あなたの上着ポケットにお店の名前が書かれたレシートがありましたよ?さてこ

れはどういうことかしら」ハイライトオフ

ライス「お兄様…どうして…ライスがダメな子だからそんなお店に行くの？」ハイライトオフ

マ(ト)「そ…そんなこと…ないぞ…俺は「ならどうして!!」」

ライス「もしかしてお兄様はライスを裏切ったの？」

マ(ト)「いや裏切ったというわけじゃ…」

ライス「オニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタ」

マ(ト)「ガクブル

マ「さて…トレーナーさん…裏切った罰ですわ」ニッコリ

そういうと手錠をとりだした

マ(ト)「」

その後、マックイーンのとトレーナーが1週間ほど行方不明となった、見つかった時彼はここ最近の記憶がなかった

## クズトレナーとウマ娘と嫌われたトレナー

前回のあらすじ

キタちゃんが反抗期になった。割とメンタルきつかった

テイオーにシバかれた。いつもの事なので、特に問題はなかった

さて：何かが：おかし：キタちゃんの嫌われるようなことしたかな：

いい子だったのに：シヨックだなあ：

落ち込んでるトレナー

ドアへガチャ

？「こんにちは、あらトレナーさん：

ト「お？クリークか：

クリークはトレナーの顔を見ると顔を曇らせた

：

クズトレナー「お？スーパークリークか：彼女にも拒絶されて甘える事もできなくなればやつは」

もう破滅に向かって一直線だろう：そう思った彼は汚い笑みを浮かべていた

30分後

クズトレーナー「え?…どういうこと…」

彼の予想とは違った光景が映像に映し出されていた

∴

ト「クリーク∴キタに嫌われちゃったよ∴」ギュー

ク「あらあらどうしちやっただんでしようね」フッフ

いつも通りトレーナーはクリークに甘えていた

ト「反抗期なのかなあ∴悲しいなあ∴」

ク「きつと何かあったんですよ、トレーナーは悪くないですよ、だからそんな暗い顔

しちやっただら私も悲しくなっちゃうのでメツですよ」ナデナデ

∴

クズトレーナー「どういうことだ∴薬は効いてるはずなのに∴まさかもう効果切れ?

早くないか?」

∴

そうして、トレーナーがクリークに甘えるという見てて正直キモ∴辛いものを見せら

れ30分後、

クリークに甘えたこともあり、元気が戻ったトレーナーはそのままチームメンバー勧誘



のため…外へ出た

その後ろを尾行する、クズトレーナー

…

クズトレーナー「どういふことだ…本当に効果が切れたのか…」ブツブツ

…

トレーナーに向かう一人のウマ娘が

？「チエストですわー」ブン

ト「うおっ!?バット?!」

トレーナーは後ろからバットで殴られそうになるも、寸前でよけた

ト「何するんだよマックイーン!」

マ「なんでよけるんですの?」

ト「いや食らったらマジで洒落にならん…」

マ「私のトレーナーさんが先日あんなお店に行ったのは、貴方のせいですわ!だから

粛清しますわ!」

ト「いやあいつノリノリだも…だまりなさい!」

マ「あとなんかあなたを見てたら無性にむかつきますし、おとなしく私のためになぐ

られなさい、大丈夫半殺しですませますわ!!」ポコポコデスワ

ト「見逃してくれない？」

マ「だめですわ!!」

ト「マッククイーンここに高級スイーツバイキングのタダ券があるのだが」ツス

マ「今回は見逃しますわ!!」

∴

クズトレーナー「マッククイーンは…うん…まあ…ポンコツで有名だし仕方がないか  
∴」

その後、薬は切れているわけではなかったのがわかった

あいつはウマ娘とすれ違いざまに水をかけられたり、ぶん殴られたりされていた

気味だ

そして

∴

グラス「トレーナーさんなぜ避けるのですか？諦めましょ？」ブンブンブン

ト「いやいやグラスさん流石に雑刀はあかんって」ヒヨイヒヨイヒヨイ

グラス「ダメですよお、あなたみたいなクズを見るだけでむかつくので、ちゃんと

切られてください」ブンブンブン

ト「いやいやいや俺が何をしたっていうんだよお!!あれか？あれなのか？この前、グ

ラスがノーパンだと噂を流した恨みか!?」ヒヨイヒヨイヒヨイ

グラス「は？」ピタ

ト「あ…やば…」サー

グラス「I will surely kill you (私はあなたを確実に殺す)」

…

ト「アダダダダ」

エル「エルのヘッドロックはどうデスカ?このまま一気にやられてください」

ト(さすが89…柔らかなくて別の意味で昇天しそうだ…)

「まだまだあ!!次はフォール技で頼む!!すっかりその感触を感じたいんだ!!」

エル「なんか気持ち悪いのでやっばやめマス…」

ト「そ…そんな…」ガン

…

ライス「お兄様をたぶらかしたあいつを…」

「ライスだつて殺つてみせる!!」ドス!!

ト「模型のナイフが刺さったあああいてええええええええええええええええ」

…

ウララ「トレーナーごめんね…なんかトレーナーを見てると嫌な気持ちになるから…近づかないでほしいの…ごめなさい…」

ト「なん…だ…と…」ガク

キタサンの時よりすぐメンタルが傷つくトレーナー

：

どんどんと怪我（大体自分のせい）とメンタル、心身ともに傷ついていくトレーナーを見て満足するクズトレーナー

彼は薬の効果が上々なのを確認して満足したのか、帰宅した

ト「…さすがに堪えるなあ…」トボトボ

そうつぶやきながらトレーナー室へ戻るとそこにはルナがいた

ル「やあトレーナー君今日は大変だったね、ところで…」

ルナの顔はとてつもなく怒りに満ちた顔になっていた…

あれから2日後

あいつ（トレーナー）はたくさん拒絶され暴力を受けていた

ククク…やつも限界なはず…ぼちぼち辞めてくれるころかな…

トレーナーはあれから、

アグネスデジタルに何か交渉していたところ、それを見たナリタブライアンに殺され

そうになったり

グラスワンダーに執拗なまでに終われ、抹殺されそうになったり

スペシャルウィークに素で気持ち悪いといわれ、めっちゃメンタル減らされたり

トウカイテイオーに蹴飛ばされたりと

他にもいじめにも近い仕打ちを受けていた

スピーカーへトレーナー、トレーナー速やかに生徒会室へ

あいつが、生徒会室？クククついに…辞職しろと詰められるんだな…ついにこの時が

来たか…

さてあいつが詰められて絶望する姿をみなくては…

クズトレーナーは生徒会室へ足を進めていった

テイオーとチームと彼女らに嫌われなかったトレーナー

生徒会室前まで来た

生徒会室内では、何か言い合っているのか少し騒がしい

あいつが言い詰められているのかと想像すると本当に心が躍る、

これでやつも終わり、あわよくばあいつのチームを引き抜いて俺様の時代に…

そう勝ちを確信し、そつとドアの隙間を覗いた

ブライアン 「トレーナー！ウマホを渡せええええええええええ!!」

トレーナー 「だーかーらー消したって何度も言ってるだろおおおおお?!」

ブライアン 「信用できるか!!いいから早く渡せ!!」

トレーナー 「無理なものは無理だ!!ちよ…くるな!!」

ブライアン 「今までそうやって逃げて消さずにいたじゃないか!!今回ばかりは、強硬

手段にとるぞ!!」ガシ

トレーナー 「力強すぎ…手が折れる折れる折れるうううううう」

エアグルーヴ 「ブライアン落ち着け!トレーナー君が怪我するぞ!本人が消したと

言ってるんだ問題はなかるう」

トレーナー「そうだ！そうだ！」

ブライアン「ちなみにエアグルーヴ、あの動画もまだ保存されていたぞ!？」

トレーナー「おい!!バラすn」「どういうことだ!!」

エアグルーヴ「あの時、消したと言ったではないか!!この戯けが!!」ガシ

トレーナー「ちよ…まっつて…」

エアグルーヴ「今すぐそのウマホを渡せええええええ!!」

は?なんだあれ…: どういうことだ? やつが辞職しろと言い詰められていないだ…:と

ハヤクワタセ!!

イヤダ!!

フン!!

アア…オレノウマホガ!?

どういうことだ…: なぜ嫌われていない…: 薬は完璧に効いてたはず…:

それにあいつは昨日その効果でナリタバライアンに殺されかけてたはず…:

ザンネンパスワードセットイシテマシタ! ベロベロバア

パスワードヲハケエ!!

ハカネバウマホコワス!!

エエ…:

？「覗き見とは感心しないな？」

クズトレーナー「え？」

コウカンドガモツトモタカイヤツノタンジヨウビダヨ？

コウホガオオスギテワカランワ！！

そこには生徒会長シンボリドルフとマルゼンスキーが立っていた。

クズトレーナー「す…すみません会長…少し騒がしくて気になってしまいました…」

ル「まあいい、ちようどよかった、君に用があつたんだ入りたまえ」ガチャ

オ？ルドルフオカエリー

ツチ…テイオーノタンジヨウビジャナイカ

断る理由も見つかからないまま、クズトレーナーは会長に連れられた

ル「まあ立ち話もなんだ、座ってくれ」

そう言われ、ソファに腰がけるクズトレーナー

彼は周りを見た、

窓側ではナリタブライアンがあいつのウマホを触りながら、その持ち主と話していた

ブライアン「ツチ、クリークやマルゼンスキーの誕生日でもないぞ!!」

ト「はははwさて誰の誕生日だろうな!!」

ブライアン「教えろ！誰の誕生日だ!?!」



ト「えー嫌だわ」

パスワードの入力でもめている2人

それを笑顔で見ているマルゼンスキー

会長は私の対面にあるソファに座る

エアグルーヴは会長の後ろに立っていた

ル「さて、本題に入ろうか、先日アグネスタキオンが作った薬が何者かに盗まれたのだが……」

ま……まさか……

会長から出た言葉に思わず心臓の鼓動が早くなったのを感じた

ル「盗んだのは君だね？そして私のトレーナー君に飲ませたね？」

先ほどまではほんのり笑顔だった会長は今では怒りと皇帝の顔付に変わっていた

………

そして現在

ト「というわけで、犯人は拘束されてるっていうわけ、ちゃんちゃん」

テ「いや、端折りすぎだよトレーナー……、それにしてもどうしてあいつが犯人だったのわかったの？」

ト「えっと最初は何が起きてるのかまったくわからなくて、本気できつかったんだけどさ、異変があった日の夕方、トレーナー室に行った時にルドルフがいてさ」

.....

3日前、

私は、キタちゃんに嫌われ…なんか事あるごとにいろんな子に暴力を振るわれ…ウラに嫌われ…いやマジでウララに嫌われたの死にたくなつた…

なんか悪いことしたかな…本気でへこむ…でもクリークとかテイオーはふつうだったんだよなあ…

そう考えながら、トレーナー室に向かつてる時、ドアの前にルナが立っていたル「やあトレーナー君今日は大変だったね、ところで…」

あれ？ルナのやつ…なんかすごく怒ってないか？俺死ぬのか?!なにしたかわからないけどオワタ…

そう考えていたのが顔に出たのか、それを見たルナは

ル「安心してほしい、別に君に危害を加えるつもりはない、ひとまず生徒会室まで来てくれないか？」

あれ？大丈夫なのか…ひとまず…言われたとおりにすべきか…

ト「わかった…」

ルナに連れられ生徒会室に入った、エアグルーヴがお茶をだしてくれ、ソファに腰掛けるトレーナーと対面に座るルナ

ル「さて、トレーナー君、聞きたいことがあって、先ほど君の部屋の中で君を待つていたんだが…君の部屋に隠しカメラと盗聴器が見つかってね…」

ト「え？」

マジで？…誰が仕掛けたんだ…思い当たるとしたら…あいつか？

ル「君が思っている人物ではないことは確かだ、彼女が仕掛けてたら、私もたぶん気づかないだろう」

ト「そ…そうか…」

ル「今日それが見つかって、そして君は今、色んな子に嫌われている…関係がありそうだとは思わないか？」

「さらに、アグネスタキオンから薬が盗まれたと報告が上がっていてね、なんでも飲んだ人が嫌われるものらしいんだ」

ト「つまり…薬を盗んだ犯人が俺にそれを飲ませたと…でカメラや盗聴器をしかけたのもそいつだと？」

ル「その可能性が高いと思っっている、そして一番怪しい人物も特定した」ツス

そしてルナは私に一枚の写真を取り出した

ト「…この人は、先輩トレーナーさん…どうしてこの写真を？」

ル「トレーナー君が暴力やいじめを受けているとサクラバクシンオーが聞いて、助けに入ろうとしたとき、彼が隠れて君を監視していることに気付いたらしい」

ト「それで証拠にもなるかもと写真を撮ったのか」

ル「そうみたいだ、ちなみに普通に助けに行ったり下手に行動したことでそいつに警戒されたらいけないと思いき動けなかったらしい、本気で危なくなつた時は行くつもりだつたみたいだが、助けに行けなくて本当に申し訳なかつたと彼女が言っていたよ」

ト「そうか…この話が終わつたらバクシンオーのところに行くよ」

うちのバクシンオー妙に頭いいよなあ…賢さトレーニングさせまくつただけあるわな…この前速さを追求するために難しい本読んでたし

ル「さて、これからどうする」

ト「ひとまず、これだけだとまだ証拠にもならないし、証拠集めするしかないだろうなあ…」

ル「そうだね…私も手を貸そう、今回の件は正直怒っているんだ」

ト「そっか…ひとまずチームはキタちゃん以外は大丈夫そうだし事情を伝えてくるよ」

ル「わかった、彼の動向や聞き込みなどは私やエアグルーヴに任せてくれ」

ト「すまない、助かる、エアグルーヴもありがとうな」

エアグルーヴ「気にするな、流石に貴様が可哀そうだからな」

.....

現在

ト「と……まあ……ルドルフと一緒に証拠集めが始まったわけですよ」

テ「ふーん、そうなんだあ……そのあとにボクたちが知ったというわけか」

ト「そうそう、んでまあ外の雑務はタイキやスキーが代わりにやってくれたり、食事の時は弁当にしてチームメンバーでトレーナー室で食事したりとみんな協力してくれ  
たから被害は最小限だったなあ」

テ「そういえばキタちゃんは？」

ト「ああ……嫌われ薬の効果切れたとき、今までの記憶とか思いだしたら可哀そうだから、クリークに赤ちゃん返りさせてる……」

テ「ええ……」

ト「薬切れるまでクリークに任せてたらきつと大丈夫だと思っぞ？」

テ「記憶もだけど尊厳もなくしそうだねそれ……」

ト「だ……大丈夫……」

「で……証拠は順調に集まってきたんだよね、ただ」

テ「ただ？」

ト「決定的な証拠がなくてさ……そんな時、アグネスデジタルが持つてると聞いてさ」

テ「決定的な証拠を？何を持っていたの？」

ト「なんでも、最近タキ×モルやタキ×カフェにハマってるらしく、タキオンにお願いして、彼女のラボにカメラを設置してもらってたらしいんだよね」

テ「そ……そうなんだ……」

ト「で、盗んだ犯人がわかるかもと彼女にその録画データをもらいに行ったわけ」

………

昨日

ト「なあなあデジタルさんやラボに設置してるカメラのデータ見せてくれないかい？」

デジタル「うげえ……なんですか？なんであなたに見せなきゃいけないんですか？いやですよ」

あちやーやっぱ嫌われてるよ……尊いものを共有してきた同志だったのに、なんか悲し

いなあ…

ト「頼むって…どうしても見なきやいけないんだよ…」

デジタル「いやです…もう私にかかわらないでください…次関わったらけりますよ」  
ダメか…こうなったら仕方がない…こちらもあれを使うか

ト「ならデジタルさん、交換といかないか？俺が今からすごく尊い映像を見せる…だからさカメラのメモリーを貸してくれ」

デジタル「す…すごく…尊い…映像…しかたがありませんね…いいでしょう…」ジユルリ

そういうデジタルはメモリーカードをトレーナーに渡した…

ト「交渉成立！ありがとうデジタル、じゃあ、みせるぞ」

トレーナーはウマホを取り出し、映像を流した

そこに映っていたのは1匹の子猫

デジタル「まさか子猫の動画ですか」ジー

ト「違う違う、まあ見てなつて」

……………

子猫「ニャー」

? 「おや? 子猫か…」

そういうと子猫に気付いたウマ娘

ブライアン 「ふむ…」

ナリタブライアンだった、

ブライアンに近づく子猫、人懐っこい猫のようでブライアンの足元をすりすりしてきた

ブライアンはそのまま子猫を抱き上げた

ブライアン 「…」

じつと子猫を見つめる

子猫 「ニャー」

ブライアンは周りを少し確認し、

次の瞬間子猫を顔にすりすりしだした

ブライアン 「もお!! 可愛いなあー」 ギュー

………

デジタル 「!?」

あまりの出来事にデジタルは混乱した

………



ブライアン「どうしたのかな？ お母さんと逸れちゃったのかな？」キヤツキヤ  
 本来の声とはちがった、とても可愛らしい声で猫に話しかけるブライアン  
 そして

ブライアン「ニヤー!!」

子猫「ニヤー」

ニヤーニヤー言い出した

ブライアン「ニヤー、ふむブライアンお姉ちゃんか君のお母さんをさがして…」

カメラ目線になる、トレーナーがその場において、撮影している事に気付いたみたいだ  
 ブライアン「うわあああああああああああああああああああああああああああとなるな  
 ああああああああああああ」

………

そうして映像は終わった

デジタルは…天に召された

デジタル…いい奴だったよ…さて映像をトレーナー室に戻ってか

ドン!!

後ろから何かが落下した音が響いたトレーナーが振り向くと、

そこにはスーパーヒーロー着地したナリタブライアンがいた、めっちゃキレイな顔を  
 して

近くの校舎3階が少し騒いでる、こいつ3階から飛び降りたみたいだ…

あ…やばい…これ逃げなきゃマジで死ぬやつだ…

ブライアン「貴様…あの映像は消したと言ったはずだが…どういうことだ？」

ト「な…なんのことかな？」

ブライアン「映像も消さず、あろうことか他人に見せるとはな…○す!!」ツダ

そういつた瞬間ブライアンがガチギレ状態で襲ってきた…

……………

現在

テ「トレーナーもよく生きてたよね？」

ト「こつちも命がかかってましたので…」

「ちなみに猫と戯れてるデーターは先ほど消されました」

テ「流石にね…」

ト「まあそのあとデジタルにもらったやつを確認したら、見事にこいつが薬を盗んでるところが映ったわけ」

「それと同時に、食堂で俺の飲み物に薬を入れてるのも確認とれた」

テ「これにて証拠が出揃ったわけだね……で……これどうするの?」

そう指さすテイオーそこには先ほど丸坊主にさせられたクズトレーナーがぐったりしていた

ト「たずなさんに預ける予定、とりあえずルドルフ達がきつちりメたおかげかまだ起きないのか……」

ドアへコンコントレーナーサーン

ト「ほら来た」

たずな「トレーナーさんそれを受け取りに来ました」ニコニコ

物扱いかな? たずなさんもおこやんこわあ

ト「はいはいどうぞー」

たずな「それでは失礼しますねー」

。。。そういい引きずられていくクズトレーナー……あいつたぶん死ぬなあ……自業自得だし

ト「それにしても……」

テ「うん?」

ト「なんでお前らは薬が効かなかったんだろうな?」

テ「……」

……

ラボにて

タキオン「ふむ…確かにあの薬は好感度をがつつり下がってしまう代物だった…」

「好感度を数値化したら100がマックスと仮定しよう、ならその倍の数値200下がって—100になってすごく嫌われるはず…」

「だが彼女らはそれすら気にしないような、100程度では表せないほどの数値だったのかもしいないね」

「なるほど実に興味深いね…ただ…薬は絶対だったはず、皆何かしら効果はあったはずなのだが…」

「さて、私はこの好感度爆上がり薬から得た知識で作った惚れ薬をモルモット君に飲ませなくては」ククク

……

生徒会室

シンボリルドルフは窓から外を見ていた。その先にはトレーナーがいるであろう、ト

レーナー室の方であった

ル「…トレーナー君…」

その目は少し濁っているような気がした

ドアへコンコン

ル「入りたまえ」

？「失礼するわ、ルドルフお疲れ様」

ル「マルゼンスキーか…、ああ…今日は本当に疲れたよ…」

マ「あんなに取り乱して怒ってるルドルフを見たのも久しぶりだったわ」

……………

クズトレーナーに告白させた後

クズトレーナー「つぐう…もう許して…」

クズトレーナーの胸倉をつかみ、今でも殴り殺しそうな雰囲気のリドルフとそれを止めようと後ろから抑え込もうとするマルゼンスキー

ル「放せ、マルゼンスキー！こいつだけは許さない！私の…私のトレーナーに手を出したんだ!!絶対許さない!!絶対!!」

…

ル「ああ取り乱して本当にすまない…あの時は抑えてくれて本当にありがとう」

マ「いいってことよ、それにしても…薬のせいかしらね…」

ル「ん？なぜそう思うんだい？」

マ「あのトレーナーを問い詰めるとき、なんて言ったか覚えているかしら」

「私のトレーナー君って言ったのよ…」

ル「そ…それは…」

確かに…彼は私のトレーナーではない…だが自然と私のトレーナーと言ってしまつた…

マ「それに、ルドルフ…あなたは普段トレーナー君に会いに行つて不在の時は、部屋に入らずドアの前で待っていたのに、なぜ今回は入つたのかしらね…」

ル「…」

普段彼が不在の時は、確かに部屋には入らず待っていた…ただ…今回は…それをいいことに…

マ「ルドルフ…あの頃の独占欲が戻ってきてるわよ」

そういう彼女はルドルフの胸ポケットから何かを取り出す、それは、あの不在の時拝借したトレーナーの私物であつた…

ルドルフは下唇を噛みしめ…俯いてしまった…

きつと…私もだが皆、彼に対する思いや好意が変動したことで、昔あつたあの、どす

黒いものが戻ってきたのだろうか……

目の前にいるマルゼンスキーもきつと……そして……テイオーも……

……………

その夜・学生寮

マヤノ「テイオーちゃん……あのね……トレナーちゃんが見つかからないの……」

マヤノ トップガンは寝る前に同室のテイオーに相談をしていた、どうやら彼女のトレナーが行方不明らしい、ちなみにメジロマックイーンのトレナーである

マヤノ「必死に探したのに……同じチームのカレンチャンと一緒に探したんだけど……どこにも見つからないの……マヤチンの事嫌いになったのかな……」グスグス

テ「そんなことないさ……きつと何かあったに違いないよ（主にマックイーンのせいで）」

マヤノ「それに、トレナーちゃん最近大人のお店にいったみたなの……なんでマヤチンがいるのにそんなお店に行くんだろう……ねえ……なんでだと思う？ねえ……なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……ハイライトオフ

あちゃーマヤノがしつとりしでした……

あそこのチームはなかなか重たいなあ……

それにしても…懐かしいなあ…ボクもこんな感じになったときがあったっけなあ…  
ただこのまま暴走させたら大変だよね…うーん…どうしようか…

テ「そ…そうだ…もしかしたらマックイーンが知ってるかもしれないよ」

これでいいや…たぶん彼女のトレーナーに会えるだろうし…落ち着くはず

マヤノ「テイオーちゃん、それ本当？」

テ「きつと知ってるはずだよ、しらばっくれてもしつこく聞いてみてね」

マヤノ「テイオーちゃんありがとう、明日聞いてみるね」

そういうとハイライトが戻ったマヤノはそのまま自分のベッドに潜り込んだ

マヤノ「じゃあおやすみテイオーちゃん」

テ「うん、おやすみ」

そうして電気を消しベッドで横になるテイオー

テ「…」

テイオーは最近の事を思い出す、彼が薬を飲んだ日の前の日、彼は酔った勢いで大人の店に行ったらしい、それをただ単に話し合いで問い詰めるつもりだったが、彼を見た瞬間暴力に、走ってしまった

それには理由があった、あのまま何も考えず暴力に走らなければいけなかった…

彼を見た瞬間、去年経験した、あのどす黒い気持ち…



あんなボクにはもう戻りたくない：絶対戻ってはいけないんだ：あんな事もう：  
テ「トレーナー：」ボソ

絶対は今のボクだ!!あのころには決して戻らない、そう決意し、眠りにつくテイオー  
であつた

## テイオーとトレーナーと新メンバー

あの薬の一件は犯人も捕まりましたして一件落着と…

ト「んなわけあるか!!」

テ「うわ!? 突然叫んでどうしたの?」

ト「薬まだ効果切れねーんだわ!! おかげこつちはチーム勧誘に支障きたしてて、マジでふざけんなよ!!」

テ「あー大変だね…」

ト「今日もスペちゃん勧誘したらめっちゃ拒絶された。心が折れそうだ…」

テ「スペちゃん勧誘してたのね…」

ト「次にエルを勧誘しようとしたらプロレス技かけられて、その後グラスに襲われた」

テ「トレーナーもよく生きてるよね?」

ト「最後にミホノブルボンを勧誘したら、エラー、エラー言いながら爆発した」

テ「ええ…」

ト「マジで薬の効果いつ消えるんだよ…」

そうぼやく

テイオーは少し俯いた

テ「…」ハイライトオ…

(コノママ…ボクガ…)

テ「っ!？」ブンブン

ト「うん? どうした? 急に頭振って」

テ「い…いや…なんでもないよ」

ト「…そうか」

なんかテイオーの様子がおかしい気がする…ちよつと警戒しておいた方がいいのか

…?

ブブブブ

なんて考えていたら、ポケットに入ってるウマホが震えだす

ト「うん? 誰からだろう…あ…先生からか」

ウマホの画面には先生からのメッセージですと通知が来ていた

先生とは、私が大学生のころからサブトレーナーまでの間、トレーナーとして色々教

えてくれた人だ、

今では60歳になり、数多くの圧倒的な最強と言わしめたウマ娘のトレーナーとして

活躍し生きる伝説といわていた

シンボリルドルフ、ナリタブライアン、ミスターシービーはもちろん、昔はセントライトやシンザンなどのトレーナーでもあった

またトキノミノルのトレーナーであったという噂もあったとか…

そんな先生に中学生のころ憧れて、私は、トレーナーを目指していた  
だが先生も今年60…身体が限界なのか、チーム活動を休止、

チームメンバーであったマルゼンスキーやタイキシヤトルを預かってくれとお願い  
され、今では私のチームにいる

そして最近休職になり、残ったルナやブライアン達はそれぞれ自主的に活動してる状  
況だったりする

そんな先生から久しぶりのメッセージ…一体なんなのか…

ウマホを操作し、メッセージを開く…

ト「マジか…ちよつとテイオー急用ができた…理事長室行ってくる」

テ「え？トレーナー？」

私は急ぎ理事長室へ向かった

………

理事長室

トレーナーはドアをノックし返事があつたのではいる

ト「失礼します」

そこには、理事長のやよいさんとたずなさん、先生のチームに所属していたウマ娘達  
そして、

ト「先生……」

先生「お？来たか坊主」

ト「相変わらずですね……これでも、もう27なんですけどね」ハハハ

先生「いくつになろうが私からしたらお前は可愛い坊主だ」

素晴らしい笑う先生

ト「先生……トレーナーをやめるって本当ですか？」

そう悲しく先生に問いかけた

先生「私も歳には敵わなくなってきたな……もう潮時かなってな」

ト「そんな……」

先生「それに……」

私を見て近づいた

先生「新しい世代は若者に任せていいかなって思ったからさ」ニカ

素晴らしい笑顔で私の頭をポンとたたいてくれた……

先生「では、理事長。今までお世話になりました」

やよい「感謝!!前代から今までこの学園を支えてくれ本当に感謝する!!」

そういう感謝と2文字書かれた扇子を開く理事長

先生「たずなも今まででありがとうな!これから坊主やこいつらの事頼んだ」

そういう頭を深く下げる先生

たずな「本当にやめてしまおうんですね…」

彼女は笑顔だが目が少し赤かく声も少し震えていた

先生「ああ…すまん…」

そういういたずなに近づき

イママデアリガトウ…アイボウ…

小さな声でたずなに耳打ちした…

そうして先生は出口の方へ振り向いたが、ふとたずなの方へ向く

先生「お…そうだ、たずな酒はほどほどにな、お前酒癖悪いんだからさ」

そういうニタニタ笑う先生

たずな「大丈夫ですよ、ちゃんと自制して飲んでます!!」ツム

そういういたずなさんはほっぺを膨らませてた

先生「そうか?坊主と頻繁に飲みに行ってるみたいだが、酒癖悪いってたまに愚痴っ

てたぞ」

おい!!くそ爺そればらすなよ!?

周りの目が痛い、特にウマ娘からの：視線がガガガ

あとたずなさんも笑顔だが怖いオーラーが見える

先生はそのまま私の方へドアの方へ向かった

すれ違いざま先生のトレーナー室へ来てくれと言われた

.....

先生のチーム室

あれからたずなさんとよくお出かけしてるとはこういう事だと、ルナを筆頭に詰められた

なんとか逃げ切り、あのクソジz：先生の部屋についた

ト「なんでバラしたんですか：めっちゃ詰められたじゃないですか!!」

先生「ハハハ、すまんすまん、それにしても、お前はモテモテだなあ、昔の私を思い出すわ」

ト「はあ...で...」

先生「そうそう、私が引退するから私のチームメンバー何人が引き継ぐ気はないか？」

「しつかりやってるし、良いチームだとタイキヤスキーから話は聞いているしどうだ？」  
すぐくうれしい話なんだけど…そんなに入れられないんだよなあ…

チームレースだってまだ2枠までだし…

先生「何も全員引き取ってほしいわけではない、それに最近トラブって勧誘がうまくいかないんだろ？」

確かに…嫌われ薬の影響で勧誘が非常にし辛い状況だし…ここは素直に…

ト「先生、ありがとうございます」

「では、数名勧誘させていただきます」

先生「おう！頼んだぞ!!」

……………

トレーナー室

今はチームはトレーニングへ行ってるので、部屋には私しかない…

さて…勧誘へ行きますか…しかし誰を勧誘するか…

ドアへコンコン

ト「はいどうぞー」

そう答えるとドアが開き一人のウマ娘が入ってきた



ト「ん？」

初めて見る顔だな…それにしても…で…でかい…スキーくらいあるぞ…

てか私の部屋に来るってことは薬の効果効いてないのか…効かないウマ娘もいるんだなあ…

ト「何か用かな？えつと…」

？「あ…あたし…お願いがありました…」

……………

数時間後中庭

ブライアン「……」スヤア

ブライアンは生徒会の仕事をさぼって日向ぼっこをしていた

ザツザザ

足音が聞こえるブライアンは近づくと足音に反応し起き上がった

ブライアン「なんだ…お前か…トレーナー」

ト「よっ！ブライアン！相変わらずさぼりか」

そーいいブライアンの隣に座る、ブライアンは再び寝転んで日向ぼっこを再開する

ブライアン「そんなところだ…ところでどうした？」

ト「単刀直入に言うとお前を勧誘しに来た」

ブライアンは再び起き上がり目を見開いてこつちを見ていた

ブライアン「私をか？てつきり会長を勧誘するかと思ったぞ」

ト「うーん確かに考えたんだけど…テイオーにルドルフ以外の絶対的な強さを相手させて、経験させたいかなつと思つたんだ、チームレースとはいえ、1位は1人チームでも競うことになる」

「テイオーはルドルフを超えたいという目標がある、なら担当トレーナーとしてそれかなえさせたい」

「だがテイオーは絶対的な強さつてやつをまだ知らなすぎる、シービーは海外へ行つていない、なら彼女と同等またはそれ以上の存在は今ここにはブライアンお前しかない」

「だから力を貸してほしい…」

「素晴らしいトレーナーは立ち上がり頭を下げた」

ブライアン「わかった…いいだろう…最近レースにも出てなくて、ちょうどレースに出たいと思つていたんだ」

ト「そうか…ブライアンありがとう、これからよろしくな！」  
「素晴らしいブライアンと握手をする」

ブライアン「ただし、シンボリドルドルフより先にテイオーを潰してしまっても文句は  
いうなよ？」

ト「大丈夫だ、逆にブライアンがテイオーに潰されるかもしれないぞ？」

ブライアン「いったな…その言葉後悔させてやる…」

こうしてチームに新たなメンバーが2人決まった

2人？2人決まったよ

.....

翌日 生徒会室

今日ドルドルフはご機嫌だった、昨日自分のトレーナーが退職した

非常に優秀で惜しい人物がやめてしまった

同じ志を持ち彼ほどのトレーナーはそうそういないだろう…と結構落ち込んでいた

だが昨日とは違い。今日のドルドルフはご機嫌だった

それは昨日

.....

元トレーナー「坊主にチームメンバー数名引き継いでもらうことになった」

「彼に誘われたら前向きに考えてほしい」

そう元トレーナーが私たちに告げてくれた

.....

トレーナー君は中距離担当を1名探していた...

つまり...やつと彼が私のトレーナーになるときが来たのだ...

この時をどんなに待ちわびたか...彼が私のサブトレーナーだった時はたくさん  
の間を彼と共有できた

だが彼がテイオーのトレーナーになった時、その時間はほとんどなくなり、当初は絶  
望したものだ...

だが...ついに...彼の事を私のトレーナーと堂々と言える時が来たのだ...

ル「フフフ...」

ルドルフが不敵な笑いをするのでエアグルーヴはすごく気になり、どうしたのかと考  
え、わからずそして...

←エアグルーヴのやる気が下がった

そんな時、作業していたブライアンが立ち上がる、

ブライアン「会長すまない、今日から生徒会の仕事は16時までにはさせてもらおう」

ル「どうしたブライアン?何か用事でもあるのかい?」

ブライアン「ああ、昨日テイオーのトレーナーと中距離担当で契約したから、今日からチームで活動するために、早めに切り上げさせよう、ではまた明日」

ル「え？」

そう言ったあとブライアンは生徒会室を出て行った：

ル「え？は？」

ルナ「え……」涙目

## トレーナーがルナから逃亡開始

オッス！オラトレーナー！

昨日ナリタブライアンともう1名をチームに入れ、中距離とマイルが2枠になりました

あとは、短距離とダートだなあって喜んでいました

さて、本日彼女らをチームに紹介したり、初練習をしなきゃと思つて張り切つてました

ですが今私は、どうして逃げ回つてるのかな…

？「トレーナーどこお？」

しかも追つているやつが…

ルナ「トレーナー？ルナの元からどうしていなくなつちやうの？」

やべーよ！なんで？なんでルナちゃんになつてるのお?!私何かしたあ？

.....

1時間前

トレーナーはこれからの方針やトレーニング表などを作成していた

ト「…」カタカタ

うーん…ブライアンは差しか先行か…テイオーは先行だから…一緒つてのも…両方を臨機応変にやらせてみるか…

新しく来たあの子は…昨日一通り見させてもらったけど逃げも逃げもそれより先行が得意そうだったなあ…

校内スピーカーへピンポンパンポン!!

スピーカーへエアグルーヴ「トレーナー大至急生徒会室へ来るように」

ト「うん？」

エアグルーヴの声か…なんだろう…

スピーカーへエアグルーヴ「繰り返します、トレーナーだいsちよつ…会長暴れ…マイクとら…」

ト「え？」

スピーカーの向こう側で何やら…

ドアへガチャ

ブライアン「こんにちは、トレーン」

スピーカーヘルナ「トレーナー!!早く来てえー!!ルナ早くトレーナーに会いたいか

らトレーン…」

スピーカーへエアグルーヴ「……………た…大変失礼しました…トレーナーは大至急生徒会室へ来ていただきますようお願いいたします、以上」

スピーカーへピンポンパンポン

ト「

ブライアン」

?「

哑然とする3人…うん?3人?!

ト「あれ?いつの間にか来てたの?」

?「はい、ついさつき来ました。ただトレーナーさん忙しそうだったので声掛けずに、待っていました」

声かけてくれればいいのに…それにしても…何だろう…雰囲気少し…スズカに…いや…大丈夫だな!

ブライアン「トレーナー?この子も新しいメンバーか?」

ト「お…そうそう…昨日わざわざこの部屋に来てくれてさ、紹介するよ、彼女はd」

ドアへバン!!

テイオー「トレーナー!こんにちは!!あれ?ブライアンと…スカーレット!?どうして



ここに？」

ト「ん？今日からチームに入ったんだ、ところでテイオー、ダイワスカーレットの事は知ってるのか？」

テイオー「同学年だよ！」

同学年…

スカーレット「？」ドン！

テイオー「？」ストン

トレーナーは無言で悲しくなりながらテイオーを撫でた…

テイオー「急にどうしたの？というか…なんで悲しい顔をしてるのさ…ちよつとお!!」モオーツテバ!!

そんなやり取りをしていたら

ブライアン「それよりトレーナー、早く生徒会室へ行った方がいいのでは？」

そうだった…でも嫌だなあ…

ト「はあ…仕方がない…行ってくるか…あつブライアンとスカーレット、ほいこれ」

素晴らしい2人にノートを渡す

ト「トレーニングメニューと方針が記載してるから、これに目を通して、軽く練習しておいて」

「あとテイオーもサポートよろしくな、んじや練習頑張つてな」

テ「任せて！さあさあ2人とも練習しに行こう！あとブライアン同じ中距離担当として、ボクがビシバシ鍛えてあげるぞよ」ニシシ

ブライアン「ふん…言うじやないか…その余裕すぐにへし折つてやる…」  
スカーレット「はい！よろしくお願いします」

さてとウマホと財布だけ持っていくかな…ウマホ…は…

ウマホへ通知件数323件

ウマホへブープ 通知件数324件

みなかったことにしよう…

1人生徒会室へ向かうトレーナーであった…

念のため、もしもの事があつて場合、逃げるときの脱出経路確保にメッセージ送るか

…

メッセージを送ると、「お任せください!!」とだけ返ってきた

ついでに、数秒に1回来るメッセージをみたら

「トレーナーまだ?」

「ルナ寂しいよ」

「早く来ないとこっちからいくよ?」

「もう待てないよ？」

などなど同じ内容が繰り返して送られてきている…いやこえーよ

生徒会室前につく、ドアの近くでエアグルーヴがぐったりしてる…

大丈夫かと近づくと…「あ…あとは…頼んだぞ…」そういい…ふらふらとどこかへ行った…たぶん保健室だな…

彼女がふらふらと歩くのを見届け、いざ生徒会室へ入ろうとドアに手を掛けようとしたその瞬間、

ドアが少し開きその隙間から、俺の手をつかむ手が…呆気にとられていた一瞬私は…生徒会室へ引きずり込まれ、ソファに投げ飛ばされた…

ドアへガチャ

彼女はすぐさまドアにカギをかけそして…

猛ダツシユで俺の元へより…

ルナ「トレーナーエヘ…」ギユ

私に抱き着き、私の胸に顔をすりすりしだした…

ト「ルナ…一体どうしたんだい…あと少し離れよ？」

ルナ「ヤダ！トレーナーと一生こうする!!」スリスリ

うーん…困った…とりあえず理由をきかねば…

ト「えつと…どうしたんだい？…早くチームの練習見に行きたいしき、俺を呼んだ理由を教えてくださいない？」

そういうとルナはぴたりと止まった

ルナ「チーム…」

ト「ん？」

ルナ「えつとね…トレーナーなんでルナじゃなくてブライアンをチームに入れたの？」

ト「そ…それは」

ルナ「ルナね、トレーナーに勧誘されることを今日ずっと待ってたんだよ？なのになんで昨日すぐにブライアンを勧誘したの？」

「なんでルナじゃないの？ねえ…なんで？」

「なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？」ハ  
イライトオフ

やばい…めっちゃしつとりしました…

ルナ「もしかして、ルナの事嫌いなもの？ルナはトレーナーの事大好きなのに…」

ト「そんなことないぞ…」

ルナ「じゃあなんで、ルナじゃないの？」

ト「そ…それはだな…カクカウジカジカ」

(前話にて、ブライアンに話した内容をそのまま伝える)

ルナ「ふーん…」

ト「えつと…わかてて「テイオーなんだね」え？」

ルナ「いつもテイオーの事ばかり優先するんだね…ルナの事考えてくれないんだね…」

ト「そ…そんなことは…」

ルナ「ルナのが先にトレーナーと知り合ったのに…一番最初にトレーニング頑張ってきたのにね…」

ト「あれは…俺が高校生のころであって…トレーナーではなかったし…」

ルナ「でも、ルナのが全部先だったのに…どうしてトレーナーはルナのトレーナーになつてくれないの？」

「だからね…トレーナーがルナの物になつてくれるまで…もうずっとこのまま…」

あかん…マジでやばい…ひとまず…状況が悪化するけど…色々やばいから逃げよう

そうしてトレーナーは大きく息を吸い

「バクシンオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

サクバクシンオーを呼んだ!!

ルナ「ねえ…どうして他の女の子の名前をよb ドアへガチャ!!?」

閉まっていたはずのドアが少し開き…そこから何かが入れ込まれる…

次の瞬間…何かが爆発し、ルナが驚き私から離れた後、生徒会室がスモークで充満され視界が遮られた

ルナ「ケヘケホ…トレーナー!?!どこお!見えないよ!!」

ト「よし!!今のうちに!!」

素晴らしいトレーナーは立ち上がろうとする…

だがトレーナーは立ち上がる前に抱き上げられていた、バクシンオーに

バクシン「さあトレーナーさん助けに参りましたよ!」

ト「バクシンオー助かったよ」

バクシンオー「では、どこまで行きましようか?」

ト「ひとまず、バクシンオーにもトレーニングノット渡したいし、トレーナー室まで」

バクシンオー「わかりました!!それでは、バクシン!!」

素晴らしい私を抱き上げたままトレーナー室まで駆けて行った

ルナ「トレーナー…やつば逃げるんだね…もうルナ怒った…絶対にルナのトレーナー

になつてルナだけのものにするんだから」ハイライトオフ

逃亡中へ続く

## トレーナーはルナから逃走中

トレーナー室へ戻り

バクシンオーにトレーニングノートを渡し、トレーニングへ向かわせた  
ちよつと心配はしていたが

バクシンオー「トレーナさんがもしピンチになつても、学級委員長の私ならすぐに駆け付けれるから……まあ大丈夫ですね！」

と自分で納得しトレーニングへ向かつていった

学級委員長つてすごいなあ……

さて……私は……逃げるか！

とりあえず匿ってもらえる当てがあるのでそこへ行くことにした

ただ……まだ嫌われ薬の効果が切れてないんだよなあ……

ダメ元か……最悪怪我するかもなあ……

そう考えながらそこへ向かおうと廊下にでると

ドドドドドドドド

うん？何の音だ？



音が出る方を見ると：

ルナが：全速力でこっちに向かって走ってる：

なぜかエアグルーヴを引きずって：

ルナ「トレーナーアアアアアアアアアア」ドドド

エアグルーヴ「：カイチヨ：トマツテ：」ズルズル

反対側の廊下走っても絶対逃げ切れんやん：

なら：

トレーナーは自分の部屋に戻りカギを閉めドアの後ろに本棚と机を倒し：

そして、窓から逃げた：

トレーナーは窓から出て当てる場所へ走って向かう

途中、せっかく簡易的に作ったバリゲートもむなしく、トレーナー室からドアとバリ

ゲートが破壊される音が響いた：

3分ももたなかったか：

ルナ「トレーナーどこお？」

「トレーナー？ルナの元からどうしていなくなっちゃうの？」

エアグルーヴ「：カイチヨ：ウ：」バタ

エアグルーヴは力尽きた

やる気が絶不調になった

.....

マックイーン（トレーナ）の部屋

※ここではマックイーン達は

マックイーンのトレーナーをトレーナーと呼び

テイオーのトレーナーはゴミだのアレだの悲しい呼び名になります

マックイーンのとトレーナーは今、

彼のチームメンバーにめっちゃ抱き着かれてて困っていた

マ（ト）「あの…皆さん…もうそろそろ離れてくれませんか？（理性がきつい…）」

「「いや（ですわ）」」

マヤノ「トレーナーちゃんマヤにもっとギューとして」ギュー

ライス「あ…マヤノさんずるい！お兄様ライスにも！」ギュー

マックイーン「まったく…お二人とも…私のトレーナーを取らないでいただけません

か」ギュー

マックイーン（ト）「ここに…エデンがあつたんだなあ…やっぱロリ体系って最高だ

Z E ☆」

相変わらずロリコン変態なマックイーン（ト）：でも、こいつめっちゃイケメンだから解せぬとテイオーのトレーナーは毎度思う

なおそんないやいやいやした空間でも動じず無言で本を読むサトノダイヤモンド

サトノ「：」ペラペラ

そんな時を過ごしていたらマックイーン（ト）のポケットに入ってたウマホが震える  
マックイーン（ト）「うん？メッセージ：あいつ（テイオーのトレーナー）からか」  
メッセージを見てみると

来週 叙々苑 おごる 重馬場 匿って 頼む

と送られていた

彼は了承とだけ送り

マックイーン（ト）「マックイーンさんその窓を開けてもらってもいいですか？」

マックイーン「ええ：わかりましたわ」ガラガラ

マックイーンはなぜ開けるのかわからないが指示されたとおりに開けた

窓を開いた瞬間!!

トレーナー「お邪魔します！」

2階にあるこの部屋にトレーナーがよじ登ってきた

マックイーン「キャアア!?あなたどこからいらっしやるの!」

トレーナー「誰にもばれずにここに来ようと思っただけここよじ登るしかないから仕方がない」

あまりの出来事にポカーンとするマックイーン

マックイーン「…っは、それよりも!!ここであつたら100年目ですわ!!今日こそわたくしにボコられなさいませ」ボコボコデスワ

素晴らしいロツカーからバットを取り出すマックイーン

ライス「刺していく…刺していく…」ツス

勝負服の装飾品の短刀を構えるライス

マヤノ「テイオーちゃんには、悪いけど…それでも見てるだけでなんかむかつくし、私のトレーナーちゃんへの悪影響だからおとなしくやられてね?」

構えるマヤノ…その構えアメリカ陸軍格闘技じゃね?

サトノ「見てるだけで気分が悪いので、グラウンド行って練習してきます、キタちゃんは何んでこんなゴミみたいなトレーナーを選んだんでしょう…」

素晴らしい部屋の外へ出るサトノダイヤモンド…正直傷ついた…めげるわ…

トレーナー「ちよ…タイム!タイム!匿ってもらいに来ただけだから今回は見逃して

!!」

マックイーン「だめですわ!!私のトレーナーさんの部屋に来るなんて…本当に虫唾が走りますわ!!お覚悟なさいまし!!」

「素晴らしいこちらへ全力で向かってくるマックイーン達

だがトレーナーの前にマックイーン(ト)が割り込む

マックイーン(ト)「みんなストップ!ストップ!」

マックイーン「トレーナーさん止めないでくださいまし!」

ライス「お兄様どいて!そいつ殺せない!」

マヤノ「トレーナーちゃん…どうして止めるの?」

マックイーン(ト)「みんな落ち着いて…俺の親友にそんなことしないでくれ…今日ば

かりは協力してほしいんだ…頼む…」

「素晴らしい深々と頭を下げるマックイーン(ト)のトレーナー

流星にマックイーン達も大好きなトレーナーには嫌われたくない

「苦虫を噛み潰したような顔しつつ

マックイーン「わ…わかりましたわ…トレーナーさんがそこまで言うなら…」

「ですが…もし何か変な…ことしましたらボコボコにしますわ!!」

「素晴らしい…マックイーン達はテイオーのトレーナーを警戒しつつ離れて行った

たぶん近くにいたくないんだろなあ…まあ蹴られるよりかはましか…

トレーナー「マックイーン（ト）ありがとうな…」

マックイーン（ト）「別にいいよ親友だろ？あと叙々苑の件よろしくな!!」

トレーナー「おう！任せろ！」

………

10分後 マックイーンのとレーナー室

ドアへドンドン！

ル？「開けろ！シンポリルドルフだ!!」

え？見つかるの早くね!?

トレーナー「やべーよ！やべーよ！」

慌てるテイオーのとレーナー

マックイーン（ト）「マックイーン…すまないが頼む…決してここにトレーナーは居な

いと対応してくれ…」

マックイーン「ええ…そのまま会長さんに引き取らせればいい話ではなくて？」

マックイーン（ト）「お願いだマックイーン…今週の土曜日デート連れて行くからさ

…」

マックイーン「仕方がないですわ／／／／／／／／／／／／／／／／／」

そういいながら満更でもなさそうなマックイーン、そしてマックイーンのトレーナーに絶望した顔で睨むマヤノとライス

.....

マックイーンのトレーナー室前の廊下

ここか……ここはマックイーンのトレーナー室……

トレーナーの匂いを追ってきてみたら……どうやらこんなところに隠れているらしい

……

ほのかに大好きな彼の匂いがある……まったくルナからは逃げられないんだから……

さてどういくか……とりあえず……会長として君たちの活動を見に来たという感じで行

くか……

そう決めたシンボリドルフ？は……

ドアをゆつくりとたたかと思ったら

ドンドン!!

ル？「開けろ！シンボリドルフだ!!」

勢いよく叩き！なんか意味不明な行動に出ていた……

しまった……トレーナーが見つかった喜びや、逃げた怒りやらがごちゃ混ぜになって、

考えと違う行動に出てしまった…

どうしよう…こうなったらもう勢いに乗ってドアを突き破って強行突破か!?

と思つた矢先、ドアが開いた…そこから出てきたのは…

ル? 「メジロマックイーン…」

マックイーン「会長さん急にドアを叩かれてびっくりいたしましたわ、本日はどのようなご用件でしょうか？」

ル? 「メジロマックイーン、すまないがそこに私のトレーナーは来てないかい？」

マックイーン「あら? 貴方のトレーナーは、先日引退なさつたはずでは? 生きる伝説と言われた彼の引退、衝撃的でしたわね、ちなみにおばあ様もそのことを知り、彼を追いかけてようとして今メジロ家では大変なことになってますわよ?」

ル? 「すまない…彼の事ではない…」

マックイーン「あら? 誰でしょう…まさか、テイオーの、トレーナーさんでしょうか」

ル? 「その通りだ…あとなぜテイオーのを強調しているんだい?」

マックイーン「お気になさらず、彼ならここにはいませんわよ?」

ル? 「そんな事あるはずない! ならどうして彼の匂いとその部屋からするんだ!?!」

マックイーン「あら?…さつきまで私のトレーナーさんとお話してもしてたのでしょ



？今はいませんわよ」

ル？「そ…：そうか…：疑ってすまなかつたな…：では…：」

ここで無理に押し通そうとしても、トラブルが起きたりするかもしれない、まだある理性が止めている…：この場を後にしよう…：別の方法で彼を捕まえよう

マックイーン「全く…：私のトレーナーさんも困ったものですわ…：なぜあんなクズと

…：」

ルナ「は？」

逃亡の果てにへ続く

トレーナーはルナから逃げれないのか？

どうも

トウカイテイオーのトレーナーです

ドカ！バキ！ドオン！

隣にいるこいつは、マックイーンのとレーナーです

こいつは学生からの付き合いで同期で親友です

ドン！ズドン！バキ！

今私はルナに追われていたので、彼の部屋で匿ってもらってます

ズドン！ドン！ドドン！ガシャーン！

ですが、ルナは居場所を突き止めこの部屋の前まで来ました：

なので、マックイーンに対応してもらったのですが：

ドン！ドン！ドカ！バキ！ガシャーン！ドシャーン！

対応ってなんだっけ：

彼女らは今：

ルナ「トレーナーの悪口を言うなあああ」シユツ

マックイーン「そっちこそおお」ブン  
屋上で死闘を繰り広げていた…

いやウマ娘同士のガチのやり合いはまずいって…

轟音がこのトレーナー室まで届いてる…

どうしてこうなった…

両トレーナー「はあ…」

……………

30分前 マックイーンのトレーナー室前

ルナ「今なんて言ったの？」

マックイーン「どうなさいました？」

ルナ「今なんて言ったのかと聞いているの!!」ドン

そう叫び床を勢いよく踏みつける彼女の足元にある床に亀裂が走る

マックイーン「私のトレーナーさんも困ったもので…」そのあと!!」なぜあんなクズ

「っー」ドン!!」

もう一度踏みつけ床がさらに割れる

ルナ「なんで、ルナのトレーナーの事を悪く言うの？」

マックイーン「はい？あんな奴クズで構いませんわ！（ルナって誰かしら…）」

ルナ「ルナのトレーナーはクズじゃないもん!!」

マックイーン「それより…会長…ルナって「…のトレーナーのが…」っえ？」

ルナ「貴方のトレーナーの方がロリコンだし、変態で気持ち悪いじゃん！ルナのトレーナーよりクズだもん！」

マックイーン「は？」ドン

その言葉を聞いた瞬間マックイーンは、マックイーンのトレーナー室とは反対側にある壁を殴った

壁は粉碎し…その壁の部屋でいちやいちやしていたナイスネイチャとそのトレーナーが晒された…

ネイチャ「キヤアアアアア！え…なんですかこれ…」

ネイチャと彼女のトレーナーは顔を赤面させつつ…この異様な光景に混乱しながら固まる

マックイーン「誰のトレーナーが変態で気持ち悪くてクズでゴミですって」ワナワナルナ「そこまで言ってるじゃない！でもそうじゃん!!」

「小さい子が大好きなんておかしいもん！」

マックイーン「は？」ブチ

マックイーンは目にハイライトも消え、青筋を立て  
マックイーン「ここじや死人が出ますわ：屋上へ行きませんか？：ひさしぶりに：  
キレちまったですわ：」

.....

現在

ルナ「オラアアアアアア」ドガ

マックイーン「ナンノオオオ」ドン

ドン！ドガ！ズドン！ドガシャー！

かれこれ30分は経ったのだが：

まだ死闘が繰り広げられているらしい：

てか屋上めちやくちやになってそう：

後始末どうしよう：

マックイーンのとレーナーも彼女らを心配しているみたいだが、行つても返り討ちに  
あうか巻き込まれて最悪死ぬ：なのでどうしたものかと苦笑いしている

マヤノとライスは恐怖してマックイーンのとレーナーにしがみついて震えている

ズドン！ドン！ドン！！：

最後のすごい大きな音が鳴り終わると、静寂が戻ってきた…  
終わったのかな…

マックイーンのとレーナーは立ち上がり

マックイーン（ト）「ちよつと様子を見てくるよ…マヤノとライスも付いてきて、  
レーナー君はそこにいて」

素晴らしいマヤノとライスを連れ外へ

数分後…

マックイーンのとレーナーが帰ってきた、なぜかすごく申し訳なさそうな顔をしてい  
た

マヤノとライスと…ボロボロになったマックイーンと…ルナが入ってきた…

なん…だ…と…

トレーナー「ど…どうして…うお!？」

そうつぶやくが次の瞬間タックルされた…ルナに

ルナ「ルナのとレーナーやつと捕まえた!」ギュー

めつちや抱きしめてくる…苦しい…背骨折れるううううう

マックイーンがなんか笑顔だ…その後ろで彼女のトレーナーがめつちや平謝りして

る

トレーナー「ど……どうして……」

マックイーン「会長さんと拳を交わらせていくうちに友情が芽生えましたの！」  
「あと話しているうちに、会長さんの恋を応援したくなりましたわ!!」

この駄目ジロめ……

ルナ「さあトレーナー行くよー」ギユ

こうして私はルナに捕まった……

トレーナー「」

………

夕方廊下

あーチームの練習見に行きたかったなあ……

ブライアンやスカレットの練習見たかった……

特に、ブライアン……テイオーとどんな感じで練習したか見たかった……

並走とか、レースとかしたのかなあ……結果とか気になる……

ルナ「♪」

鼻歌を歌いながら上機嫌なルナ

トレーナー「…」

今連行されている…どこへ行くのだろうか…監禁されるのかな…困ったなあ  
逃げようがないし…バクシンオーを呼ぶしかないか…

などと…逃げる方法を考えているトレーナー

ルナ「ツム」ピタ

進行先の何かに気付き、ルナが止まった

トレーナー「？」

私はルナが見つめてる先を見た…そこには

？「…助けに来たよ、トレーナー！」

トレーナー「テイオー…」

そこには、私の相棒、トウカイテイオーが立っていた

練習が終わってからずっと俺を探していたのか、

まだ練習着のまま、汗をかいており、少し息が上がっていた

そして…私は気づいた、彼女の目の奥が少し濁っていることに…

おまけ

キタサンブラックは



.....

寮、スーパークリークとナリタタイシンの部屋

クリーク「はあい、キタちゃん、ちゃんとミルク飲んでいいこでちゆね」

キタサン「……」ゴクゴク

今クリークはキタサンをトレーナーが飲んだ薬の効力がなくなるまで、赤ちゃん返りさせられていた……

ちなみに同室のナリタタイシンはそれまでの間サトノダイヤモンドのところへ引越している

キタサン「……」ツプ

クリーク「飲んだ後ちちゃんとゲツプもしていいこいいこ」ナデナデ

キタサン「キヤツキヤ」♪

果たして、薬の効力がなくなった時、キタサンはいつものキタサンに戻るのだろうか……

おまけ（重馬場）

薬の効果が効かなかった理由

.....

新しくチームに入ったダイワスカーレット

トレーナーは彼女と面識なく、そう言ったウマ娘にも殺される勢いで薬により嫌われていた

だがなぜか彼女だけ薬の効果が効かなかった一人である

スカーレット「初めてのトレーニングなかなか悪くなかったわね、ただトレーナーが不在だったのは少し残念だったわ……」

彼女はチームに入り、初めてのトレーニングを行った

トレーナーが作ってくれたトレーニング表はなかなかいいもので、すぐくためになると実感できた

同じマイル枠のマルゼンスキー先輩と並走……私より圧倒的に早かった

私も負けずと本気を出し久しぶりにトレーニングで心が燃えた気がした

このチームに来て正解だったと実感する……

それに……

スカーレットは寮の自室に入る

スカーレット「ただいま……」

ただいまに對し返事がない

それもそのはず同室のウオツカは、アメリカへ行っており現在は不在  
では、誰に：

スカーレットが部屋の明かりをつけるとそこには：部屋の壁一面、トレーナーの写真  
が貼られていた

スカーレットはそのままベットに飛び込み：

トレーナーの写真がプリントされている枕を抱きしめた：

スカーレット「ふふん♪：トレーナーさんの一番は私なんだから」ハイライトオフ  
どうやら効かなかったわけではなく

好感度がガッツリ落ちる程度の薬では、しっとりする程度のウマ娘だったようだ：

## テイオーとトレーナーとルナ

テイオー「助けに来たよ、トレーナー！」

トレーナー「テイオー……」

ル？「テイオーすまないが、そこをどいてくれないか？これからトレーナー君に用事があるんだ」

テイオーの前では、会長としてふるまいたいのか、ルナからルドルフに戻ってる……  
テイオー「えーカイチョー、せっかくあったんだし、お話ししようよ」

そういうニシシと笑うテイオーだが目は笑っておらず、その瞳には殺意すら感じる  
ル？「すまない……これから用事があるから構ってあげられない……」

ルナはテイオーに進行の邪魔をされて少しイラついているようだ  
テイオー「そっか、でもねボクもカイチョーに用事があるんだ」

食いつくテイオー

ル？「……私には用がない……テイオーどいてくれ……」

テイオー「ダメだよ……ボクの用事が最優先なんだ」

ル？「しつこいぞ！テイオーそこをどけ！これから私のトレー「違う!!」は？」

テイオー「カイチョーのトレーナーじゃない！彼はボクのトレーナーだ!!」

「カイチョーの方が付き合いが長くても！ボクはまだカイチョーやブライアンより弱くても!!」

「彼はボクのトレーナーだ!!」

ル？「ツ……」

テイオー「カイチョー……今……彼が欲しくて仕方がないんだ」

ル？「当たり前だ……私は彼が……」好きなんだね」　　っ……」

テイオー「わかるよ……ボクだってそうさ」

「好きで、好きで……でも自分の物にならない……すぐくつらいよね……ボクだってそう思ってた事があつたよ」

「そういいながらテイオーは近づくと目にはハイライトがなくなっていく……」

テイオー「でも、自分の物にしようとして、今やろうとしているような事してもダメなんだ……トレーナーは手に入るかもしれない……」

「それでもトレーナーが欲しい、ボクもそう思ってた時もあった……でも去年……ボクは暴走して、トレーナーを……」

「そういい……少し俯いたテイオー」

テイオー「そして気づいたんだ、こんなことをしたら、ボクやカイチョーがそしてみ

んなが大好きだった優しく、時に馬鹿なことを言い合ったり、ボクたちのために一生懸命なトレーナーは、一生涯に入らなくなるんだって」

「それに、自分がよくても、周りを不幸にしてしまう…」

その声は、少し震えていた…だがすぐに顔をあげる…

テイオー「だからボクは二度とこんなことをしてはいけない！させてはいけないって決めたんだ!!」

先ほどまで濁っていた目ではなく、その目には決意を宿していた

私は、その決意を聞いて…去年シニアの時を思い出した…テイオーにされた事を…

それを許し、これからも共に頑張ろうと約束した判断は正しかったのと…テイオーが大人になったなあと感じ感動した…涙が出そうになったが耐えた…心が大人になったんなら身体も…テイオーが一瞬睨んだ気がする…

ルナは…「チガウ…ソレデモ…ルナハ…」とブツブツ俯いてつぶやいている

テイオー「それに、カイチヨウ言ったよね、ウマ娘誰もが幸福になれる時代を目指したいってこんなんじゃないよあ誰も幸福になれないよ」

ルナ「うるさい！うるさい！うるさい！何がわかる！ルナがどれだけ我慢してたか…テイオーオオ！」

痛いところを突いたのか、我慢の限界が来たのか、テイオーにつかみかかろうとする

トレーナー「おい！やめ」

私がそう言おうとした瞬間

？「シンボリルドルフさんダメですよ」

誰かが横切った…次の瞬間テイオーに向かつて行つてたルナが倒れた

彼女の元に立っていたのは…たずなさんだった

たずな「トレーナーさんのお部屋の現場確認、エアグルーヴさんを保健室に連れて行つたり、屋上の現場確認をして、遅くなりました、すみません…」ペコリ

トレーナー「い…いえ…たずなさん助けに来てくれてありがとうございます」

たずな「では、私は今からメジロマックイーンさんにも屋上や壊した壁について、お聞きしなきゃいけないので失礼しますね」

「トレーナーさんは、またあとでお話ししましょうね♪では、トレーナーさんテイオーさんお疲れさまでした」

そういうルナを担いでマックイーン（ト）の部屋に行つた

またあとでつてことは…今日も飲みかな…

そうして、残された、私とテイオー

テイオーは、ぺたんとその場に座り込んだ

テイオー「あははは、腰が抜けちゃった…」

そういう笑うテイオー私もつられて笑いそうになるが我慢し背中を差し出す

トレーナー「ほら、つかまれ」

テイオー「うん」ギユ

テイオーをおんぶし、歩いていると

テイオー「トレーナー」

トレーナー「なんだ？」

テイオー「今日ねブライアンと模擬レースしたんだ」

トレーナー「そっか…どうだった…」

テイオー「ボク全く勝てなかった…クラシック3冠とつて春も秋のシニアも3冠取っ

て無敗だったのに…ブライアンには歯が立たなかったよ…」

トレーナー「先は遠いな…」

テイオー「うん…」

トレーナー「それでも…」

テイオー「それでも？」

トレーナー「それでも…いつかは…」

テイオー「うん！絶対！」

トレーナー「テイオー」



テイオー「何？」

トレーナー「お前が相棒で本当によかったよ、ありがとうな」

テイオー「う……うん／＼／」

………

一方そのころ

マックイーン「どうして、私も説教されなきゃいけませんの!？」セイザ

シヨンポリルドルフ「……シヨボン

たずな「貴方たちが暴れたせいで、屋上とナイスネイチャ（ト）室の壁が無茶苦茶になりました」

マックイーン「そ……それは……確かに暴れたのはわたくしですが……それでもわたくしは被害者ですよ!？」

たずな「黙りなさい! 2人には今週いっぱい屋上の掃除と毎朝の清掃活動を罰則として課します」

マックイーン「!?ま……ま……まってください、もしかして、それは土日ですか?」

たずな「当たり前です、まさか土日もせずに屋上の掃除が終わるとでも?」

マックイーン「そ……そんな……今週の土曜日は……トレーナーさんとのデートが……」ヨヨ

ヨ

その後、マックイーンとルドルフは1週間屋上の掃除と毎朝の清掃活動をした  
マックイーンは彼女のトレーナーにガチ目に泣きついて、デートを延期してもらった

.....

次の日

うーん…昨日はたずなさんと飲みすぎたな…

昨日の事情はちゃんと伝えたけど、あんなに酔ってたら忘れてそう…

さて、ルナとの一件が終わった…さてとどうしたものかね、私事態はあまり怒ってないが  
気がまずいよなあ

などと考え事してたら、普通に校門から何も対策せず来てしまった…

あ…やべえ…最近是谁にも会わないために裏口から来てたけど…

あいつら以外のウマ娘に見つかったら何されるかわからない…

冷や汗をかき、もう一度引き返して…裏口に戻ろうとした時

? 「お…おはようございます…」

振り向くとそこには、今にも泣きそうな顔をしたスペシャルウィークがいた

トレーナー「スペちゃん…」ツバ

今まで罵声やられた事を思い出し身構えるトレーナー

その動作を見たスペシャルウィークは

スペ「うえええん…ト…レ…ナーさ…うえ…ごめん…な…さい…」グスグス

トレーナー「え？」

突然のスペちゃんの号泣にびっくりするトレーナー

流石の周りに観られたら気まずいってかまずいと思い、あたりを見回すと、なぜか私

を見て泣いてるウマ娘が…

ま…まさか…薬の効果が…切れたのか…

ひとまずスペちゃんに薬の効果だし、怒ってないし大丈夫と伝えるも、

なかなか泣き止まず、大変だった…その後が大変だった…

ウマ娘に出会う度に泣かれるし、すごく謝ってくる

……………

エル「あ…トレーナーさん…」

グラス「トレーナーさん…」

トレーナー「エルとグラス…」

エル「エル…トレーナーさんにひどい事たくさんしてしまい本当にゴメンなさい…」

グスグス

グラス「トレーナーさん…誠に申し訳ございません…」ドゲザ

トレーナー「ちよ…グラス…土下座しなくても…エルも泣くなつて…怒つてないからさ!!大丈夫だから!」

グラス「…本当にすみません…トレーナーさん…」ナミダメ

トレーナー「これからも仲良くしてくれたらいいからさ!な!」

エル「グス…ハ…ハイ…」

グラス「…グス…はい…」

トレーナー「じゃあ俺はこれ「あ…あと」ん?」

グラス「私がノーパンだの…僧侶の衣装着てるけどザキやザラキなどの死の呪文しか使えないだの…淫乱だのと噂をエルと流してた件でお二人にお話が…」ニッコリ

トレーナー・エル「」

……………

アグネスデジタル「トレーナーさん…尊いものを共有してた同志なのに…傷つつけて本当にごめんなさい」ドゲザ

ここでも土下座か…

トレーナー「デジタル…まあ暴力振るわれてないし、そんなに実害なかったしき!全

然大丈夫だよ！気にすんな！」

「それよりさ…昔エアグルーヴとき、ものすごく怖い映画を見た後の反応を動画でおさ  
m」

？「ブライアンが言ってた通りやはり消してなかったのか…」

トレーナー「やば…」

………

トレーナー「!!」キピーン

トレーナーは咄嗟に後ろからくる蹴りを避けた、蹴ったのは

マックイーン「テイオーのトレーナーさん！ここであつたら百年目ですわ!!」

クズ呼ばわりはしなくなったから効果はきれてるんだよね？

トレーナー「マ…マックイーン!?!どうして!?!」

マックイーン「貴方のせいで、今週朝は清掃活動、放課後は屋上の掃除になりましたの!!おかげでわたくしのトレーナーさんとのデートも中止ですわ!!許しませんわ!!」

トレーナー「ええ…」

………

などなど他にもモブの女の子にすごく泣かれたり、謝られたりされた

ハルウララにも泣いて謝られた…逆に私が耐えれなくなって号泣してしまった…  
泣くの見るのがってなんかこっちのメンタルがきつい嫌われで罵倒や暴力振るわれて  
た方が楽な気がする…

まあ…これから関係修復に努めたらいいか…大変だけど頑張ろう…

そして、へとへとになりながら…

トレーナーは自分の部屋に行くと、かつてドアがあつた場所の前でルナが申し訳なさ  
そうに待っていた

## テイオーとトレーナー、一難去つて

キタサン視点 放課後

キタサンブラックはいつものように授業を終えトレーナー室へ向かっていた

ただよくわからないがここの週間程、授業を欠席していたという事実

なぜ欠席していたのか思い出そうにも彼女はここ最近の記憶があいまいで思い出せないでいた

キタ「私…どうしたんだろう…」

ダイヤちゃんに聞いても教えてくれなかったし…

他の友人にも聞いても同じだった…

ただ…今日の朝起きる前の記憶をあやふやだが覚えてはいた…

放課後自主練をした後に、クリークさんがやってきて…

キタ「この後が…思い出せない…」

そういえば自主練？なぜ自主練してたんだろう…トレーナーさん達とトレーニングすればいいだけなのに…

トレーナーさん…あれ？トレーナーさん…なんだろう…よく覚えていないけど…  
キタ「トレーナーさんに謝らないと…」

なぜだろう…トレーナーさんに謝らないといけない…そう…思う…

………

トレーナー視点 グラウンド

トレーナーと休憩中のテイオーはベンチに座って練習を眺めていた

テイオー「トレーナー今日もいい天気だねー」

トレーナー「そうだねあ」

テイオー「トレーナーあそこ見て見て〜」

トレーナー「エルが薙刀持つてるグラスに追われてるなあ」

テイオー「平常通りだねー」

トレーナー「そうだねあー」

テイオー「チームの皆、今日も元気に練習してるねー」

トレーナー「そうだなあスカーレットもスキーと並走トレーニング頑張ってるルドル

フがタイム計ってるなあー」

テイオー「クリークは今日から復帰するキタちゃんを待ちながらストレッチしてる



ね」

トレーナー「あつちでは、ブライアンが筋トレしてるな次一緒に並走な」

テイオー「うん！わかったよ！あそこではタイキはバクシンオーとダートで足腰鍛えてるね」

トレーナー「そうだなあー」

テイオー「ところでさートレーナー」

トレーナー「なんだい？」

テイオー「どうして練習にカイチョーがいるの？」ニコニコ

トレーナー「…」

テイオー「ねえ…なんで？」ハイライトオフ

トレーナー「えつと…色々とあつて…サブトレーナーとして…」

テイオー「色々つて何？」ガシ

テイオーはトレーナーの腕首をつかむ

トレーナー「強く握りすぎ…痛い折れる折れるうわかった話すから！いったん離そう

!？」

「今日朝俺の部屋に来た時ルドルフがいて…」

………

回想 朝、トレーナー室前

ル「トレーナー君……」

トレーナー「ル……本当に申し訳ございません」え？」

ルナは、トレーナーに頭を下げ謝った

ルナの身体は震えていた

トレーナー「……」

ここで許して……でもまあ……昨日あんなにやらかしたし……

少し罰がてらいじめてみようかな……（死亡フラグ

トレーナー「……ルドルフ」

ル「!?」ツバ

ルドルフと呼ばれた瞬間顔をあげる、その顔は絶望に染まっていた……

トレーナー「……」

私は普段より5割増しで真剣な顔になりルナに近づく……

ルナは普段とは違う私に怯え今にでも泣きそうであった

なんかこう言うかと最低な男に聞こえるが、さつきまで色んな子に泣かれてたから……耐

性がついてきたのか……泣き顔に動揺しなくなってきたな……

ルナの目の前まで来たな…さてどうするかなあ…

まあ最後にルドルフって呼んでネタバレしながら撫でればいいか

トレーナー「ルドルフ…」ツス

もう一度彼女を呼び手を頭に差し出そうとした瞬間

ルナ「ご…ごめ…ごめんないやい…トレーナー…ごべんなじやい…」エグエグ

叩かれるのかと思ったのか頭を抱えてしやがみこんでガチ泣きするルナ…

やりすぎた…

トレーナー「ルナ…泣くなつて悪かった…怒つてないから…泣き止んでくれええええ

えええ」

5分ほど号泣してたルナをあやし、何とか落ち着いてくれた…

ついでに、先ほどまで意地悪してたこともバラしてしまい…

ル「…ふん」ツーン

トレーナー「ごめんってルナ…機嫌直してくれ…」

ル「知らない」ツーン

トレーナー「次中距離か遠距離棒が空いたらチーム勧誘するからさ…」

ル「ほんとうに？」

トレーナー「ああ…いつになるかわからないけどさ…」

ル「じゃあ…」

ルナは笑顔で私にある提案をした

……………

トレーナー視点 現在

なんて、テイオーに全部言ったことがルナにばれたら後々面倒だしここの部分は端折るか…

トレーナー「ルドルフは3枠目が空いた時に誘うって約束したんだけどさ」

テイオー「え？そうなんだ！カイチヨと一緒に走れるんだ！」

トレーナー「ただ…3枠目を増やすためにはレースに勝たなきゃいけないだろ？」

テイオー「うん…」

トレーナー「んでルドルフがより勝利が確実になるために私もサブトレーナーとして皆を支えたいと言い出して…」

「最初は申し訳ないと思いつただけど…どうしてももって言うてきかなくて…まあそこまで断る理由がないし、いいかなって」

テイオー「あートレーナーってそういうときの押しには弱いよねえ」

トレーナー「強くなりたいよ…」

テイオー「そこも含めて良いところだと思おうよ」

トレイナー「そうかなあ」

うーんそんなもんなのかなあと考える

？「ト…トレイナーさん！テイオーさん！」

呼ばれたので、振り返ると、そこにはキタちゃんがいた

クリークに効果切れたからと伝えたその日に復帰だもんなあ…大丈夫かな…

テイオー「キタちゃん…こんにちは!!」

トレイナー「や…やあ…キタちゃん」

キタちゃんは、悲しそうな顔をし、私に聞いてきた

キタ「トレイナーさん…あの…私…トレイナーさんに何かひどいことをしたのに…覚

えてなくて…」

トレイナー「…」

流石に全部忘れるって都合のいい事はできないか…

隠し通せるわけもないし…誰かに言われるより、私が言った方がいいよな

怒つてないことや悪くないと伝えられるし…

トレイナー「キタちゃん…実はな…」

.....

ルドルフ視点

彼のチームのサブトレになったルドルフは、ダイワスカーレットとマルゼンスキーの練習を見ていた

だがトレーナーの方で誰か来たみたいだからそっちの方を見た

ん？キタサンブラックか：トレーナー君が深刻そうな顔をしているということは、おおかた薬の件を話しているのか：

トレーナー君が何か伝え、それを聞いたキタサンブラックは、ショックを受けた顔になる

次第に、悲しそうな顔になり、トレーナー君に頭を下げて謝っていた

トレーナー君はそんなキタサンブラックを落ち着かせようと必死に何か言ってる  
ル「まったく、彼は優しいな：」

そうつぶやく

？「そうですね」

後ろから声があった後ろを振り向くとそこにはダイワスカーレットが立っていた

ル「やあ：君はダイワスカーレットだったね：トレーナー君のチームに入ってくれて

感謝するよ」

スカレット「いえ、とても気になっていたチームだったので…」

ル「そうか…よろしく頼むよ（…これは…なんていうか…彼女と纏っている雰囲気か似てる…）」

ルドルフは…スカレットを見て…何かに気付いた…

スカレット「はい！これからよろしくお願いします」

素晴らしい練習に戻るスカレット

ル「ライバルが増えたか…私も含めてだが…トレーナー君も大変だな…」

スカレットを見ながらそういうルドルフ

ル「全くトレーナー君は…どうして…そう」

苦言をこぼしそうになる

ル「だが…」

最後に勝つのはこの皇帝だ！

そう心の中で叫ぶルドルフであった

……………

トレーナー視点

キタ「トレーナーさん…」

トレーナー「キタちゃん落ち着いたか？」

キタ「はい…」

テイオー「今日はたくさんの子を泣かせてばかりで本当に罪なトレーナーだねえ」ニシシ

トレーナー「うるせー貧乳！」

テイオー「ライスよりあるんですけどお!？」

そんな馬鹿なやり取りを見たキタちゃんは

キタ「フフフ」

まだ少し涙目だが笑ってくれた…

トレーナー「とりあえず、キタちゃん」

キタ「はい…」

私は、キタちゃんに頭を下げた

キタ「ト…トレーナーさん!？」

それを見て驚くキタちゃん

トレーナー「キタちゃん!こんなことになってしまったけど、もう一度、俺の専属としてチームメンバーとして続けて欲しい!よろしくお願いします」

キタ「トレーナーさん頭をあげてください」



「むしろこっちからお願ひします…よろしくお願ひします!」

素晴らしいキタちゃんも頭を下げる

テイオー「これで一件落着だねトレーナー!」

素晴らしいスポーツドリンクを手に取り飲もうとするテイオー

トレーナー「そうだな」

これでひとまず終わりかな…色々あつて疲れたな

そんな事考えていたらスーパークリークが近づいて来た

クリーク「こんにちは、キタちゃん、今から一緒に練習しましょうね」

キタ「あ?ママ!」

は?今なんて言った?!

テイオー「ツブウウウウウウ」

トレーナー「ちよ…汚…俺の顔に吹くな!」

飲んでたスポドリを私に吹きかけるテイオー

そのままキタちゃんはクリークに近づき抱き着く

クリーク「ふふふ…では、トレーナーさん練習に行つてきますね」

トレーナー「あ…ああ…」

クリーク「じゃあキタちゃんいきますよ」

キタ「うん!!」

「素晴らしいキタちゃんを手をつないで練習へ向かうクリーク

テイオー「トレーナー…どうすんのあれ…」

「素晴らしい…疲れた顔で彼女らを見るテイオー

トレーナー「…まあ…なんとかなるっしょ…」

## テイオーとトレーナーと出会い

トレーナー「え？俺とテイオーの出会いが知りたいって？」

キタ「はい！それとトレーナーになったエピソードも教えてほしいです」キラキラ

トレーナー「まあ隠したいこともないし……いいか」

「テイオーと出会ったのは夏前なんだよね」

キタ「え？春じゃないんですか？」

トレーナー「それまで、トレーナーが決まらなかつたらしい」

「んで俺がサブトレやってたのは知ってたっけ？」

キタ「はい、確か会長さんの元トレーナーさんの所でしたよね？」

トレーナー「こそ、それでサブトレ4年目の頃、先生に専属が十分につけるなってお

墨付きをもらった時にさ……」

.....

3年前 梅雨明け

トレーナー「専属トレーナーか……ただ、もうじき7月か……来年からかなー俺もついに

トレーナーか……」

今年の入学生は、確かメジロ家のご令嬢がーとか話は出てたなあ

そのご令嬢は俺の親友がトレーナー契約してたっけ……あいつのが一步先にトレーナーか羨ましい限りだ

トレーナー「まあ俺は俺のペースで頑張りますか」

そう自分に言い聞かせ、先生の部屋でトレーニング表を作っていた

ドアへガチャ

？「やはりここにいたか、トレーナー君」

トレーナー「うん？あールナか、お疲れ様ー」

ル「ありがとう、トレーナー君もトレーニング表作成お疲れ様」

トレーナー「さて……ルナはもうトレーニングかい？」

ル「そうだった、トレーナー君お願いがあるんだ、ちよつと付いてきてもらっていいかな？」

トレーナー「お願い？珍しいな……デートのお誘いかな？」

ル「そのお願いもしいところだが、今回は別件でね、トレーナー君に会わせたい後輩がいるんだ」

トレーナー「ふむ……後輩ね……急ぎの仕事もないし、いいよ」

、そういいルナに連れられ、その後輩の元へ向かう  
なんでもルナにすぐ憧れてた娘らしい、もしかして、菊花賞のインタビューに乱入  
してきた娘かな？

なんて質問したらまさしくその通りだったらしい、ほーんあの娘か：

まあその娘が今年学園へ入学した

模擬レースは常に1着、彼女をスカウトするトレーナーはたくさんいたらしいのだが、彼女とそりが合うトレーナーが見つからなかったらしく、そのままトレーナーがないままここまで来たらしい

このままでは、公式レースにも出れずどうしたものかとルナに泣きついたらしい

それをお願いつてのが、よかつたら彼女をスカウトしてもらえないかというものだった  
た

こつちとしても出来れば親友が活躍してる年に私も一緒に切磋琢磨していききたい気  
持ちもあつたし、それに、ルナ曰く、その娘のセンスはすごくよく、こんなことで1年  
不意にするのは、勿体ないとのこと

そうこうルナと話しながら歩いていると

？「あ？カイチョー！」

向こうからルナに気付き、走ってくる1人のウマ娘がルナの前に止まりニコニコして

いる

ル「やあ、テイオー」

テイオー「彼女がルナの言っていたトウカイテイオーか…

ふむ…どこことなく昔のルナに似ている

テイオー「ねえねえカイチョー聞いて聞いて、今日同学年のマックイーンがさあ…あれ？」

テイオーはルナの隣にいる私に気付いた

テイオー「カイチョー？隣にいる、おじさん誰？」

…は？おじさん？私、まだ20代なのに…おじさん…うそでしょ…

おじさんと言われ軽くシヨックを受ける私を見て少しフフと笑うルナ

ル「テイオー彼は、私のサブトレーナーだ、君のトレーナーになってもらおうとお願いして、きてもらったんだ」

テイオー「ふーん…」

私を見るテイオーひとまず挨拶しておくか

トレーナー「はじめまして、トウカイテイオー、是非とも君のトレーナーになりたく、勧誘しに来ただが」

そうテイオーに言うのとテイオーは少し考えた後

テイオー「もしボクのトレーナーになったらボクの夢に付き合ってくれる？」

トレーナー「夢？ ルドルフみたいに、無敗のクラシック三冠とかかな？」

テイオー「あれ？ どうしてわかったの!？」

トレーナー「菊花賞の時、そう宣言してたから…あの時俺もいたんだ」

テイオー「え？ そうなんだー！」

あの時の事を知る人に会えたうれしきなかすごく笑顔になるテイオー

好印象な感じでこのままスカウトはうまくいきそうだと安心するルナ

だが

テイオー「うーんでも、やっぱりトレーナーの件はお断りするね」

ル「おや…どうしてだいテイオー」

テイオー「いやだって、カイチョーの紹介といっても、おじさんはまだサブトレーナー

なんでしょ？」

「カイチョーのトレーナーみたいにすごいトレーナーってわけじゃないし、そんな実績もない人に見てもらうくらいなら今まで勧誘してきたトレーナーの方がまだだよ」

このガキ…でもまあ…至極正論だよな…

何も言い返せないでいるとテイオーは調子に乗ったのか追い打ちを掛けた

テイオー「それに、見た目頼りなさそうだし…なんかトレーナーとして駄目駄目そう

だよねー」ニシシ

このメスガキ…さすがに説教するわ!

そう思い、行動に移そうと思ったが…

ル「は？」

私より先にブチ切れたやつがいたみたいだった

ティオー「カイチョーどうしたの？」

ル「いや、なんでもない…ティオーが言うならこの話はなかったことにしよう」

ティオー「うん、カイチョーせっかく紹介してくれたけどごめんね」

ル「いやいいんだ…ところでティオー今から暇かな?せっかくだし私と模擬レースで

もしいかない？」

ティオー「え!?カイチョーとレース!?やるやる!」

ル「では、ティオー行こうか…」

あールナ…ほどほどに…

こうして始まる模擬レース結果は…まあ酷かった

圧倒的にルナが勝ち、ティオーは追いつこうにも全くついてこれてなかった…

おい先輩…大人げないぞ…ティオーが泣きそうになってるやん…

そうして、レースが終わった



ル「どうだいトレーナー君！皇帝の力は！」ドヤア

トレーナー「あ…うん…」

テイオーが近づくと

テイオー「あはは…やっぱりカイチヨーには敵わないや…」

そう言った後、後ろを振り向きそのまま走っていった

若干泣いてたな…可哀そうに…

流石のルナもそれに気づき、我に返った

ル「しまったやりすぎた！トレーナー君！どうすればいいんだ！」

トレーナー「いや知らんし…とりあえず、ルナが慰めに行くのは返ってダメだし…俺

が行ってくるよ…」

ル「本当にすまない…ついカツとなっちゃった…」シヨンボリ

それからテイオーを探してみるも、学園にはいなかった…

夜遅くなってきたし、流石に寮の門限だし帰ったかな俺もコンビニで弁当でも買って

トレーナー寮へ帰るかな

そうして私も学園から出て帰路へ着いた

コンビニで適当に弁当や食料を買い寮へ向かっていた

向かう途中公園があつたのだが、そこでトウカイテイオーがベンチに座っていた

寮の門限ギリギリだし今日の事もある流石にほつてはおけないな

そう思い彼女の方へ向かう、近づくうちにあることに気付きすぐに彼女の元へ向かった

テイオー「グス…ウウ…あ…おじさん…」

私に気付いたテイオー

トレーナー「おじさんじゃない…テイオーお前…怪我したのか…」

テイオー「…ウン…」

テイオーは怪我した膝を抱え込んでいた

トレーナー「ちよつと怪我みるぞ」

テイオー「…ウン」

怪我を見て見る限り捻挫してるだけだった…折れてたりしてなくてよかった…

ひとまずいつも携帯してるキットで応急処置を施した

トレーナー「これでよし…歩けるか？」

テイオー「アリガトウ…少し休んだら、歩けると思うよ」

トレーナー「そっか…これやるよ」

そう言つて先ほどコンビニで買ったスポーツ飲料を渡し、テイオーの隣に座る、少しするとテイオーがぼつりぼつり語つた

テイオー「ボクね…今までレースで負けたことなかったんだ…」

「でも…今日初めて負けちゃった…しかもぼろ負け…」

「しかも相手が憧れのカイチョー…なんか色々な物があふれて…気づいたら…」

トレーナー「練習していたと…」

そう聞くと…テイオーは頷き、うつむく

テイオー「今必死に練習したって、すぐに追いつけるわけじゃないのにね…怪我しちゃったし…ボク…馬鹿だよね…」

「そういい、もつと落ち込む

それを見てて、昔のルナもこんなことあったなあと思いだし…

懐かしいのと、本当に似てるな…ってなり思わず少し笑ってしまった…

まずいと思い、取り直そうとするが、テイオーには気づかれジト目で睨まれた

テイオー「むー今、笑ったでしょ!? 真剣に悩んでるのにひどいよー」

トレーナー「いや…ごめんごめん…つい…今のテイオーがさ、昔のルドルフに似てて  
さ…」

そう答えたら、テイオーは少し驚いた顔をしていた

テイオー「え? ボクとカイチョーが似てるの?」

トレーナー「ああ…テイオーと同じ歳の頃、あいつも君みたいな感じだったさ」

「すごく負けず嫌いでき、模擬レースや練習で負けた後は、ル「練習付き合って！」って駄々こねてき、よく夜遅くまで付き合わされたさ」

テイオー「そうなんだ…カイチョーと付き合い長いんだね」

トレーナー「なんだかんだあいつが小学生高学年の時から付き合いだなあ」

テイオー「そうなんだ…」

テイオーは少し考えた後、こちらの方に顔を向けた、何か覚悟を決めたようだ

テイオー「もう一度聞きたいんだけどトレーナーはさ…ボクの夢に付き合ってくれかな…?」

テイオーは何か期待しているようだ…

だが、私はOKとは言わなかった

トレーナー「テイオー、俺は、君をルドルフみたいにすることはできない」

テイオー「うん…そうだよね…ボクじゃ…」

テイオーは再び、耳を下げ…悲しそうな顔になっていく

トレーナー「でも、君をそれ以上の存在にすることはできる」

「ミスターシービーだろうがお前の憧れシンボリルドルフだろうがそれを超えさせてみせる！」

テイオー「ボ…ボクが…カイチョーを…」

今まで、憧れになりたいと思っていたテイオーにとって超えるという発想はあまり思いつかなかったんだろうな…

トレーナー「テイオーはどうしたい？」

テイオー「ボ…ボクは…」

先ほどとは違いテイオーの瞳には灯がともっていた

……………

次の日 放課後 生徒会室

ル「はあ…テイオーに謝らないとな…」

ドアへコンコン

ル「開いているよ、どうぞー」

ドアへガチャ

テイオー「カイチョーこんにちは」

ル「やあテイオー…昨日は本当にすまなかった」

そーういー頭を下げる

テイオー「昨日？大丈夫もう平気だよー」

ル「そうか…ならいいんだが…」

少し安心し、テイオーに次のトレーナーを紹介しようとしたところ

テイオー「それより大人げなくボクをコテンパンにして少引いたってボクのトレーナーが言ってたよ！」ニシシ

ル「うん？ボクのトレーナー？テイオー、契約したのか!？」

テイオー「うん！カイチョー昨日は断つたりしたけど彼となら…」

ル「うん？」

テイオー「彼とならボクは、カイチョーを超えられる！超えてみせれる！」

そうルドルフに宣言するテイオー

ルドルフは少し目を見開き、そして

ル「ふふふ…テイオー、君が私に挑んでくるその時を楽しみにしているよ」

テイオー「うん！だからカイチョーも首を洗って待っていてね」ニシシ

ル「ああ…私も負けるつもりはないし、その時は、全力で相手しよう」

……………

現在

トレーナー「こうして、テイオーのトレーナーとなりましたとさ」

キタ「へえーなんかスポーツ漫画の王道的な展開ですね」

トレーナー「確かにそうだなあ」

「ところでさ…キタちゃん」

キタ「はい、トレーナーさんどうしました？」

トレーナー「い…いや…なんでもない…」

キタ「そうですか…」

いやツツコミを入れたい…なんであいつ…

哺乳瓶片手にベビーベット（大人サイズ）で寝転がってるんだ…

てかトレーナー室にそんなもん置くなよ…

トレーナー「…キタちゃん遅くなったしお開きにするか」

キタ「はい！」

おまけ

……………

マックイーン（ト）室

マックイーン（ト）「えつと？サトノさん私とマックイーンさんの出会いが知りたいのですか？」

サトノ「はい！あと、あの当時メジロ家のご令嬢となれば専属契約の倍率も高かった

はず…どうして契約できたのか気になります」キラキラ

マックイーン(ト)「言っているものなのでしょうか…まあいいかな…あれは模擬レース後なんです…」

……………

3年前 春

マックイーン(ト)「模擬レースみんなすごかったなー流石メジロ家のご令嬢だったな…いいフォームだった…」メモメモ

「あと、中距離で出てたトウカイテイオーって娘も素質が素晴らしかったなあ」メモメモ  
模擬レースを終え、私含めトレーナーたちは気になる娘をスカウトしに動いていた  
私もひとまずトウカイテイオーさんにスカウトを試みただけ、結果は、新人トレーナーってこともあり、お断りされた

次にメジロ家のご令嬢ことメジロマックイーンさんにスカウトへ行く、流石メジロ家…ものすごくたくさんのスカウトが来ている…

これはすごく厳しそうだな…

でも、まあ当たって砕けろですね

当たってみた結果、砕けましたね…



断られました…まあ新人だから仕方がないですよね…

こうして、マックイーンさんのファーストコンタクトは失敗に終わったが…その1週間後

マックイーン(ト)「♪」

彼は、趣味であるお菓子作りをしていた

意外な趣味だなど親友でありサブトレーナーの彼に言われたこともある

ただ彼もいつか担当になる子にバランスの取れた料理を食べさせたいと言い料理が趣味だったりする

私も似たような動機なのだが…ただ担当じゃなく小さい子の笑顔のためにつて言ったら彼にドン引きされた…解せぬ…

彼とは料理という分野では趣味が一緒なので、お互いに試食などしたりして、評価し合う仲でもある

今回も彼に試食してもらうために、最近流行ってるマリトッツォつてのに挑戦してみ

た  
マックイーン(ト)「さてとできましたし、彼の部屋まで行きますか」

彼の元へ向かうため部屋を出ると…そこには思わぬ客人が…

?「スイーツの匂いが…ジュルリ…っあ…」

マックイーン（ト）「えっと…メジロマックイーンさん…どうしましたか？」

そこにいたのは、メジロマックイーンさんがドアの前で立っていた

確か…彼女はまだトレーナーが決まってなく…トレーナーしかいないこの館に来て  
どうしたのでしょうか…

マックイーン「あ…あの…こちらから甘い香りがしまして…気になりましたわ」

マックイーン（ト）「甘い香り…これですか？」

素晴らしい手に持っていた箱を見せる

マックイーン「そちらは何でしょうか？」

マックイーン（ト）「マリトッツォっていう最近流行ってるスイーツだよ」

マックイーン「最近流行ってるスイーツ!？」

スイーツって言葉に反応し、尻尾がものすごく高く上がる

そしてすぐ欲しそうに見てくる…ナニコレカワイイ…てか私的にドストライク…

マックイーン（ト）「よろしければ、食べますか？」

マックイーン「いいんですの!？」

マックイーン（ト）「はい、とりあえず立ち食いもあれですので…入ってください」

マックイーン「はい、失礼しますわ」

その後、紅茶も入れ彼女にマリトッツォを渡す

マックイーン「これが…最近の流行ってるスイーツ…」

マックイーン「では、いただきますわね」

素晴らしいマックイーンはマリトッツォを口にしたら

その瞬間目を見開き、一気に食べてしまった

マックイーン（ト）「どうかな？」

マックイーン「お…美味しいですわ！これはどちらでお買いになられたの？是非ともおしえてくださいまし」

マックイーン（ト）「それ私の手作りなんだ」

マックイーン「本当ですか!？」

マックイーン（ト）「趣味がお菓子作りでして…」

マックイーン「手作り…ですって…」

その後、マックイーンがワナワナ震える…何かまずい事したかな…

マックイーン「…ださい…」

マックイーン（ト）「え？」

マックイーン「わたくしのトレーナーになってくださいまし!!」

マックイーン（ト）「ええ!？」

.....

現在

マックイーン（ト）「で、トレーナーになりました…」

サトノ「ええ…スイーツでトレーナー契約するって…」

マックイーン（ト）「私もびっくりしましたよ…あなたのスイーツが食べられるなら絶対トレーナーになってもらいます!!毎日スイーツパクパクですわ!!ってそのあとは、もう流れで契約しました…」

サトノ「ええ…なんていえばいいのか…」

マックイーン（ト）「…ですよねー」

サトノ「あ…もうこんな時間…トレーナーさんお先に失礼しますね」

マックイーン（ト）「ああ…ところで、サトノさん」

サトノ「はい?なんでしょうか?」

マックイーン（ト）「…いや…気を付けて帰ってくださいね」

サトノ「はい、お疲れさまでした」

マックイーン（ト）「ああ…」

サトノは、カバンを肩にかけ、手提げバックをもつて部屋を出た

さて…あの手提げバッグ…中身に赤ちゃんのカラカラやおしやぶりや哺乳瓶が

入ってあつたが…

マックイーン（ト）「いったいなんであんなのが入っていたのでしょうか」

## テイオーとトレーナーと出張

トレーナーは、残りのチーム勧誘を相変わらず悩んでいた

短距離とダート、短距離はまだ芝だし、なんとかなる

問題はダート…

砂が得意なウマ娘は中央でもなかなか居ない、タイキも芝みたいに得意じゃないが、チームの中では一番走れるので、申し訳ないがダートをお願いしてた

ただ今では、芝より走れるまで行ってるらしい

さて、ダートかあ…

スマートファルコンは、砂のサイレススズカと言われているだけあって、すごくしつとりしてる、勧誘は上手くいくが後は血の雨が降りかねないから却下

エルコンドルパサーもダートは得意な方らしいから勧誘しようとするが、なぜかグラスが現れて刺される… 解せぬ

トレーナー「…どうしたものかなあ…」ノビー

悩むトレーナー

校内スピーカへトレーナー、トレーナー、理事長室へ

トレーナー「ん？なんだろう・・・」

なんかしたかなあ、この前やよいのお菓子食べたことかな・・・ たづなさんの全ての制服をこつそり346プロの事務服に変えたことかな・・・

思い当たる節しかない・・・

トレーナー「今日はなかなか辛い日になりそうだ」ハア

まあ自分のせいだから仕方がない、行くか

トレーナーは理事長室へ向かった

向かう途中

キタちゃんとかイヤちゃんにあった

ダイヤちゃんがキタちゃんに哺乳瓶に入ったミルクを飲ませていた

見なかったことにした

・・・・・・・・・・・・・・・・

数分後 理事長室

トレーナー「出張ですか？」

たづな「はい♪1か月程地方のトレセンへお願いします♪」

トレーナー「視察ですか？それにしても1か月は長い気がします」

たづな「今回は、視察もですが、ここ中央から療養や私事などの事情で地方へ出戻りした彼女達を見てもらいサポートをお願いします♪」

「また、トレーナーさんが気に入った場合、地方のウマ娘をスカウトしても、構いません」

トレーナー「ふむ…」

確かに、今は地方もなかなか力をつけている

中央ではない、ダイヤの原石は絶対に居るはずだし… ありがたい話だ

トレーナー「出張有難く引き受けます」

たづな「ありがとうございます♪」

トレーナー「チームはマックイーンのトレーナーに一旦任せるかな」

たづな「私のほうからもお願いしておきますね♪」

トレーナー「ありがとうございます。地方のトレセンか、行ったことないから楽しみ

ですねー、ところで私は、何処に行くか決まっていますか？」

たづな「はい♪ある方が貴方を指名してましたのでそちらへ伺ってもらおう予定です

♪

指名？嫌な予感がする…

たづな「確か… 笠松で」

トレーナー「すみません！出張やっぱりなしで！」



そう言い部屋から出ようとしたが

たづな「ダメですよ♪」ガシ

肩を掴まれた

トレーナー「は…離して…」

たづな「先程言質は、取りましたから決定ですよ♪」ツス

たづなはボイスレコーダーを取り出す

トレーナー「たづなさん…私になにか恨みでも？」

たづな「いえいえありませんよ、強いて言うなら私の制服が何故か全部アイドルプロダクションの事務員が着そうな服に変わってた事ですかね」ニコニコ

トレーナー「」

たづな「では、トレーナーさん明後日から笠松へ出張頑張ってくださいね♪念の為付き添いを付けても大丈夫ですよ」ニコニコ

トレーナー「つらたん」

……………

放課後 トレーナー室

トレーナー「と言う訳で、地方へ1か月程いきますわ」

テイオー「えーいいなーぼくも行きたい」ピヨンピヨン

タイキ「ワーオ出張ですか？頑張ってくださいサーイ」

バクシンオー「1か月もトレーナーさんが離れるのは、心配ではありますが！学級委員長の私なら直ぐに駆けつけれるから大丈夫ですね」

クリーク「トレーナーさん、安心してくださいねキタちゃんは私がちゃんと面倒みま  
すからねーねーキタちゃん♪」

キタ「うん！」ギュー

スカーレット「え？1か月も…」ハイライトオフ

ル「ふむ、トレーナー君も出張と言う大任を任されるほどになるとは、私も嬉しい限りだ、ちなみに何処へ行くんだい？」

トレーナー「カサマツダツテー」ボウヨミ

カサマツと聞いた瞬間、目を見開くルナ、そして

ル「岐阜県か： いやー楽しみだ、トレーナー君、下呂温泉や飛騨高山には行こうじゃないか」

何故かついて行く気満々だった

トレーナー「いやいやいや、ついて行く気満々だがダメだよ？」

ル「な!?ついて行つてはダメなのか？」

トレーナー「当たり前だろ…」

ル「そんな…なら笠松に行くのは辞めるんだ!!」

トレーナー「仕事だし仕方がないじゃん…」

ル「嫌だアアア」

素晴らしい崩れ落ちるルナ

そのあまりの異変に只事じゃないと悟ったのか

テイオー「トレーナー、ボクなら連れて行っても大丈夫だよね?」

「カイチョーと違って☒ 担当☒↑強調 だし!」

その言葉が崩れ落ちたルナに刺さる

トレーナー「お願いしたかったんだがなあお前はリーダーだろ?だからダメ」

テイオー「そ… そんなー」ガーン

それを聞き立ち上がるルナ

ル「ふつつ、残念だったなテイオー!トレーナー君、なら中央トレセン生徒会長の私はきつと役に立つぞ!だから私と共に!」

トレーナー「いや、生徒会長が1か月学園不在はダメやろ」

ル「嫌だ嫌だ嫌だトレーナー君と笠松に行くのー!」

おいみんなの前やぞ、皇帝の威厳をまた捨ててんぞ…

トレーナー「とりあえずダメだからな、ちなみに、スキーに車出してもらおうから付き添いはスキーな！」

テイオー「は？」ハイライトオフ

ル「ほお・・・マルゼンスキー」ハイライトオフ

マルゼンスキー「チヨベリバ・・・」

こうして、トレーナーは笠松に出張へ行く事になった  
ただ

テイオー「トレーナー・・・ついて行くね」ハイライトオフ

ル「どうにかして、笠松へ行くんだ！」ハイライトオフ

スカレット「トレーナーさんに笠松でたまたまあつても大丈夫よね？」ハイライト  
オフ

そして

？「・・・すいたな・・・トレーナー・・・」

## テイオーとトレナーと笠松へ

出張前日

マルゼンスキー以外のメンバーのトレーニングも終わった

マルゼンスキーは出張へ向かうための準備があるためトレーニングは不参加

長時間運転してもらおうし、流石にトレーニングはさせられないしね

皆帰り、私は、出張の荷造りも終え駐車場で彼女を待つ

お？来たかな？エンジン音が聞こえてきた

あれ？タツちゃんじゃないのか

彼の目の前で車は止まる、いつものランボルギーニではなかった

てか…これまた、なかなか古い車で来たな…

マルゼンスキー「トレナー君おまたせー」

トレナー「スキー今日はよろしくな…それにしてもタツちゃんはどうした？」

マルゼンスキー「あーそれね、タツちゃんだと荷物とか入れるスペースがなさそうだから知り合いに借りたの」

「どうかしら？…この車もイケイケでしょ？…この前友達からおすすめされた流行りの漫画

にも出てたのよ!」

トレーナー「お…そうか…その漫画って…」

「まあいいかとりあえずトランクに荷物入れてくる」

トレーナーが車に荷物を入れ、助手席に乗り込もうとした時、マックイーンのトレーナーがお見送りに来た

マックイーン「お見送りなんかすまん、出張頑張ってくださいね」

トレーナー「お? すまんスキー少し彼と話してくる」

マルゼンスキー「はい、いつてらっしゃい」メクバセ

?「!」

トレーナー「お見送りなんかすまん…1か月俺のチームよろしく頼むよ」

マックイーン（ト）「気にしないでください」

「これから1か月責任もって、彼女たちの事は任せてください」

トレーナー「すまん、ちゃんとお土産買って帰るからな」

マックイーン（ト）「甘いお菓子でお願いしますね、マックイーンが喜ぶので」

トレーナー「おう! じゃあ行くわ」

マックイーン（ト）「はい! 笠松には、あの人がいますが…頑張ってくださいね」

トレーナー「…おう…」

トレーナーは少しテンション下がりつつも車に乗り、そのまま走らせた  
マックイーン(ト)「しかし…ランボルギーニかと思ったんですけど…なぜ…86なん  
でしょう?」

……………

スキーとトレーナーは岐阜県へ向かったその道中のとある峠

セリフのみでお送りします

マルゼンスキー「さあ! じっくりわよー」

トレーナー「相変わらず、ハンドルさばきやべえーてか、峠だからって攻めるなよ…」

トレーナー「そういえば、前にいる黄色い車は走り屋かな…」

金色気味の茶髪男性「旧式の86ごときがこのFDが千切れないだと…悪い夢でも見

ているのか…」

「俺は、○城レッツ○サ○ズのナンバー2だぞ?」

金色気味の茶髪男性「こいつ、先を知らないのか、この緩い右のあとときつい左だ」

「減速しないと谷底へ真つ逆さまだ」

金色気味の茶髪男性「言わんこつちやねえ、スピードが乗りすぎてるぜ」

「立て直してスピードを減速するスペースはもうねえ」

トレーナー「あれ？次きつい左だけど大丈夫これ？」

マルゼンスキー「モチのロンよ」アクセルハナシ

金色気味の茶髪男性「何!?!慣性ドリフト!?!」

.....

10時間後

マルゼンスキー「到着よー！」

トレーナー「有料道路使えば4時間程度なのに」

マルゼンスキー「せっかくのトレーナー君とのドライブだもん長くしたかったのよ」

トレーナー「そっか…それにしても10時間近くも本当にお疲れ様」

マルゼンスキー「じゃあ私はホテルのチェックインしてくるわね」

トレーナー「おう!?!じゃあ俺は荷物運んでくるよ」

そして車のトランクをあける

トレーナー「ええ…」

トレーナーはものすごく呆れた顔をし、トランクを見る

そこには、

テイオー「ウウ…メガマワル… キモチワルイヨオ…トレーナーア…」ピクピク



トレーナー「…」

何も言わずトランクを閉める

トランクへちよ！トレーナー！！閉めないで！！開けてよおおお！

トレーナー「まったく…」ハア

……………

ホテルロビー

トレーナー「で…なんているんだお前」

テイオー「どうしてもついて行きたかったから…」

トレーナー「はあ…今更中央に戻すのもアレだし…仕方がないか…」

テイオー「やったー」ピョンピョン

トレーナー「外泊届とか諸々たづなさんに電話してくるわ…」

テイオー「外泊届は出したし、学園には1か月合宿届でしたよー」

トレーナー「」

用意よすぎ…

マルゼンスキー「トレーナー君部屋の鍵取ってきたわよ…あらテイオーちゃんバレ

ちやったのね」フフツ

トレーナー「スキー…お前もグルかよ…まあ…いいや…じゃあ俺はこっちの部屋でお前らは隣の部屋な」

テイオー「えーボク、トレーナーと一緒にの部屋がいい！」

トレーナー「いやダメだろ…俺が社会的に終るから勘弁してくれ…」

テイオー「ブーブー」

トレーナー「ぶー垂れたって駄目だ！とりあえず、今日は夕方から挨拶だから、それまで2人とも休んでくれ」

こうして笠松へ着く3人は自室で眠りにつく

……………

その数時間後 中央トレセン理事長室

ドアへガチャ

ル「失礼します」

たづな「あら、シンボリドルフさんどうなさいましたか♪」

ル「たづなさん、本日から1か月ほど笠松へ合宿へ行きたいのだが…」

たづな「うーん…シンボリドルフさんは臨時サブトレの仕事と生徒会の仕事があり

ますので…さすがに…」

ル「チームはリーダーのテイオーやメジロマツクイーンのとレーナー君に任せれば大丈夫です」

「生徒会の仕事は、特に忙しい用事もないので、問題ないと思います」

たづな「そうですね…しかしですね…」ツス

たづなさんは苦笑いしながら2枚の書類を取り出した…

そこには、2枚の合宿届

名前にはトウカイテイオーとダイワスカーレットの名が書かれていた

ル「…は？」

ルナ「ウウ…」ジワ

………

新幹線

スカーレット「ふふん…待っててねトレーナー」

数時間後

スカーレット「ふえ？ここどこ？」

スカーレットはなぜか博多に来ていた

# テイオーとトレーナー、カサマツトレセン学園へ

博多

スカレット「ハフハフ…トレーナー…待っててね…」ズルズル

「でも…その前に…」ゴクゴクプツハー

数分後…

店へアリガトウゴザイマシター

スカレット「流石博多…とんこつラーメン美味しかったわ!」

「次はもつ鍋よ!博多に来たからにはグルメを制覇するんだから!」

「制覇したら今度こそ笠松へ行くんだから!待っててねトレーナー!」

スカレットは本来の目的を一旦忘れ、博多来てしまった事を楽しんでいた

……………

カサマツトレセン学園

トレーナー「ここが…カサマツトレセンか…」

やはり中央と違って、小さいな…とは言えレベルが上がってるだけあって施設はしっかりしてる感じだな

テイオー「トレーナー中央より小さいねー」

トレーナー「そりやあなあ」

マルゼンスキー「それでも、彼女達のレベルは高いわね」

素晴らしいながらスキーは練習場を見ている

トレーナー「…確かに…すごいなあ…」

素晴らしい練習風景を見る、あの芦毛の長髪の娘、なかなかいい物をもってるなあ…

トレーナー「…うん…あれは…」

まさかオグリキャップ!?!…予想はしてたがやっぱ笠松にいたのか…

それにしても、何だろう…以前のあいつとは覇気というかやる気が感じられない…

マルゼンスキー「あら?あの娘…オグリキャップかしら?」

テイオー「え?オグリキャップってあのオグリキャップ?!」

トレーナー「…怪我してからこっちにいたのか…」

私がサブトレ時代に、オグリキャップは数多くの勝利をし、有馬記念で勝利を収めた後、体調不良により療養という形で、行方をくらましていた

故郷の笠松にいらっしゃると思ってたがやはりいた…

練習場

オグリキャップは遠くでこちらを見ていた一同に気付き、そしてある人物が目に入る

オグリ「…あれは…トレーナー」

フジマサマーチ「ん？オグリどうした？」

オグリ「いや…なんでもない…ただ…」

フジマサマーチ「ただ？」

オグリ「久しぶりのご馳走を思い出しておなかがすいただけだ…」

……………

カサマツトレセン学園 理事長室

理事長「トレーナーさん遠路はるばる来ていただきありがとうございます」

トレーナー「いえいえこれも仕事ですし」

理事長「1か月と長いですが、よろしくお願いいたします」

「長話もアレなので、さっそく施設のご案内や業務内容については秘書の方から、おーい入ってくれー」

そう理事長が呼ぶと、扉が開く

？「失礼します♪」

トレーナー「この度は、よろしく…たづな…なんている…」

テイオー「ワケガワカラナイヨ

マルゼンスキー「アララ」ニガワライ

たづな「あら、何のことでしょうか？私は駿川たづなではないですよ？」

トレーナー「いやフルネームで言ってる時点でアウトだろ」

理事長「えーまあ…とりあえずよろしく頼むよ…」

トレーナー「…はあ」

大きなため息をつき理事長室を後にする

？「…トレーナーさん来てくれたんですね…」

たづなさんに施設案内や業務内容の確認が終わり、せっかくなのでテイオーやマルゼンスキーもカサマツのウマ娘たちと練習をさせた

流石テイオーとマルゼンスキー…知名度が高い事も、周りのウマ娘達から黄色い

歓声が起こり

サインや握手などを求められたりしてた

トレーナー「おい…トレーニングしろよ…」

スぺのトレーナーの物真似風に言いつつ

まあこんな日もいいかと思ひ彼女らを眺めていた

よく考えたら2人ともトップアスリートだもんなあ…

？「あ…トレーナー」

トレーナー「うん？」

呼ばれた方向を向く

トレーナー「あ…君は…ハッピーミーク」

同期の担当ウマ娘ハッピーミークがいた…ってことは…

？「お久しぶりですトレーナーさん」

後ろから声がする…やばい…ついにエンカウントしてしまったか…

出来れば会いたくなかった…だってこいつと関わりと碌なことにならないもん…

色々問題起こして、ここに左遷されたから安心してたのに…こっちが来る羽目になる

とは…

トレーナー「…花京院」

葵「桐生院です!!」

「名前間違えるなんてひどいじゃないですか！同じ志を持つ仲間なのに…」ムー

トレーナー「ハハハ…久しぶり…」



葵「もう…それよりトレーナーさん今夜予定空いてますよね？」

空いていること前提で来たよこれ…

トレーナー「いやあい「空いてますよね、では今夜お食事へ行きましょう！」…人の話を聞いて…」

葵「それでは、よろしくお願いしますね」ニッコリ

トレーナー「」

………

同時刻

たづな「!？」

ルドルフ「!？」

スズカ「!？」

テイオー「？」

彼女らに電流が走る！

………

中央トレセン

ブライアン「…」スヤア

ル「エアグルーヴ、少したづなさんの所へ行くよ」

エアグルーヴ「はい、何か用事でも？」

ル「いやなに、笠松へ行く件について、もう一度交渉しに行こうかと思つてね」

エアグルーヴ「そうですか…でも…」

ル「うん？どうしたんだい？」

エアグルーヴ「たづなさん今日から1か月ほど有給を取つてまして…なんでも笠松に旅行へ行くとのことですが…」

ル「…」

エアグルーヴ「…」

次の瞬間ルドルフは生徒会室を急いで出ようとダッシュするも、エアグルーヴが彼女の後ろからホールドする

ル「エアグルーヴ！離してくれ!!」

エアグルーヴ「ダメです！会長落ち着いてください!!」

ル「これが落ち着いていられるか!!こうなったら何が何でもトレーナーの所へ行くぞ!!」

エアグルーヴ「ダメです!!おい！ブライアン起きろ!!手伝え!!」

ブライアン「ツハ…なんだ？」

ル「やめろ!!私を行かせてくれええええええええ」

.....

次の日？

スカーレット「うーん！長かったけど…やつと笠松へ着いたわ！さてトレセンはどこかしら」

勝ち誇った顔をし辺りを見回すスカーレット

だが、だんだんと顔が青ざめる

スカーレット「あれ…って…ここ…時計台の案内標識?!…え…うそでしょ…  
スぺのお母ちゃん「ん？久しぶりに札幌に来てみたら…あの娘は…たしか…」

スカーレットはなぜか札幌まで来ていた…

## テイオーとトレーナーとカサマツトレセン前編

私やマックイーンのとレーナーの同期に桐生院葵という女性がいた

彼女は、私達と同じ高校大学一貫のとレーナー専門学校を常に成績トップ、

そして主席で卒業した

その後中央トレセンの試験も歴代最高得点を取り期待の新人として取り上げられていた

その功績もあり、私たちと違い、サブトレからではなくそのままとレーナーになることを認められた

だが彼女は、1年で担当と一緒に笠松へ左遷された

彼女には、残念な点が1つあった

それは、

貞操観念がものすごくおかしいのだ

生まれてきてから今まで、異性におろか同性の友人がいなかったのか

対人スキルが壊滅的に意☆味☆不☆明☆な状態だった

例えば、ソフトタッチは当たり前、抱き着いてくるのも当たり前、

性の賢さのせいで、

キスってどんな味がするんだろうって聞いてきて、

試しに唇を奪われそうになるのも当たり前、

おじいちゃんが孫が見たいから跡取り作りましようって言うって言うのも当たり前、

やり方わからないせに、逆うまびよいしようとするこもあつた

しかもそれを私ら男性トレーナー全員にやるんだ：しかも悪気がないし、どういふことなのかあまり分かつてないっての言うのがまた：

この時、マックイーンのとレーナーはまだ担当もいなく、被害は少なかったが

結構しつとりしてた頃のルナとかがいた私やスぺちゃん・グラス担当トレーナーなど

親しい娘や担当がいたトレーナーは地獄であつた

最終的に、大半の男性トレーナーの親しかつたウマ娘達がブチ切れて、暴動が起きてしまつた

珍しくいつもそういつたのに止めに入るたづなさんもブチ切れて：

先代理事長が必死に止めに入り事無き事を得たのだが

そのせいで、理事長は早期辞職、まだ子供なのにやよいが理事長になるといふ事態になつた

またその責任で、桐生院は左遷となつた

だが当本人は、栄転だと思ってるからもう…ダメだこいつ…

さて簡単な説明をしたわけだが、

私は、半ば強制で桐生院と飯へ行くことになった

たづなさんが助けに入り3人でご飯を食べに行くことになった

非常に生きた心地がしない、食事だった…

たづな「あら桐生院さん、まだトレーナーやってたんですね♪」ニコニコ

葵「たづなさんお久しぶりです！まだまだこれからも頑張つて、家の名に恥じぬ一流

のトレーナーになりますよ」ニコニコ

たづな「そうですか…ツチ」ニコニコ

たづなよ…桐生院に何言つても全部いい方にとらえられるから…無駄だぞ…

葵「それよりトレーナーさん！トウカイテイオーさんのトレーナーとして大活躍だつ

たらしいじゃないですか！」

トレーナー「あ…ああ…」

葵「今晚！私の部屋でテイオーさんの事や色々とお話ししませんか？」

トレーナー「流石n「いいですよね！」話聞いて…」

たづな「いい加減にしろよ○豚？」ニコニコ

おいたづなキャラ変わってんぞ…

はあ…胃が痛い…こうしてカサマツトレセンでの初日を終えた  
そして数日後

私は、なぜか…たくさんの料理を作っていた…

あいつのために

オグリ「…うまい」モグモグ

テイオー「スゴイ…」

先ほどテイオーと廊下を歩いていたら行き倒れのオグリキャップが居たので、  
助けた結果…こうして厨房を借りて彼女に料理を振舞っていた…

オグリ「久しぶりのトレーナーの手料理…もう食べれないかと思っていたが…また食  
べれるとは…」モグモグ

テイオー「久しぶり？…トレーナー…オグリキャップとも仲がいいんだねえ…」フー  
ン

テイオーの視線が刺さる…

オグリ「ああ…一時期トレーナーには、毎日お世話になったな」

テイオー「は？」ハイライトオフ

トレーナー「あ…」

……………

同日 札幌

スカーレットとスぺの母ちゃんは千歳空港前に来ていた

スカーレット「スぺ先輩のお母さん色々とお世話になりました」

スぺのお母ちゃん「別に良いってことよ、私もあの子の話も聞けたしね」

「本当に元気そうで安心したわ」

スカーレット「はい！私も今度スぺ先輩に会ったら元気だったって伝えておきますね」

スぺのお母ちゃん「ありがとうね」

スカーレット「では」

スぺのお母ちゃん「これから東京？」

スカーレット「はい！ひとまず中央に帰ってから笠松へ行こうと思います」

「飛行機なら降りる駅間違えたり寝過こしたなんてありませんから！」

スぺのお母ちゃん「そ…そうね…気を付けてね」

スカーレット「はい！ありがとうございます」

素晴らしいスカーレットは空港へと向かう

スカーレット「トレーナー！待っててね！」

スカーレットは数日間せつかく来た北海道で美味しいものを食べていたが、



本来の目的を思い出し東京に向かった

.....

同日 中央トレセン学園

生徒会副会長のエアグルーヴは本日の生徒会業務を行うため、生徒会室へ向かつていた

エアグルーヴ「会長……あれからずっと生徒会室で縛っているが……大丈夫だろうか」  
会長がたずなさんも笠松にしていると聞いて暴れてから

私とブライアンで抑えてはみるもうまくいかず、

この騒ぎに駆け付けたビワハヤヒデやナリタタイシンなども抑えるのに加わった

最終的に、アグネスタキオンが鎮静剤なのか睡眠薬なのかわからないが薬を投与し、  
無事落ち着いてくれた

だが、いつまた暴れだすかわからないので、ひとまず生徒会室にいらっている  
エアグルーヴ「……頭が痛い」

これで何度目の片頭痛だろうか……後で保健室へ行かねばな……

そうこうしてるうちに生徒会室へ着いた

エアグルーヴ「会長、入りますね」ガチャ

エアグルーヴが生徒会室へ入る、だがそこには誰もいなかった

エアグルーヴ「え？会長？確かこの椅子に縛り付けてたのに……うん？手紙」

エアグルーヴは机の上に置かれてた手紙を読む

エアグルーヴへ

笠松へ行きます

探さないでください

シンボリドルフ

エアグルーヴ「

P・S・ダジャレを考えたんだ見てくれ、【新幹線の機内飽きない】どうだ面白いと思

わないかい？

エアグルーヴのやる気はこれ以上下がらない

既に偏頭痛持ちだ

既に夜更かし気味だ

……

話は戻り 夕方、笠松トレーナー達が泊っているホテル

トレーナー「テイオーさん離れてくれないかい？」

テイオーはトレーナーに引っ付いて離れない

テイオー「いやあ！」ギュー

「オグリキャップには、毎日お世話してあげたのに！ボクのお世話はしないんだね！」

トレーナー「だーかーらー食べ物を作ってあげただけだって!!」

テイオー「ボク、トレーナーにご飯作ってもらったの指で数えられるだけしかないのに、ずるいよお」ギュー

トレーナー「あんときは、趣味で作った料理をオグリキャップがものすごい笑顔で食べてくれるのがついつい嬉しかったから…」

テイオー「じゃあボクにも毎日弁当作って！」上目遣い

トレーナー「最近忙しいから面倒！」

テイオー「ええ…いいじゃん！作って！作って！」頭でグリグリ

トレーナー「だいたいお前に作り出したらルドルフとかも欲しがったりして、最終的に俺の負担でかくなるからダメ！」

テイオー「ケチー、じゃあ離れない」ギュー

トレーナー「部屋に戻れないから離れなさい！」

テイオー「いいもん今日はトレーナーの部屋で寝るもん！」ギュー

トレーナー「年頃の女の子が一人で男性の部屋に行くのはダメだって…それに私は指

導員で君は生徒なの？そういうことはダメだつて…」

テイオー「離れないもん」ギュー

？「ほお…テイオーだけがダメなら私もトレーナーの部屋へ同行しよう…」

トレーナー「?!」ツバ

振り向くとそこには

ルナ「トレーナー、やつと会いに来たよ」ニッコリ

ルナが満面の笑みでそこにいた

ルナ「そして、テイオーよチームリーダーでありながら、私に全部丸投げしてきた笠松は楽しかったかい」ハイライトオフ

テイオー「」

トレーナー「」

……………

1日後？空港

スカレット「まさか…飛行機乗るのにパスポートがあるのね…」

「だけどちょうど持ってたからなんとかなったわ…ふん流石私ね」アハハ

素晴らしい笑うスカレットだが次第に俯き…身体がプルプル震えだした

スカーレット「…なんで」

そうつぶやいた後

スカーレット「なんでアメリカに着くのよおおおおおおおお」

そうただただ叫ぶしかなかった

だが彼女は、自分が決して方向音痴だとは認めようとはしなかった

スカーレット「そ…そうよ…これは久しぶりにライブである、あいつ（ウォッカ）に会いに来たのよ！そうよ！うん！！」

そう自分に言い聞かせポジティブになるスカーレット

その場に居合わせた1人のウマ娘が彼女を見ていた

スズカ「あの子は確か…最近あの人のチームに入った…」

こうしてスカーレットはなぜかアメリカへ行ってしまった

# テイオーとトレーナーとカサマツトレセン中編

朝 ホテル

ウマホへピピピピピピピピ

トレーナー「うーん…朝か…」

ウマホのアラームで目が覚めるトレーナー

次第に眠気が覚めながら、身体に違和感があるのを感じてきた

トレーナー「…」ジー

トレーナーは自分のおなかの方を見る

その先は布団なのだが、

おなかのふくらみと到底思えない大きなふくらみがある

トレーナー「」チラ

布団を少しめくり、お腹の方を見る

テイオー「…ウーン…トレーナー…モウタベラレナイヨ…ニシシ…」スヤスヤ

私のおなかにテイオーが抱き着いて寝ていた…

トレーナー「うそでしょ…」

ヤバくね？え？なんでテイオーがいんの？あれ？こんなこと世間にバレたら社会的に死ぬやん…ヤバイです☆

じゃなくて…ヤバイヤバイヤバイひとまず、テイオーを起こして…あれ？

トレーナーは左手を動かさそうと思っただらなぜか左手が動かなかった

誰かに掴まれてる…

トレーナーは恐る恐る左に顔を向けると

ル「：／／」ジー

ルナが顔を赤らめながら見つめている

どうやら先ほどまで私の左腕をギュツと抱いて横で一緒に寝ていたみたいだ…

トレーナー「：うそでしょ…」

ル「おはよう／／トレーナー君。／／」

トレーナー「お…おはようございます…」

その後、テイオーとルドルフはトレーナーにたくさん怒られた

ついでにたづなさんにめっちゃ怒られた

それから何日か

ルナが桐生院と久しぶりに対面したのだが、

目が殺意に満ち溢れた状態だった

桐生院は、そんなことも感じず、中央の生徒会長が来たことに喜び

めつちや普通に接してた：いやこいつ：いつか死ぬぞ：

また、桐生院は久しぶりの同期に会えた事が嬉しいのか

トレーナーがトレンセンに来ると、もう引っ付いて離れなくらい常に一緒にいた

何も知らないカサマツにいるウマ娘たちはカップル？なんて誤解していた

それを見ながら、目にハイライトがなくなるルドルフとテイオー、それを抑えるス

キー

たづなは笑顔だが、さつき「あのアマ：いつか：潰す：」ってつぶやいていた：怖い

：

私の業務は順調で、一通りの視察は終わり、今は自分のチームに入れる娘を探しながら

中央からカサマツに出戻ったウマ娘を見ていた：ってまあアイツしかいないんだけ

どな

オグリ「トレーナーすまないがお腹がすいた」

トレーナー「つきさつき食べたじゃん：」

そう言いつつも、フライパンで炒め物を作るトレーナー

トレーナー「そういえばさ」



オグリ「なんだ？」

トレーナー「ここにきて数日、お前がちやんと走ってるのを見たことないな」

そう言うと、オグリキャップは少し顔を強張らせた

オグリ「私は、もう走らない…」

トレーナー「え？どうしてだ？」

もう走らない…なんで？

オグリ「私は、もう走る理由がないんだ…」

トレーナー「走る理由…」

オグリ「もう…走ってもう楽しくないんだ…あのジャパンC敗北以降まったく楽しくなくなつたんだ、そして私は、あの年の有馬記念が終わつたらもう走らないと決めたんだ…」

トレーナー「…」

ジャパンCの敗北…秋の天皇賞に続き大敗したあれか…

？「走るのが楽しくない？」

トレーナー「ルドルフ…」

そこにはルナがいた、そしてオグリキャップに近づく

ル「オグリキャップ、久しいな」

オグリ「会長か…」

ル「現役だったあの頃、強くなるのに食欲で私にも食って掛かるあの威勢、今ではその面影もなく腑抜けてしまったようだね」

オグリ「…」

ル「君と走れる日が来ることを楽しみにしていたんだけどな…」

オグリ「…すまない」

トレーナー「まあ…走れないなら…仕方がないか…ただ俺としてはできれば走っては欲しいけどな」

「ほら、オグリキャップにんじんチャーハンできたぞ」ドン

ル「トレーナー君、またオグリキャップにごはん作ってあげてるのか」ハア

トレーナー「まあカサマツにいる間は、いいかなって」

そう言うと、オグリキャップがトレーナーの手を握る

オグリ「トレーナー、中央へ戻るのか？」

トレーナー「え？一か月の出張だし…そうだよ」

オグリ「ダメだ…ここにずっと居てくれ、トレーナーのごはんが毎日食べたいんだ」

ル「は？」

トレーナー「いや…流石に」

オグリ「すまないが、ずっと居てくれ…」ギユ  
手を握る力が強まる

ル「オグリキャップ、そこまで言うなら私と勝負をしないか？」

オグリ「勝負？」

ル「君の得意の距離で私にレースで勝ってみせろ」

オグリ「レース…」

トレーナー「お…おい…ルドルフ」

ル「トレーナー君、私に任せてくれ」

「それとも私に勝てる自信がないから諦めるかい？何ならダーツで競争してもいいんだぞ？」

トレーナー「…いや流石にダーツは…」

流石にダーツでは勝てないからやめておけて…

オグリ「私が勝てば、トレーナーはカサマツにずっと居てくれるのか？」

ル「ああ…約束しよう」

オグリ「いいだろう…なら明後日勝負を頼む」

ル「いいだろう」

トレーナー「ええ…」

.....

同日 アメリカ

スカーレット「スズカ先輩、色々とお世話になりました」

スズカ「いえ」

スカーレット「あれから色々練習や私の走りを見てくれて、本当にありがとうございました、本当にありがとうございました」

スズカ「あの人のチームの一員ですもの、あの人のためにも頑張ってくださいね」

スカーレット「はい！」

スズカ「それに、貴方とは、どこか？」

スカーレット「？」

スズカ「いえ、何でもないは、ただしあの人を渡すつもりは毛頭ないので」

そうスズカが言うときスカーレットは目を見開いた

スカーレット「え……なんのこですか？」

スズカ「トレーナーさんの事好きですよ？一目でわかったわ」

スカーレットは図星をつかれ、少し俯き、またスズカの方へ向き直る

スカーレット「はい、なので、スズカ先輩には絶対負けません！」

スズカ「ふふふ……そうね今回は、最初で最後の塩を送ってあげたけど、次からは仲間

でもあるけど敵同士ね」

スカーレット「はい！今回色々教えてくれたこと後悔させてあげますね」

スズカ「ふふふ…じゃあこれで、お別れね、あ…それともう一つ、これを」

そう言い、スズカは一枚の手紙を渡した

スカーレット「これはなんですか？」

スズカ「もし何かあったときはその手紙を読んで、では無事に日本へ帰れることを祈ってるわ」フリフリ

そう言い、スズカはスカーレットの元を後にした

スカーレット「さて…日本へ帰るわよ!!」

こうしてスカーレットは日本へ向かい搭乗ゲートへ向かう

……………

夜 ホテル

トレーナー「はあ…疲れた…」ガチャ

そう言いながらホテルの部屋を開けると

葵「あ!?!トレーナーさんおかえりなさい」ニコニコ

桐生院葵がその場にいた

トレーナー「なんでいるのお!？」

葵「それは、トレーナーの同期だからです」

トレーナー「ワケガワカラニヨオ」

葵「トレーナーさん友達同士お泊り会もいいかなって」

トレーナー「いやダメだろ…てか友達じゃ「私たち仲良しですもんねー」人の話最後まで聞けや卑しか女」

そう言いあつてると

ドアへガチャ

テイオー「トレーナー！まだ寝る時間じゃないし、あそ…は？」

ル「トレーナー君、寝る前には帰るからいいか…は？」

トレーナー「」

＼（^o^）／オワタ

その後、生きた心地がしない状態で、トランプで遊んだ、

なおお開きになった時、ルナとテイオーが無理やり桐生院を引きずって行った

……………

翌日？

最初は博多、次に札幌と来て、前回はアメリカ、そして今は、  
少なくとも東京にはついていない

スカーレット「ああもう！認めるわよ！私は方向音痴だつて認めるつてば！」

スカーレットは自分が方向音痴だということを認めた

だが、認めたからといってどうしようもない

スカーレット「あ…そうだ！スズカ先輩に貰った手紙が」

そうしてスズカに貰った手紙を読む

読み終えたスカーレットは

スカーレット「私が向かおうとしてもたどり着きそうにないし…迎えに来てもらうし  
かないよね…」

「ただ、方向音痴でつてのは、流石に恥ずかしいし、トレーナーにドン引きされちゃうよ  
ね…」

なら…

スカーレットはある建物を見ながらウマホを取り出し、手紙を見ながらある番号へか  
ける

ウマホへ Bonjour. (こんにちは)

## テイオーとトレーナーとカサマツトレセン後編

トレーナーはふらふらと歩いてた

今朝、なんというか…ひどい目にあい、やる気が今年初の絶不調になっていた  
歩いていると掲示板に一枚の紙が貼られていた

辞令

桐生院葵 殿

貴殿に来月付けをもってして、ベトナムトレセン支部へ勤務を命ずる  
以上

トレーナー「やつぱりなあ…」

……………

今朝、トレーナーが宿泊するホテル

葵「スー…スー」Zzz

トレーナー「うそでしょ…」アオザメ

トレーナーは隣で寝ている、なぜか全裸の葵を見る



一体どういうことだ…ちゃんとカギをかけて寝たはず…

なのになんで起きたら、こいつがいるんだ…

しかも…全裸だと…何？やっちゃったの？え？うまぴよいしたの？

童貞歴28年なくなったの?!

あと2年で魔法使いになれたのに…え？いや…そんなことはどうでもいい

落ち着け…考えるんだ…OK落ち着け…とりあえず深呼吸を

トレーナー「ヒツ・ヒツ…フー」

「つてラマーズ法!？」

ひとまずだ…ひとまず…誰かが来る可能性があるし、それまでにこの卑しか女を叩き

起こして、事情を聞かねb

ドアへコンコン

たづな「トレーナーさん、おはようございます。一緒に朝食でもどうですか？」

oh…たづな…

どうする…まだ寝たふりをして流すか…ただこの時間は起きてることは彼女は把握

しているはず…

どうするか考えていると

たづな「あれ？珍しくまだ寝てるのですかね？仕方がありませんね」

お…これは…そのまま諦めてくれるパターンか!?

ドアへガチャ

たづな「トレーナーさん、起こしにきました…あらトレーナーさん起きてたんですね

♪」

トレーナー「あ…ああ…たづなさんおはようございます。ちょうど今起きたところだよ…」

たづな「そうですか♪とところで、どうしてあの女が寝てるんでしょうか?」

トレーナー「…」

たづな「トレーナーさん?」

トレーナー「お…起きたら…なぜかいた…」

たづな「そうですか…」

「トレーナーさんちよつとその連れて行きますね♪」ニコニコ

トレーナー「あ…はい…どうぞ…」

後々聞いた話だが、どうやら未だにやり方がわからないのかうまびよいは未遂で終わったらしい

……………

現在 カサマツトレセン

桐生院は流石にたづなさんにガチで怒られたのか

少しシユンとしていたが、午後からはそんなことを忘れたのか  
相変わらず、こつちに引っ付いてくる…

鋼すぎるメンタルやばい…ちなみにベトナムへ行く件は、なぜか本人は喜んでいた…  
ポジティブすぎる…

さて私は、グラウンドに来ていた

今日は、ルナとオグリキャップがレースをする日、テイオー「いいなーボクも走りた  
いなー」と言っていたので、テイオーも参加することになった

私とスキーは彼女らを見る

トレーナー「さて…どうなることやら」

マルゼンスキー「うーん…芝1200mルドルフもテイオーも得意と言える距離じゃ  
ないわねー」

トレーナー「今のオグリキャップの走りを見てないが、もし全盛期の頃だったらテイ  
オーは勝てないだろうなあ…」

マルゼンスキー「ルドルフもこの距離だったら厳しかったわね、でも今のオグリ  
キャップだったらルドルフの圧勝ね」

トレーナー「うーん…やっぱそうなるかな…」

ストレッツチをするテイオーとルドルフ

そこにオグリキャップが近づいた

オグリ「会長…本日はよろしく頼む」

ル「こちらこそ、よろしく頼む、共に全力を尽くそう」

オグリ「それで、私が勝てば、トレーナーはカサマツにずっと居てくれるんだな？」

ル「ああ…約束しよう」

テイオー「カイチョーのトレーナーじゃないのに…ボクのトレーナーなのに…」

その言葉がルナに刺さる

ル「んぐ…まあ…そういうな…」

テイオー「まあいいやどうせ勝つのはボクだし」ニシシ

ル「ほお…その余裕全力で潰してあげるよ」

そんなやり取りも終わり、それぞれがスタート位置に着いた

トレーナー「それじゃ始めるぞー」

「位置についてーよーい」

テイオー「ボクが勝つ！」

ル「さて…」

オグリ「…」

「ドン！」

こうしてレースが始まった

そして結果、まあ分かつてはいたが…

ル「トレーナー君、観たかこれが皇帝の走りだ」ドヤア

テイオー「あと少しなのに…」グヌヌ

オグリ「ま…負けた…」

予想はしてたけど、こうきれいに決まるとは

1位はルナ、ハナ差でテイオーでオグリキャップは…4馬身差か…

オグリ「ま…待ってくれ…もう一度頼む！」

テイオー「いいね！カイチョーもう一回やる！今度はボクが勝つからさ！」ニシシ

ル「つぶ…何度やっても負けはしないさ」

素晴らしいまたスタート地点へ移動する

数分後

これで5回目か…

ル「つく…テイオーに負けた！」

テイオー「やったーボクのかちー」

オグリ「…」ハアハア

ル「だが4対1だからまだまだだな」

テイオー「グヌヌ…」

オグリ「…す…すまない…もう一度…」ゼエゼエ

それを聞いたルドルフが首を振り

ル「オグリキャップ、何度やろうが私達には勝てないよ」

そういうとオグリキャップは俯いた

ル「いくら君が怪物と呼ばれてた化け物だったしても得意な距離で走ったとしても、現役で走ってる私たちに勝てるほど甘い世界じゃない、それは君もわかってたはずだ」

オグリ「…」ギリ

ル「ふむ…いくら睨んでも状況は変わらないよ」

オグリ「…それでも…」

ル「もしかしてだが、負けたのが悔しいのかい？」

オグリ「!？」

ル「なら悔しいのであれば、また走れるし、きっと楽しくなるはずだよ」

そう言った後、ルドルフはトレーナーの元へ歩いて行った

オグリキャップは固まる

オグリ「私は…」

握りこぶしが震える

テイオーがオグリキャップの元へ近づき、何かを話してた

テイオー「オグリキャップ…ボクと一つ勝負しない？」

そして

出張最終日

トレイナー「ここの生活もこれで最後かあ…」

ル「長いようで一瞬だった」

トレイナー「さて、グラウンドにいきますか」

グラウンドへ行くと、人混みができていた…何だろうと思い、近くにいた人に聞く

トレイナー「この集まり、どうしたんですか？」

モブ「なんかオグリキャップ先輩とトウカイテイオーさんがレースするみたいです」

トレイナー「え？ちよつとすみません」

そういい、人混みの中に入り抜け出したさきには、スタート地点で始まるのを待つテ

イオーとオグリキャップがいた

テイオー、一体どうしたんだ…

そう思っていると、スタートしたのか、2人は走り出す

結果は、ハナ差でテイオーが勝った

テイオー「数日でここまで強くなるなんて…流石オグリキャップだね」ハアハア  
オグリ「…」ハアハア

テイオー「オグリキャップ…」

オグリ「ああ…会長やテイオーの言う通り、負けて…悔しかった…勝ちたい…」

テイオー「そっか…じゃあまだ走れるね、勝てたら楽しくなれるね」ニシシ

オグリ「ああ…そうだな…」

テイオー「じゃあボクが勝ったから、約束は果たしてもらおうね」ニツコリ

約束？何の約束をしたんだろう…

テイオーは私の元へ近づいた

テイオー「トレーナー」

トレーナー「どうした？」

テイオー「紹介するね、新しいチームメンバーのオグリキャップだよ」

トレーナー「え？」

ル「え？」

オグリ「よろしく頼む、トレーナー」

トレーナー「え？え？ええー！」



ル「アゼン

こうして、新たにオグリキャップがチームに加わった

数時間後

オグリキャップは早速中央へ行くということで、テイオー、ルドルフとたづならと新幹線で中央へ帰った

そして私は、今

どこかの峠（セリフのみのダイジェスト）

トレーナー「GTRってあんなに直線遅かったっけ？」

マルゼンスキー「ちゃんと踏んでないわね…私を待つてるのかしら…」

N里「ストレートにちぎってももったいねえだろ…俺がバトルがしたいんだよ」

T兄「こうして近くで見ているとまるで芸術だな、あのドリフトは」

「ほとんどカウンターを当てない全開の四輪ドリフト」

「あれがどんなに凄いことか分かるか」

「奴はハチロクという車を限界領域で、まるで自分の手足のようにコントロールできるんだ」

「オレでもあそこまではFCをコントロールできていない、感動的だ」

N里「全身から血が沸騰したようなハイテンション！これこそバトルだ！」

数分後

マルゼンスキー「うーん…ブロックされてなかなかコーナーで抜けれないわね…」  
トレーナー「諦めて普通に走る？」

マルゼンスキー「うーん…次のコーナーでダメだったらそうしましょ」

N里「屈辱だぜ、大勢ギャラリィが出てる前で、良いように外からつつつかれちゃなあ」

「無理にインに着こうとするから不自然なラインになって突っ込みが甘くなるんだ…」

コーナー

N里「よーしインには来ねえな」

マルゼンスキー「!？」カットイン

N里「86が消えた!？」

「外に行くと思せかけておいて、ブレーキングしながらラインを変えやがった!？」

「86つてのはあんなことができてる車なのか？」

トレーナー「まだ乗って2回目の運転なのにすげえ…」

マルゼンスキー「ちゃんと練習してたはよ？」

トレーナー「いつのまに…」

「あ？GTR後部がガードレールにぶつかった…」

マルゼンスキー「まあほかにお仲間がいるみたいだし大丈夫っしょ」

.....

数時間後 昼 中央トレセン トレーナー室

トレーナー「というわけで、無事に帰ってきました」

マックイーン(ト)「おかえりなさい、先に帰ってきた彼女らに事情は聞きましたよ、オグリキャップさんをチームにいられたんですね」

トレーナー「まあ…成り行きでな、ところでさ…なんでルドルフがダートに埋められてるんだ？」

マックイーン(ト)「ああ…あれは…外泊許可も合宿許可も出さず、生徒会の仕事も丸投げして逃げ出したので、その罰だそうです」

ダートに埋まったル「…」シヨンボリ

トレーナー「マジかよ…てつきり許可取ったものかと思っただ…」

マックイーン(ト)「と…とりあえず、本日からお預かりしてたメンバーをそちらに戻すということだ」

トレーナー「ああ…預かってくれてありがとうな」

マックイーン(ト)「いいえ、バクシンオーさんには色々賢さ練習でお世話になり

ましたし、うちのダイヤさんがキタさんやクリークさんと練習出来て喜んでましたし、ナリタブライアンさんに負けないとマヤノさんが頑張っていましたし、タイキシヤトルさんの走り方でライスさんやマックイーンさんがよりフォームに磨きがかかりましたのでこちらこそお礼が言いたいですよ」

トレーナー「そう言ってもらえると嬉しいよ…ん？」

マックイーン（ト）「どうしました？」

トレーナー「いや…その話にスカーレットが出てこなかったからちよつと気になってさ…スカーレットはどうだった？」

マックイーン（ト）「スカーレット？ダイワスカーレットさんですか？こちらでは預かってませんよ？そちらに行つたと聞いたのですが…」

トレーナー「え？全く知らないし、来てないぞ…」

マックイーン（ト）「え」アオザメ

トレーナー「…」アオザメ

2人がスカーレットが失踪したことに気付き青ざめていると

ドアへバン！

たづな「トレーナーさん！大変です!!」

トレーナー「たづなさん？どうしました…ちようどよかったこつちも大変で…」

たづな「そんなことより、これを見てください」ツピ  
そう言うのとたづなはトレーナー室にあるテレビをつけた

.....

### テレビ映像

記者「さて、先日の凱旋門賞について、ブロワイエさんにインタビューしたいと思  
います」

「ブロワイエさん、先日の凱旋門賞お疲れさまでした」

ブロワイエ「ええありがとうございます（フランス語）」

記者「しかし、連覇達成できず、本当に惜しかったですね」

ブロワイエ「負けてしまったのはとても残念ですが、この経験を活かし、次は絶対勝  
ちたいと思います（フランス語）」

記者「それにしても、ジャパンCに続き、今回も日本のウマ娘に負けてしまいました  
が、それについてどう思われますか？」

ブロワイエ「日本のウマ娘は、もう世界でトップレベルに達していると認めざるえない  
です、最大のライバルとして今後もつと全力に挑みたいですよ（フランス語）」

記者「ありがとうございます」

「続いては、凱旋門賞で見事勝利し、日本の刺客として送られてきたと噂されている、ダイワスカーレットさんに、インタビュウしていきます」

.....

トレーナー「は？」

マックイーン（ト）「え？」

今なんて言った？ダイワスカーレットって言った？

え？なんで凱旋門賞？てかなんでフランスにおるねん……

てかプロワイエに勝つって何？え？なにこれ？

.....

記者「ダイワスカーレットさん本日は、凱旋門賞勝利おめでとうございます」

スカーレット「ありがとうございます」

記者「今回凱旋門賞を出るきっかけなどありましたらお願いします」

スカーレット「はい、今回たまたまフランスへ行く機会がありました、そのさいプロ

ワイエさんにご連絡をして少しの間お世話になったのがきっかけで出場いたしました」

記者「つまりプロワイエさんの推薦ということでしょうか」

ブロワイエ「彼女の走りを見て勝負したいと思い、その舞台として凱旋門賞を選びました（フランス語）」

記者「そうですか…いや…まさかそのような経緯があったとは」

「それではスカーレットさん今後の予定とかをお聞きしてもよろしいでしょうか？これからフランスで走るのでしょうか？日本へ戻られるのでしょうか？」

スカーレット「そうですね…ひとまず私のトレーナーさんが迎えに来てくれると思うので、そのまま日本へ戻ろうと思います」

記者「そうですか、日本での活躍楽しみにしております。以上フランスからの中継でした」

.....

トレーナー「たづなさん…」

たづな「はい…2日ほど出張延長しました…」

トレーナー「ありがとうございます…ちよつと行ってきます…マックイーン（ト）すまんがもう2日ほど頼むわ…」

マックイーン（ト）「は…はい…」

トレーナー「行ってきます…」ツダ

ドアへガチャ

テイオー「あれ？トレーナー？どうしたの？」

トレーナー「すまん、テイオー少しフランスに用事ができたから2日ほどあける…」

テイオー「え？どういう…ってトレーナー！まってよお」

トレーナーはフランスへ向かった



## トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー前編）

スカレットをフランスから連れ日本へ戻り次の日

フランスで観光？行ってすぐにとんぼ返りしたけどお!?

ブロワイエに初めてあったけど…なんていうか強者って感じだったなあ

スベちゃんに次は負けないと伝えておいてくれって頼まれたっけな…

そのブロワイエに勝ったのかスカレット…

帰りにスカレットにどうしてこうなったのか経緯を聞いたけど理解できなかった  
なぜ笠松へ行くのにフランスへ行くんだ!?

てか途中で博多、札幌、アメリカってどういうこと？

あとアメリカでスズカに会ったとか…

ちなみに彼女がスズカにもらった手紙は私宛でもあったらしく読むと

近々日本へ戻るとのことと、チーム開けておいてくださいねって書いてあった…

うん…断ろう!!そう心に誓ったトレーナーであった…

そして、スカレット…

方向音痴だっていうのがよくわかった…

スカーレット「あ…トレーナーこっちみたいよ！」

トレーナー「いやそっち中国行き…」

スカーレット「トレーナーここであつてるの？あつちの便もう行きそうよ？あつちの  
がいいと思うんだけど！」

トレーナー「そっち…オーストラリア行きだつて…」

成田空港

スカーレット「ねえ！トレーナーこっち行きましょ！」

トレーナー「いや、そっち飛行機搭乗口…お前また海外行くのかよ…」

つかれた…

てかそもそもチケット確認したりして、本来目的地と違つた飛行機に乗れないはずなの…こいつチケットも適当に買いやがつたな…

迷子にもなりそうだったから手をしっかり握つて、しっかりとトレセンまで連れて  
帰つた

手を握つてる時はものすごくしおらしくなつて大人しくなるので助かつた…

そして今、出張お疲れ様会ということで、居酒屋に来ていた

マックイーンのトレーナー主催で、スぺちやんのトレーナーやタキオンのトレーナー  
など男性トレーナーほぼ全員が来てくれた

.....

一步そのころ学生寮

テイオー「うーん」ポチポチ

ル「テイオーまだかな？」

テイオー「うーんボクも機械弱いからよくわかんないよーカイチョーがやってよ」

ル「つぶ…私はミホノブルボンの次に機械がダメだから無理だな」ドヤア

テイオー「どや顔で言ってもカッコよくないよ…」ジトー

オグリ「ちなみに私はミホノブルボンより機械がダメな自信があるぞ」

テイオー「ダメじゃん…」

マルゼンスキー「ごめんね、テイオー、私ができたらよかったんだけど…知らない線

ばかりで…」

マルゼンスキーも試してみたのだがUSBやHDMIとか未知の配線に思考がフリーズして断念したようだ

黄色い配線どこ？赤は？なんて言ってた…コンポジット端子かな？

ル「テイオーもうじき始まるし、ここは無理やりつなげてみるしかない、私がやろう」

スカーレット「いや、やめた方がいいと思います…」

テイオー「もし壊れたりしたら…元もこうもないしダメだよ…うーん」

バクシンオー「あれ、皆さんどうなされたのですか？」

テイオー「あ？バクシンオー、この機械をテレビにつけたいんだけどね…」

バクシンオー「ふむふむ、私に任せてください」ツス

「はい、できましたよ！」

テレビから居酒屋の映像が流れる

テイオー「はや…あ…ついた」

バクシンオー「優等生ですから！」バクシーン

「ところで、こちらの映像はなんででしょうか？」

テイオー「あーこれ？マックイーン（ト）に仕込んでる隠しカメラ」

バクシンオー「ちよわ!」

「いったい、全体どういうことですか？」

テイオー「えつとね、今日マックイーンのとレーナーがトレーナーの出張お疲れ様会をやるらしいんだよね」

バクシンオー「ふむふむ、飲み会があるとは言ってましたがお疲れ様会なのですね」

テイオー「で、お酒が入ったりすると本音って聞けたりするじゃん？」

バクシンオー「ええ……まあそうですね」  
テイオー「だからね……」

……  
……

……

前日の練習後 生徒会室

マックイーン（ト）「あのお……私はどうして呼ばれたのでしょうか？」

ル「来てもらってすまないね、ところでマックイーンのトレーナー君、君は明日の飲み会の幹事らしいじゃないか」

マックイーン（ト）「ええ……まあ……そうですね」

ル「そこで、君にお願いがあるんだ」コト

「素晴らしいものテーブルの上に置く」

マックイーン（ト）「これは？」

ル「隠しカメラだ」

マックイーン（ト）「え？」

ル「これをネクタイに仕込んで懇親会へ行ってもらいたい」

マックイーン（ト）「えっと……理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

ル「お酒の席なんだろう？」

マックイーン（ト）「ええ…まあ私含め皆さんお酒は好きですし…」

ル「聞くところによると、お酒の席では、本音で語り合う場だと聞く」

マックイーン（ト）「まあ…そうですね…」

ル「ならこれを付けて、是非ともトレーナー君が私達ウマ娘達をどう思ってるか聞いてほしいんだ」

マックイーン（ト）「ええ…そんなことお酒がなくても、彼なら正直に答えてくれると思うんですけど…」

ル「いや…勿論それは知っている、だがどうしても男同士、特に友人同士なら出る話もあると思うんだ…それが知りたくてね、協力してくれるかな？」

マックイーン（ト）「なるほど…」つとつぶやき考えたが

マックイーン（ト）「やはり、友人を騙すというのは気が引けますので…お断りします」

ル「そうか…それは残念だ」

マックイーン（ト）「すみません、あきら」ところで」

ル「先日、担当でもチームメンバーでもない、ニシノフラワーと遊園地に行ったそうだね」

マックイーン（ト）「ど…どうして…それを…」

ル「いやなに…たまたま知り合いが見つけてね、証拠写真もあるんだが…これをメジロマックイーンにミス「先ほどの件、是非ともやらせてください」

「そうか…いい返事が聞けてうれしいよ、それではよろしく頼むよマックイーンのとレーナー君」

マックイーン（ト）「」

……………

……………

……………

テイオー「というわけで、カイチョーがお願いしてくれてね」

バクシンオー「それは、お願いというのでしょうか？」ムムム

ル「まあいいじゃないか、それよりもトレーナー君の本音が聞けるんだ、細かいことは気にしたら負けだ」

バクシンオー「うーん…まあ大丈夫ですね！」

「あとーついいですか？」

テイオー「何？」

バクシンオー「どうして、他のチームの方もいるんでしょうか？」

スベ「私のトレーナーさんの本音が聞けると聞きました」エヘヘ

グラス「少し気になっていましたので」ニコニコ

タキオン「モルモット君がどう思ってるのかき…いや実験の参考になると思ってる」

ネイチャー「わ…私は…別に…トレーナーさんがどう思ってるかなんてき…気にして

ないけど…皆が集まってるから気になって／／

テイオー「ネイチャーすごく乗り気できたよね？」

ネイチャー「そ…そ…そんなことないし!？」

……………

……………

……………

居酒屋

トレーナー「おろ？スぺのトレーナーまだ来てないな…」

マックイーン（ト）「そうですね…あ？来ましたね」

タキオン（ト）「おそいぞー」

スぺ（ト）「すまない…少し遅れた…」

ネイチャー（ト）「俺たちとりあえず生頼んでるけど、どうする？」

スぺ（ト）「ミルクでももらおうか…」

タキオン（ト）「ええ…」



## 数分後

トレーナー達「カンパーイ」カン

ネイチャー（ト）「ゴクゴク：プツハー!!それにしても：男性トレーナー全員でこれだけって本当にトレーナーの男性数すくないですよー」

トレーナー「それな：圧倒的に女性トレーナー多いよなー」

タキオン（ト）「女性トレーナーと言えば、トレーナーさん桐生院さんと会ったんだって?」

トレーナー「ああ：そういうえばあいつがやらかしてからだな：男性減ったの：」

ネイチャー（ト）「辞職者と行方不明者たくさん出ましたよね：」

スペ（ト）「そうだったのか?」

タキオン（ト）「いや：結構被害にあってたじゃん君：」

スペ（ト）「担当のために水族館の下見にいったり、温泉へ行つたくらいだが：仕事に一生懸命で流石だと：」

トレーナー「スペ（ト）さんらしいよ：ちなみに、彼女は、ベトナムへ行きました」

スペ（ト）とトレーナー以外「あつ：（察し）」

タキオン（ト）「あの頃は地獄だったな：タキオンのやつ荒れてさ：飲ませる薬の量が日に日に増えるし：最終的に桐生院に薬盛ろうとしてさ：止めるの必死だった：」

ネイチャー（ト）「私は、担当いなかったから被害はなかったけど……その時お世話になったチームにいたフジキセキが自分のトレーナーを監禁未遂おかししたりして大変だった……」

マックイーン（ト）「私は、喧嘩に巻き込まれて、怪我したくらいですかね……」

……

……

……

テイオー「桐生院さん……何したんだ……」

スペ「テイオーさんは、知らなくてもいい事もありますよ」ハイライトオフ

グラス「ええ……それにしてもスペ（ト）さん……本当にトレーナー業以外の事は全く興味ないですね……」ハイライトオフ

ル「……あの時を思い出すだけで……」ハイライトオフ

バクシンオー「あの頃は大変でしたねー」ハア

マルゼンスキー「ええ……そうねえ」ハア

マックイーン「え？マックイーン（ト）さんが怪我したですって?!」

テイオー「え？マックイーン？いつの間に来たの?!」

ネイチャー「あちゃーうちのトレーナーさんも災難だったねえ……」

タキオン「私のモルモット君は誰にも渡さないよ…。」ハイライトオフ

……

……

数分後

皆お酒を飲んだりとほどほど酔ってきた

さて…そろそろ…話を進めるか…

マックイーンのトレーナーは意を決し行くのであった

マックイーン（ト）「皆さん、担当やチームメンバーの話でもしませんか？」

タキオン（ト）「あれ？お前からそんな事言われるとは珍しいな」

マックイーン（ト）「いえ、たまにはこういう話もいいかなって…」

ネイチャー（ト）「たまにはいいね！そういうの！」

トレーナー「まあネイチャー（ト）さんの話は惚気話になるけどな」ニヤニヤ

ネイチャー（ト）「え？聞きたい？俺とネイチャーのラブラブな話聞きたい？それとも

俺の愛を語ろうか？俺ネイチャー好きすぎてさあ」

トレーナー「やっぱいいや…糖分摂取量過多で死ぬかもしれんし…」

ネイチャー（ト）「ええ!?!いいじゃん!!」

スペ（ト）「にぎやかになってきたな…」

……

……

……

ネイチャ「／／／」ボン

ネイチャーは顔を真っ赤にし爆発してた

テイオー「…」ニヤニヤ

スペ「仲がいいんですね」

グラス「そうですねー」

マックイーン「そういえばこの前、会長さんと喧嘩致してて、そのはずみで壁を壊し

たとき、お二人が…」

ネイチャー「きゃあああああああ／／／言っちゃだめええええええええ／／

／

……

……

……

マックイーン（ト）「じゃあ、ネイチャー（ト）さんは、長くなりそうなので、最後に

…最初は…スペ（ト）さんお願いします」

タキオン（ト）「お？ いいね！」

スペ（ト）「うん？ 俺か？」

マックイーン（ト）「はい、あ…そういえば、スペ（ト）さん最近エルコンドルパサーさんをチームに加えたそうですね？」

トレーナー「え？ マジ？」

スペ（ト）「ああ…グラスが誘ってくれたんだ」

トレーナー「なるほどな…」

通りで…俺が誘おうとするとグラスに妨害されたのか…

タキオン（ト）「そうなんだな、じゃあエルコンドルパサー含めて、チームメンバーの事と最後に担当について行ってみようぜ」

スペ（ト）「ふむ…チームか…」

スペ（ト）「そうだな…彼女らとの絆を信じて、ここまで来れたことは、本当に感謝しているし、みんないい子だと思っている」

「これでいいか？」

タキオン（ト）「相変わらず難しいねえ…まあお前らしいけどさ、じゃあ担当については？」

スペ（ト）「スペか…彼女を日本一のウマ娘にするために、今もこれからもずっと応援  
していきたいな」

………

………

………

ティオー「普通だね」

キタサン「普通ですわね」

マックイーン「ただ…いい信頼関係が築けていいですわね」

スペ「トレーナーさん…私…これからも頑張ります！」

グラス「うーん…聞きたいことではないのが残念ですわね」

………

………

………

トレーナー「あ？そういうえば、スペ（ト）さん」

スペ（ト）「どうした？」

トレーナー「グラスの体重最近はかりました？」

スペ（ト）「体重？」

トレーナー「彼女、スペちゃんに感化されたのか、めちやくちや食べるようになって、絶対太ってるよ」

スペ（ト）「そうか…：：～」

トレーナー「絶対太ってる、胸は相変わらずなのに太ももとおなか回り大きくなってるから間違いない！」

………

………

………

スペ「アセ

グラス「ニコニコ

エル「ガクブル

グラス「トレーナーさんはいつも私をおちよくるのが好きですよね」ニコニコ

テイオー「あ…あの…グラスさん？」

グラス「はい…大丈夫ですよ…明日までは我慢します」ニコニコ

テイオー「トレーナードンマイ…」

………

………

……

マックイーン（ト）「で……では次はタキオン（ト）さんお願いします」  
飲み会はまだ始まったばかりである



## トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー後編）

タキオン「どうやら、モルモット君の出番みたいだね」

テイオー「そういえば、タキオンのトレーナーって頑丈だよな」

スペ「ですね、食堂爆発に巻き込まれても全治半年で済んでますし」

マルゼンスキー「この前、夜間ドライブしてたら虹色に発光してたわね…」

ル「先日、自爆したけど次の日には完治してたな…」

マックイーン「？せる薬を飲んだら膨らんで、どこかへ飛んで行ったあと、効果が切れて上空数百メートル落下してもびんびんしてましたわね…」

サトノ「もはや化け物ですね」

ブライアン「この前、タキオンと並走してたぞ」

テイオー「ええ…」

タキオン「っふ…実験の成果さ」

………

………

………

マックイーン（ト）「タキオン（ト）さん、タキオンさんに色々と実験されてますけどお身体とか大丈夫なんですか？」

タキオン（ト）「うーん…最初は結構びつくりしてたりしてたけど、慣れちゃってもう気にならなくなっただな」

トレーナー「最初ってどんなことがあつたんですか？」

タキオン（ト）「今と大して変わらないよ？体が発光したり、筋肉が爆発したり、幽体離脱したり…」

トレーナー「ええ…」

スぺ（ト）「すごいな…ん?!…もしかしたらエルの練習に活かせるかもしれない!」

ネイチャ（ト）「いや…エルが可哀そうだからやめなされ…」

………

………

………

エル「トレーナーさん!!それだけはやめてくだサイ!!」

テイオー「それにしても…筋肉が爆発って何？」

タキオン「あーそれはだね、筋肉が膨張すれば、もつと力強く走れると思つて、筋肉が大きくなる薬を作つてみたんだが、膨張しすぎて破裂したんだ」

マックイーン「ドンビキ

ル「それで…よく君のトレーナーは無事だね…」

タキオン「生まれつき、怪我の治りが入らしいんだ」

グラス「治りが早くても…筋肉爆発したらそれどころじゃない気が」

………

………

………

トレーナー「それにしても、よくトレーナー続けれるよね、身体がいくつあっても足りない気がするわ」

ネイチャ（ト）「確かに」

タキオン（ト）「まあ最初は心が折れかけたけどな…ただ」

マックイーン（ト）「ただ？」

タキオン（ト）「あいつすごかわいいからさ、全然許せるんだよな！」

ネイチャ（ト）「ほおー」フムフム

タキオン（ト）「弁当を食べさせてあげないと、直ぐに駄々をこねてさー可愛いんだよなあ」

トレーナー「自分で食べないのかよ!？」

タキオン（ト）「そうだぞ、「はーやーくー食べさせてくれよー」ってさ抱き着いて駄々こねてさ…可愛すぎて尊死なりかけるから困るぜ…」

トレーナー「お…おう…」

タキオン（ト）「休日の時や長期休みの時も一緒に居ようと必死になるところや、駄々こねるところが愛らしくてさあ…」

………

………

………

タキオン「…／／／」

周り「ジー

スカーレット「タ…タキオンさん？」

タキオン「ま…まったく…モルモット君も仕方がない」テレテレ

「さて…新しい実験でもお…思いついたから私はラボに戻るとするかな」テレテレ

テレビへただなあ

タキオン「ん？」

………

………

……

タキオン（ト）「ただなあ…最近甘えすぎたかなって少し反省してるんだよな」

トレーナー「急にどうした？」

タキオン（ト）「いやさ…よくよく考えてみたらさ、タキオン本当に何もできないんだ  
…」

「いづれ近いかわからない将来俺が誰かと結婚するとするじゃん？」

マックイーン（ト）「え？結婚願望あるんですか？」

タキオン（ト）「いやいや、もしもの話だよ、まあ俺もいづれはって思ってるよ？だからさもし俺が家庭を持つたらさ、あいつの世話ができなくなるかもしれないじゃん？」

スベ（ト）「確かに、難しいかもしれないな」

タキオン（ト）「そうなったときさ、あいつ一人で生きていける気がしないからさ…ぼちぼち甘えるのもやめた方がいいかなって思うんだよね」

マックイーン（ト）「ははは…それは…マズイ…」アセアセ

トレーナー「ん？なんか言った？」

マックイーン（ト）「いえ…なんでもないですよ」アセアセ

……

……

……

ル「テイオー！スカーレット!!タキオンを押さえるんだ！」

テイオー・スカーレット「え？」

そう返事をした時には、すでにタキオンは……

部屋の入り口前で、エアグルーヴとブライアンに押さえ込まれていた

タキオン「はなせ!!嫌だ!!モルモット君が結婚なんて嫌だあああ!!」

エアグルーヴ「落ち着け!!例え話だから!!」

ブライアン「力強!？」

タキオン「どうして……そんな事言うんだよ……モルモット君……ハイライトオフ

タキオンはへたり込んでしまった

ブライアン「ひとまず席に戻ろうな」

そういい、席へタキオンを引っ張るブライアンとエアグルーヴ

タキオン「……」ブツブツ

……

……

……

さつきの発言まずいのではと考えるマックイーン（ト）

でもまあトレーナーさんのチームしか聞いてないだろうし、タキオンさんは聞いてないから大丈夫だろう…

そう思い、そう考えることで、少しほっとしているマックイーンのトレーナー

タキオン（ト）「そういえばさ、さつき少し話題に出てたけどさ、結婚願望とかお前らあつたりするの？」

スベ（ト）「考えたこともなかったな」

タキオン（ト）「いや…お前はそうだろうと思うわ」

ネイチャ（ト）「俺はあるぞ！ちなみに相手は…」

トレーナー「あーはいはい、式には呼べよな担当と結婚おめでとうって言つといてやるわ」

ネイチャ（ト）「なんか反応ひどくない!？」

「で、お前らはどうなんだよ？」

マックイーン（ト）「うーん、ないって言ったらうそになりますかね」

トレーナー「でもお前の大好きな少女と結婚はできないぞ？」

マックイーン（ト）「いや…流石に…犯罪は犯しませんよ…」

マックイーン（ト）「以外（…本当かな？）」

トレーナー「でも、意外だな…一応そういう事も考えていたんだな」

マックイーン（ト）「ええ…まあ…いずれはできたらとは思いますが？トレーナーさんはどうですか？」

トレーナー「俺？うーん…わかんないなーとりあえず先生を超えたら考えるわ！」

ネイチャ（ト）「そんな事言ったら婚期を逃すぞ？」

トレーナー「うるせー」

………

………

………

ル「ほお…」

他「…」

マックイーン「…これはいい事を聞きましたわ…」

タキオン「…モルモットクン…コウナツタラ…クスリ…」ブツブツ

………

………

………

トレーナー「さて…次は俺か？それともお前がやる？」

マックイーン（ト）「え？」



そうか…私もやらなきや不自然ですよね…ただ…マックイーンさんたちは聞いてないよ（※聞いています） 思うし大丈夫か…

ネイチャ（ト）「トレーナーさんもマックイーン（ト）さんも1人づつ聞こうと思うからどっちでもいいぞ」

トレーナー「ええ…長くなりそう…」

タキオン（ト）「とりあえず数が少ないマックイーン（ト）さんから行こうか！」

マックイーン（ト）「はい…それでは…」

# トレーナー達のお疲れ様会（マックイーントレーナー前編）

マックイーン「ついに、私のトレーナーさんの出番ですわね、結婚願望もあるみたいですし、ここで言質を取って……メジロ家に向かい入れ……次期跡継ぎをたくさん作りますわ！」ウマピョイデスワ

テイオー「うーん……うまくいくといいね」オチガミエテキタヨ

ダイヤ「マックイーンさんなら大丈夫です！ マックイーンさん応援してます！」

マヤノ「トレーナーちゃんはマヤチンに夢中だからマックイーンの思い通りにならな  
いと思うの」

ライス「お兄様……」

……

……

……

マックイーン（ト）「では、まずは……ダイヤさんから行きますか」

トレーナー「お……いいね！ 入ってから結構経つけどどう？」

マックイーン(ト)「そうですね、すごいいい娘ですね、勉強熱心で、練習は一番頑張ってますし、本当に素晴らしいという言葉に尽きますね」

「マックイーンさんに追いつこうとする熱意は本物ですし、今はまだ名前だけにダイヤの原石ですが……しっかりと磨いて素晴らしいダイヤモンドにしていきたいですね」

トレーナー「おーいいね！うちのキタちゃんも負けてられないねー」

スペ(ト)「最近の新人の娘も侮れないな……スペ達も負けずしっかりやっていかねば」

……

……

……

ル「ダイヤ……だけにダイヤの原石か……マックイーン(ト)君もなかなかやるではないか」ツフ

ネイチヤー「あはははは」

テイオー「ダジャレだけど……笑うところなの?！」

ダイヤ「トレーナーさん……」キユン

マックイーン「つむ?！」

キタ「ダイヤちゃん！頑張ろうね！でも負けないよ！」

.....

.....

.....

マックイーン（ト）「ただ最近ですね、少し困ったことがありますて……」

タキオン（ト）「困ったこと？ どうした？」

マックイーン（ト）「キタサンブラックスさんとの事なんですけど……」

トレーナー「あ……」察し

マックイーン（ト）「はい……お察しの通り……彼女らの関係についていささか苦情と

言いますか……」

ネイチャ（ト）「もしかして……あれか……俺も見ただけど……」

スぺ（ト）「？」

トレーナー「ダイヤちゃんがキタちゃんとかでちゆね遊びしてることか……」

マックイーン（ト）「はい……彼女らの交友関係にどうこう言いたくはありませんが

……」頭抱え

トレーナー「……間接的にクリークにキタちゃん預けた俺のせいだわ……ごめん

……」

スぺ（ト）「でちゆね遊びってなんだ？」

タキオン（ト）「知らない時もいい事もある……」  
スベ（ト）「そうか……？」

……

……

……

キタ「」

ダイヤ「」

テイオー「ええ……」ヒキ

他の娘達「……」ヒキ

ダイヤ「えつとこれは違うんです！」

ル「サトノダイヤモンド……君たちの交友関係にどうこう言いたくはないが……生徒会として少しだけだけないな……」

エアグルーヴ「流石に……風紀が乱れるから……その……学園内ではやめてほしいんだが……」

ダイヤ「違うんです!!」

キタ「そ……そうです……でちゆね遊びなんて！好きでやってたわけでは……」え

……そうなんですか!？」え？」

声がする方へ振り向く、そこには、ガラガラを落とし、クリークが少し悲しい顔をしていた

クリーク「キタちゃん……そんな……今まであんなに喜んでたのは……嘘なの!?」

キタ「え……え……そ……それは……」

クリーク「……そうよね……私の我儘だったのよね……ごめんなさい……キタちゃん……」

素晴らしい目に少し涙をためたクリークは部屋を出ようとするが

キタ「ママ！ 待つて!! 違うの!! 本当は好きなの!! ママ!! 待つてえええええ

え! ママああああああああ!!」

クリーク「キタちゃん!?」 嬉し泣き

ダイヤ「キタちゃん……ママは私ですよおおおおおおお!!」

ル「椅子から滑り落ちる

エアグルーヴ「テーブルに頭をぶつける ←やる気が下がった

テイオー「ぶろうううう」飲んでいたハチミーを吹く

マックイーン「きゃああああああああああ」テイオーが吹いたハチミーを顔面

に食らう

通りすがりのミホノブルボン「……? 想定外の事態が発生」宇宙ブルボン

.....

.....

.....

マックイーン（ト）「……なんか悩みを打ち明けたら少し楽になりました……」

トレーナー「そ………そうか……」

マックイーン（ト）「これからどうするかは、ひとまず向き合つて考えてみます……」  
トレーナー「俺もそうするよ……キタちゃんがこうなったのは俺のせいでもあるし……」

ネイチャ（ト）「ひ………ひとまず………続きやろうぜ！」

タキオン（ト）「そ………そうだな、次はマヤノトップガンなんてどうだ？」

マックイーン（ト）「そうですね……マヤノさんは、ライスさんの次にチームに加入してくれたんですけど……」

「彼女はすごいの一言ですね……どんな作戦でも完全にこなす……天才なんだなっと思  
いましたよ」

ネイチャ（ト）「確かに、彼女はすごいですよ」

スペ（ト）「逃げや先行かと思つたら差しも追い込みもできるからな……」

マックイーン（ト）「それに、毎日元気で明るく人懐っこいですしね……正直最高です」

トレーナー「通報した」

マックイーン（ト）「まだセーフですよね!?!」

……

……

……

マックイーン「グヌヌ……」

「わたくしも明るく人懐っこい感じになればもつとトレーナーさんに見てもらえるのかしら?」

ティオー「やめた方がいいよ……正直言つて似合わない」

マックイーン「な……!?!」

……

……

……

マックイーン（ト）「ただ……彼女も最近……」

トレーナー「ん? マヤノも最近なんか交友関係であるの?」

マックイーン（ト）「いえ……交友関係ではなくて、最近視線が怖いと言いますか……」

行動が過激になってきたと言いますか……」



ネイチャ(ト)「もしかして……しつとりしてると?」

マックイーン(ト)「そうなんですかね……」

トレイナー「ちなみにどんなことがあった?」

マックイーン(ト)「はい……例えばレースが終わった時とか……「ランディングキーツス」って言つて本気でキスしてくるし……」

トレイナー「うへえ……ガチャん……でしたの?」

マックイーン(ト)「ギリギリのところ回避してましたが……この前……逃げきれず……」

タキオン(ト)「それはあかん……」

スぺ(ト)「キスしたのか……」

ネイチャ(ト)「俺はよくするよ」

トレイナー「お前はお前であかん」

……

……

……

ネイチャー「なんで、そんな事言っちゃうのおおおおお!?  
 / / / 「カオマツ

カ

テイオー「ネイチャー進んでるね……」イイナー

ル「ワタシモ……トレーナークンと……」ブツブツ

スペ「いいなー私もトレーナーさんとそのくらい仲良くなりたいです」

グラス「あらら」フフフ

なんてキャツキャウフフと話に花が咲いている横でマックイーンは

マックイーン「は？ キスした？ は？ マヤノさんとした？ は？」

ハイライトが段々と薄くなってきた

……

……

……

マックイーン（ト）「まあ……事故だから……マヤノも本気じゃなかったはずだと思

ますし……」

トレーナー「お前、俺より先に刺されるぞ？」

ネイチャ（ト）「お前も大概だな」

マックイーン（ト）「後は……アクティブすぎるのか……よくデートに連れまわされま

すね……」

トレーナー「どんどん彼女の思い通りに事が進んでるやん……」

マックイーン（ト）「ただ……なんというかまだまだまだ子供な感じなんで……ずっとそのままできてねって祈ってます」

タキオン（ト）「まあ実際まだピユアなお子様だからねー」

トレーナー「幼いうちにしつとりが治るといいな……」

マックイーン（ト）「ええ……」

……

……

……

マックイーン「……最近のお誘いよく断られてる理由はやっぱりマヤノさんとデートだったのですね……」ハイライトオフ

テイオー「うわあ……めっちゃしつとりしてる……」

スベ「これがしつとりですか……」

エル「スベちゃんとトレーナーさんが仲良くしすぎてると、グラスがよくなってるやつですね!!」

グラス「エ〜ル〜?」

エル「ひえ!!」

……

……

……

マックイーン（ト）「次は、ライスさんですかね……一言で言えば……あんな妹が欲しかったので……すごくうれしかったですね」

「理想の妹!! 私がお兄様だ!!」

トレーナー「お……そっか、口調変わってんぞ」

マックイーン（ト）「あ……すみません、私、姉がいるんですけど、妹に憧れがあります……」

「妹が来てくれたと思えば、本当にうれしかったですね」

トレーナー「そんなもんかねー？ 一人っ子だけどよくわからないや」

スペ（ト）「マックイーン（ト）姉がいたのか」

ネイチャ（ト）「あれ？ 知らなかったんですか？ こいつもイケメンだけど姉もすごく美人でさ!!」

マックイーン（ト）「いや……イケメンって……」

トレーナー「ロリコンじゃなければいいことないのにな……」

マックイーン（ト）「べ……別にいいじゃないですか……」

スペ（ト）「そうなのか」

ネイチャ(ト)「そうそう、トレーナーが一目惚れするくらい超美人なんだよね!」  
マックイーン(ト)「ア……マズイ……」

……

……

エアグルーヴ・ブライアン「会長落ち着いて(落ち着け)!!」

ル「離せ!! 今すぐトレーナーに聞かねばいけないことがあるんだ!!」

テイオー「マックイーン? 離してくれない? ボクちよつと用事ができたんだから邪魔しないでくれるかな?」

マックイーン「テイオー……少し落ち着きましょう?」

スペ「そうですねすよテイオーさん……少し落ち着きましょう」

テイオー「ボクは落ち着いてるよ? だから離して?」

マルゼンスキー「スカーレット……止まりなさい……貴方が行くと……方向音痴でブリーダーズカップあたり勝ってきそうだからやめなさい」

スカーレット「あたしだけ扱いひどくない!？」

キタ「バブー」

クリーク「よしよしいこでちゅねー」

ダイヤ「おねんねしましょうねー」

サクラバクシンオー「あれ？ ライスシャワーさんがいませんね？」

なんてカオスな現場であつたが

テレビへまあ……振られたんだけどな！

この一言で現場が収まった

……

……

……

マックイーン（ト）「まあ話は脱線しましたが、彼女も最近ですね……」

トレーナー「今度はなんだ？」

マックイーン（ト）「至る所で偶然出会うんですよ……あとずっと後を付いてきて

て、軽くホラーなんですよね……」

「流石に怖いと言いますか……いくら何でもやりすぎかと……」

トレーナー「お……おう……そうだな……」

トレーナーはある席を見る、そこには見慣れた黒いウマの耳をした、娘がいた……

？ 「お兄様……」

マックイーン（ト）「さて、最後はマックイーンさんですね」

トレーナー「あれ？ カレンチャンは？」

マックイーン（ト）「ああ……彼女は一時的に預かってただけなので、チームではないですよ？」

タキオン（ト）「あれそうだったんですね、じゃあ専属やってた彼女の所に戻ったんだ」  
マックイーン（ト）「はい」

トレーナー「なら……今度短距離枠でスカウトしてみようかな……」

マックイーン（ト）「いいんじゃないですか？」

……

……

……

マックイーン「ついに……ついに……私の出番ですわ!! さあ酔った勢いで私の愛を語るのです！」

テイオー「トレーナー振られちゃったんならしかたがないなー今度ボクが慰めてあげなきゃね」ニシシ

ル「……し……しかしマックイーン（ト）君のお姉さんも見る目がないな……明日私  
がトレーナー君を慰めてあげねば……」

スぺ「なんといいですか……」





# トレーナー達のお疲れ様会（マックイーントレーナー後編）

※トレーナーは○表記      例（テ）↓テイオーのトレーナー

昔ある曇りの日

わたくしは、足に違和感があり検査をした

検査してから少したってから、メジロ家の当主であるおばあ様に呼ばれ、

左前脚部繋靱帯炎を発症していることを告げられた。

そして、もう走るのをやめるよう言われまして…

そのあとのことはあまり覚えていなかった

気づいたら雨が降る中、自宅の練習グラウンドで足の痛みに耐えながらひたすら走って…

次第に痛みに耐えれなくなって…

今にも今まで積み上げてきた物が崩れかけて…壊れてしまいそうになった時…

？「マックイーンさん…」

目の前が涙で曇る中に彼が…わたくしのトレーナーさんがいたのです…

ふと思いついた辛い過去

たぶん彼の事を本当に愛おしくなったのは、

その一件からなのだろうと：彼がいたからこそ今わたくしは、

こうして再び走れている彼の為にわたくしは恩返しをしたい、

それとともに彼とは、これからもずっと一心同体として支え合っていきたいとわたく

しは思っていた

そんな彼からの本音が今まさにこの飲み会の席で聞ける：

マヤノさんとデートしたとか色々聞き捨てならない事もありましたが、

わたくしが彼にとつて一番であることをこの場で証明してくれるに違いないと

わたくしは、期待していた

………

(テ)「さてと、次はマックイーンだな！」

(マ)「マックイーンさんですか：何から話せばいいのでしょうかね：」

(ス)「そういえば、話は変わるんだけど。噂で聞いたんだが、(マ)は元々医療関係のス

ペシヤリストなのか？」

(タ)「あーそんなことタキオンが言ってたな」

「マックイーンのとレーナー君は医療関係でとても素晴らしい学者だったと、この学園

のトレーナーになってたからびっくりしたよって」

(マ)「懐かしいですね：そんなこともありました。元々親が医者だったり医療関係の家系なので：」

(テ)「学生の頃、最初は医学部だったのに、気づいたら俺と同じ学科に切り替わってたんだよな医学部にいたころは、そりゃ世界が騒ぐくらい優秀だったらしいぞ」

(マ)「まあ色々と事情がありました、トレーナーになりました」

(タ)「なるほど：マックイーンが左前脚部繋靭帯炎になっても今はこうして走ってれるのはなんとなく納得した」

(テ)「本当にこいつには、お世話になったよ」

「だってテイオーが三冠取れたのはこいつのおかげかもしれないし」

(ネ)「そうなのか？」

.....

テイオー「え？そうなの？」

ルドルフ「どういうことだ：」

.....

(テ)「テイオーが日本ダービー後太り気味で色々と苦労してたじゃん？」

（タ）「ああ…確かそうだったな…その数日後に調理室爆発に巻き込まれて入院してたからあまり覚えてないが…」

（ネ）「色々とありましたねえー、うちのネイチャーもすごくテイオーの事心配してたけど、菊花賞のテイオーが少しトラウマになったり大変だったなあ〜」

（ス）「で？テイオーの太り気味がどうしたんだ？」

（テ）「実はさあ…俺が太り気味つての知つたの皐月賞後なんだよね」

（タ・ス・ネ）「え？そうなのか？」

……………

テイオー「え？」

……………

（テ）「それでまあこいつに相談したわけなのよ」

（回想）

テイオーが皐月賞勝利後のある日

（マ）「太り気味ですか…」

（テ）「そうなんだよなあ…あいつさあ事あるごとにハチミールばかり飲んでるんだけどさ、こう最近太ももとか腹回りが膨らんできてるんだよね…」

（マ）「はあ…それは…重量も増えていますね…」

(テ)「だけど胸回りに肉がつかないのは…なんとというかどんまい…つてまあそこはおい  
ておいて、ダービーに支障きたしそうなんだよね…ダイエツトかなあ…」

(マ)「うーん…ダイエツトはダービー後まで待つてもらっていいでしょうか？」

(テ)「え? どうして？」

(マ)「実は皐月賞もそうですがテイオーさんの走りを見て少し気になることがあります  
して」

(テ)「気になるところ？」

(マ)「はい…彼女の走り方は確かに素晴らしいですが、少し足に負担をかけているつぽ  
いんですよね、もしかしたら骨折などの危険性もあります」

(テ)「マジか…なら走り方を見直したり…つてダービーまで間に合わないか…」

(マ)「ですが、このまま重量が増えて行つてるのならもしかしたらダービーで骨折とい  
う危険性は回避できるかもしれません」

「重量が増えることでバランスが変わつて、今まで一番負荷がかかる箇所が変わつてし  
まうので、一旦は危険を回避できます」

(テ)「なるほど…」

(マ)「ダービーの後、菊花賞まで結構期間があるので、その時にダイエツトとその走り  
方を直してみるのがいいと思われれます」

「それに今の実力があれば、多少太り気味でもダービーは大丈夫だと思いますよ」  
（回想終わり）

（テ）「ということがあってな、もしかしたらテイオーが骨折してたかもしれないんだがこいつの助言通りにしたら：無事三冠は取れたんだよね」

（タ）「そんなことがあったんだなあ」

（マ）「あくまでも私個人の予測ですけどね：」

……………

テイオー「皐月賞の頃から太り気味ばれてたんだ：」

マックイーン「太り気味：クラシック：菊花賞：天皇賞：ツウ：頭が：」

ル？「太り気味：ハチミー：菊花賞：」ガクガク

太り気味にトラウマの2人が頭を抱えている中

テレビからテイオーのトレーナーがある爆弾発言をする

テレビへ「ちなみにこいつマックイーンが太り気味だったの夏前から知ってたのに、お灸を添えたいからって天皇賞まで様子見してたらしいんだぜ」

マックイーン「…は？」

.....

(ネ)「え？ そうなの？」

(マ)「いや……まあ……そうですね……彼女一人でなんでも強引に推し進めたり等色々は無茶苦茶してたので、そこらへんも反省してもらいたかったですし……」

「でも……天皇賞では負けられないように調整はしつかりはしました……だけどまさか……ゴール後にスカートがずれて……公衆の面前でさらけ出すとは……」

(ス)「確かに、あの頃のマックイーンは無茶苦茶だったな」

(テ)「確かにぶっ飛んでた……合宿の夜中、練習で観れなくて録画してた野球観戦を大声でして隣の部屋で寝てたブライアンがガチギレしたり……」

(ネ)「合宿終わって帰るときは、無人島まであるはずもないスイーツ店を求めて泳いでいったり……」

(ス)「スペとスイーツ食べ放題で張り合って学園近くにある数多くの店を閉店に追い込んだらしいな……」

(マ)「えつと何とといいますか……ご迷惑おかけして申し訳ございません」

「なんて言いますかあの頃は、押しに弱かった私も悪かったんですが……」

「流石にこのままではよろしくないと思いました、これを機に反省してくれたらなあって思いまして……」

………

マックイーン「……」プルプルプル

テイオー「マックイーン……真っ赤にしてプルプル震えてる……」

ブライアン「まさか22時に隣からかつ飛ばせー!!なんて大声が聞こえてびっくりしたな……」

マヤノ「マックイーンちゃん……」

ルドルフ「ん？天皇賞でそんな事があつたのか……」

エアグルーヴ「あ……会長は少しお休みになつたので、知らなかつたのですね」

マルゼンスキー「（ああ……あの時ルドルフは、幼児退行しててずっとトレーナー君と遊んでたんだつたわ）」

………

(タ)「デビュー前はメジロ家のご令嬢だとかすごく噂になつて何というか今とイメージ真逆だったのになあ」

(ネ)「でも、今の方がいいけどね」

(テ)「今でもゴルシの次にぶつ飛んでるやべー奴だと思つてます」

(マ)「ハハハ……」

(ネ)「話が半分それちやつたけど、実際（マ）さんはマックイーンの事どう思つてるん



だい？」

(マ)「そうですね……」

色々と思ひ返してみた：

出会った当初、スカウトはしてみたが新人だったし断られた

けれど、私の手作りお菓子につられて専属になったんだっけ……

そこからは

デビューからクラシックまでは特に何事もなく彼女と私の二人三脚で頑張ってきた

……

いつからだろうなあ……テイオーさんのダイエット作戦で乗り気になったあたりかな

……

そこから素になったというか若干暴走気味になったんだっけ……

そこからの天皇賞でパンツ晒す事件か……

で有馬記念までスイーツ禁止にした結果、菊花賞のテイオーさんなんか比でない勢い

で有馬記念勝つたりと……

なんだかすごいウマ娘だなんて思ってたんだけど……

あの頃か……彼女が

左前脚部繋靱帯炎ってなった時……彼女が今にでも崩れて壊れてしまいそうになった

その姿を見て…

やっぱり一人の女の子なんだなって…夢があつてそれに一生懸命で、叶わなくなると泣いてしまう

か弱いところもあつて、そう思うと居ても立つても居られなくなつたんだっけ…だから決めたんだっけ…

(マ)「守つてあげ…というか…うーん…一心同体ですかね」

(テ)「一心同体？」

(マ)「身も心もつてのは無理かもしれないですが、私は彼女を自分自身だと思ひ支えて行きたいですかね…」

「それに、メジロ家の方にも約束しましたしね、彼女は責任をもつて私が支えます！つて」

(テ)「（これめっちゃ取り返しのつかない約束してるやつやん）」

(ネ)「（これ親に娘さんをください的な奴してるやつやん）」

(タ)「（これは実質うまぴよいでは？）」

(ス)「（これが絆か…）」

……………

マックイーン「キマシタワー」ウマピヨイウマピヨイ

マヤノ「マックイーンちゃんずるい!!マヤもトレーナーちゃんと親に挨拶いく!!」  
ルドルフ「親公認になっていたのか…」

テイオー「ボクもパパやママにトレーナーをあわせようかなあ…」  
ルドルフ「む?ダメだぞ!テイオー」

テイオー「ええ…いいじゃん!」

………

(テ)「メジロ家にすごいん事言ってるけど…お前メジロ家に行くの?」

(マ)「え?どうしてですか?」

(ネ)「いや?娘さんを支えますって言ったんでしょ?断られたの?」

(マ)「マックイーンさんのおばあさんによるしくお願いしますってものすごく頼まれたけど?」

(テ)「(あーよくある勘違いというかこの重大さを気付いてない奴だ…)」

(ス)「まるで、親に婚約の許可をもらうやり取りだな」

(マ)「え?婚約?私とマックイーンさんが?いやいやありませんよ」

「一心同体とは言え、トレーナーとウマ娘の関係ですよ、そんなことになるわけないじゃないですか」

(テ)「(マックイーンに聞かれてたら死んでたな)」

（ネ）「ええ…（マックイーン可哀そう）」

（ス）「そうか…」

（タ）「これはひどい（そうなのか）」

……………

スベ「マックイーンさん止まってください！」

エル「ステイデース！」

マックイーン「離してくださいまし！わたくしは！わたくしは！わたくしは！」

スベとエルがマックイーンを押さえる

だがマックイーンに振り切られ

マックイーン「トレーナーさんに教えなくては!!わたくしが…」バタン

マックイーンが急いでドアに向かいそう言いかけた時であった

向かおうとしていたドアが開きそこから1人のウマ娘が

ゴルシ「お？マックイーンみつけ！確保！」バス

マックイーン「な!？」

テイオー「ゴルシ!？」

突如現れたゴルシがマックイーンにズタ袋を被せた

マックイーン「ちよつと！ゴールドシップさん！なんですの！離しなさい!!」

ゴルシ「これからゴルちゃんとSOP財団に殴りこみに行くからダメだ！」

マックイーン「なんですか!?!その危ないものを収容保護してそんな財団は!?!やめてくださいまし!命がいくつあっても足りませんわ!」

ゴルシ「つべこべ言わずにいくぞ!閉園後のネズミの王国へ」

マックイーン「それだけはやめなさい!本当に消されますわよ!?!いや…これから…トレーナーさんの元へ…ちよ…はな」バタン

そうしてマックイーンはゴルシに連れ去られていった

一同「…ええ」

ルドルフ「と…とりあえず…メジロマックイーンはゴールドシップに任せよう…」

テイオー「…うん…」

……………

(ネ)「ちなみにだけど…一番ってなるとどの娘?」

(マ)「うーん…優秀はつけたくないですが、一番ってなりますと私はマックイーンさんを選ぶかもしれませんね」

?「オニイサマ!?!」ガタ

……………

マヤノ「ハイライトセミオフ

ブルボン「!?…今ライスの気迫が!?」キピーン

サトノ「マックイーンさんおめでとうございます!」

テイオー「マックイーンが聞いていたら…どんまい…」

………

(テ)「さて、帰りますか!」

(ス)「おい」

(タ)「お前の番だろ」

(テ)「ええ…」

(ネ)「1番のメインディッシュ何だから逃げるのはなしだぞ!」

(テ)「はあ…分かったよ」

(マ)「まずは生徒会辺りから」

(テ)「チーム以外もやるのかよ!」

他一同「当然!」

(テ)「うへえ…」

………

次回へ

おまけ

ゴルシ「よっしやー!! やつてきたぜネズミの王国!!」  
マックイーン「どうして…こんな所に…」ヨヨヨ  
? 「ハハ! どうやら悪い子がいるようだね」